
山神少女

ヒトエビト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山神少女

【Nコード】

N6749N

【作者名】

ヒトエビト

【あらすじ】

気が付けば透明人間だったり異常に身軽になっていたり、あげく山から出られなかったり。呑気で気分屋で理屈屋な巫女バイトの「私」が、すったもんだのてんやわんやでいつの間にやら山神様に!?!「そんな大層なもんじゃないんだけだな」

基本独り言の見えない系異世界召喚物語。

会話が増えてきました。

第0話 臆病少年と満月の夜

——ほう、ほう……

梟ふくろうのくぐもった声が鬱蒼たる木立をすり抜け、真夜中の朔月山さくつきやまにこだまする。

どことも言えない方角から響いてくるその声は他の獣たちの遠吠えと重なり合い、その不気味さを増しに増して少年の鼓膜を震わせた。

知らず、こくりと喉が鳴る。

見開いた眼の側を汗がつうと流れた。

不気味な声が、濃い闇が、必死の思いで押さえつけている感情をいともたやすく引きずり出し、さらに容赦なく掻き立ててゆく。見下ろせば、手も足も深い闇の中に沈みこんでいる。黒一色に塗りつぶされた世界に目が慣れることはなく、そこにあると分かるのは重苦しい闇だけだ。

もはや少年は、自分が山のどの辺りにいるのかすら分からなくなっていた。

——ほう、ほう……

けれど自分は足を止めてはいけないのだ。

少年は唇を噛みしめ、青褪めた顔を上げる。

恐怖に震える心を叱咤し、闇に閉ざされた道へ踏み出そうと一歩足を出した。

そのとたん、突風めいた横殴りの夜風がごとと吹きわたった。四方に伸びる無数の枝葉が、一斉に狂おしくざわめく。

闇の中、ざわざわと体を揺らす木々たち。

それはまるで、夜の山に不用意に入った愚かな少年を高らかに嘲笑う化け物のようで。

元来臆病な少年の心は、そうしてあっけなく限界を迎えた。

怖い、怖い、怖い……！

固く目蓋を閉じてみても真つ暗闇であることに変わりはなく、耳を塞いでみても早鐘を打つ己の心臓や荒い呼吸音が鮮明になるだけだった。

そうしている間にも否応なしに押し掛かってくる、途方もなく大きな恐怖の塊。

たまらなくなって座りこんだ瞬間、右足首に鋭い痛みが走った。ついさつき木の根に引っ掛けてしまった所だ。もしかすると変な風に捻ったのかもしれない。自覚した途端、そこはずきずきと痛みを主張しだした。

少年はへたり込んだまま右手で足首を握りしめ、左手で顔をめちやくちやに拭った。

十二になつたばかりの彼は、里の少年たちから臆病者と揶揄されるたびに幼子のように泣きじゃくっていた。泣く以外のことができないのが情けなくて、馬鹿にされるのが悲しくて。

だが、そんな彼を面白がって囃したてる少年たちはここにはいない。ここにあるのは終わらない恐怖、消えない不安、そして足の痛みだ。

今はそれらが止まらない鳴咽となり、彼の喉を激しく震わせ続けている。

やがて少年は鼻水をすすりあげながらゆるゆると夜空を仰ぐ。

確か今夜は満月だ。

ほんの少しいい、この暗闇を照らす光が欲しかった。

だが少年の目には、果てしない漆黒が厳然たる事実として無情に広がるだけだった。

「カンナ……。カンナっ、カンナカンナ！」

夜の山は人に許されぬ場所。

きつと獣も物の怪も皆、舌舐めずりしながら爛々とその眼を光らせているのだ。

暗がりの奥で、それとも手前の茂みで、いやいや自分のすぐ後ろで……。

それが怯えからくる単なる想像だと分かっているとしても、一度そう思い始めるともう止まらない。疑心や不安は野火のごとく全身に広がっていく。そしてその野火は鋭敏な感性が剥き出しの人間、つまり幼い者にほど、より一層絶望的なものとして牙を剥くのだと少年は知っていた。

だから彼は、妹の名を呼んだ。

今もこの山のどこかで恐怖に身を震わせているだろう、たったひとりの妹を。

はじめは掠れた声だったが、己の声が火付けとなり最後は叫ぶようにして何度も呼んだ。

返事を期待して呼んだのではない。

それは己を奮い立たせるためだった。

痛む足を引き摺って、臆病者と呼ばれる少年は立ち上がる。

よろける体をなんとか踏ん張り、押しとどめる。涙も鼻水も嗚咽も、何一つ止まっていなかった。いまだ月は無く、森はなお深い。けれど少年は頬を濡らしながら再び歩き出す。

兄として、たった一人の家族として、そうすべきだと知っていた

から。

決して足を止めてはいけなと。

ふと、少年は違和感を覚えた。

静かだ。

さつきまで、梟や獣や虫が鳴いていなかったか。風が唸り、木々がざわめいていなかったか。まるで山全体がじつと息を殺しているかのような。静寂が、夜の底に満ちている。

奇妙な静けさに戸惑い、二、三度瞬きを繰り返し……次の瞬間、少年は息をのんだ。

『誰か』が、頭の上に手を置いたのだ。

その手はゆっくりとした動きで、彼の髪の毛を揺らす。

二回、三回。

それは母の優しい手つきを思い起こさせる、懐かしい動作だった。ああ、頭を撫でられているのかと少年が呆然としたままだ理解した時、その手は音もなく離れていった。驚きはあっても不思議と恐怖

は無かった。いつの間にか涙が止まっている。
そうだ。

泣いている自分の頭を撫でるとき、母はよくこう言ってくれた。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

記憶の言葉と重なって聞こえたのは、笑い含みの澄んだ声。
それは少女の声だった。

はっと顔を上げるよりも早く、その姿無き少女の声が「おいで」と響く。

ふらりと少年は歩き出した。

声のする方へ痛んだ足を引き摺る。暗闇の中、おいでおいでと優しく導かれるままに。

もはや臆病な少年の心には一欠けらの恐怖も存在していなかった。
あんなに押し掛かっていた恐怖の塊は霧散していた。この声は何なのか、自分は今どこへ向かって歩いているのか、いやそれ以前にこれは本当に現実なのか、どれ一つとして答えは出ない。

ただ、分かることが一つだけあった。

この声には全く悪意が感じられないのだ。

人の悪意に敏感な少年だからこそ、それだけははっきりと確信できた。

そして彼にとって歩みを進めるにはそれだけで十分だった。

——おいで、おいで、こっちにおいで

どれほどの時間、そうして足を進めただろうか。

「お兄い……？」

不意に、小さな声がした。

激しく泣いた後のような、疲れ切った弱々しい声。

「カンナ！？ どこだカンナっ！」

七つの小さな妹は、大木の内側にできた洞うろの中にうずくまっていた。

おにい、おいと抱きついてくるたった一人の幼い家族をしつかりと腕に抱きとめて、その温かな体温に少年は安堵の涙を流した。

ああ、あの声は妹の居場所まで案内してくれていたのだと理解しながら。

安心して気が抜けたのかそれとも単に力尽きたのか、くたりと眠ってしまった妹を大事に抱え上げ、少年は背後を振り返った。大木の周囲はやや開けた場所になっており、首を伸ばして見渡すと麓の里の灯りが随分下の方にちらついているのが目に入る。

そこでようやく、少年は自分がどこに居るのか推測することができた。

なんてことだ。どうやらここは朔月山ひくつきやまの山頂付近のようだ。

明るい昼間ならばともかく真夜中にこんな場所まで登ってくるなんて、と遅まきながら妹の無謀さと行動力に驚いた。

見つかつて本当に良かった。頭ごなしに叱るのはよそう、そしてなぜこんな真似をしたのか明日きちんと問い質そう。そう決心してすやすやと眠る妹を抱えなおした時、急に視界が明るくなった。

月だ。

雲間から、僅かな欠けひとつ無い真ん丸の月が顔を出している。
その月明かりが暗闇を打ち払い、地上を白く照らし出す。
劇的に変化した白い世界。
その中で少年は見た。

不思議な装束に身を包んだ、黒髪の少女を。
白い着物に緋色の袴。

少し離れた場所で月を見上げている、その儚げな横顔。
ふと少女が振り向く。

伏せた睫毛が持ち上がり、視線が確かに交差した。

もはや少年の心に恐怖は存在していなかった。
ただ、何かが強烈に彼の心に根付いた瞬間だった。

少年は知らない。

この世界で少女の姿を見た初めての人間。
それが彼であるということ。

第0話 臆病少年と満月の夜（後書き）

第0話は第4話7、2と同じ時系列です。

第1話 空腹少女の恩返し 1

「おなかが減って力が出ない……」

なんてアンパンで出来た某ヒーローのノリで呟いてみる。

それはそれは美味しそうな饅頭の前で。

正確には饅頭のような食べ物だけど、見た目が饅頭にしか見えないのでから別にいいだろう。

いやもうこの際、饅頭だろうがアンパンだろうが何でもいい。食べたい食べたい食べたい食べたいと念仏のように唱えつつ、ひたすら凝視。

あつ、いかんいかんヨダレが。

しかし美味そうだ。

ああ饅頭。

我空腹なり。いざ、饅頭を食べんとす。

「いやいやダメだってば!!」

気を抜けば、わきわきと伸びる手をなんとか理性と根性で引きとめる。

なぜか？

だってコレ、明らかにお供え物だもの。

腐っても私は日本人だ。

信仰心は薄いけど、警戒心はやたら強いあの国民である。ビビりとも言つう。

あと仮にも巫女である。バイトだけど。

八百万の神様のどちら様でもないのは分かっているけれど、目の

前で自分の物に手を出されたら誰だって怒るだろう。

あーてめコノヤロもう怒ったマジ崇ってやるとか言われても仕方がないだろう。

崇られては敵わない。

だって私、ただの人間だもの。

ちょーっと透明で、ちょーっと身軽だけどね。

それを人は幽霊と呼ぶ。

いえいえ、きちんと実体はあります。

物に触れられるし、ちゃんとおなか減るし。

ちゃんとおなか減るし。ここ重要。

ああ饅頭が私を呼んでいる……。

でも食べたら崇られそうで怖い……。

饅頭怖い……これは違うか。

それにこれを食べるのはあれなのだ。

お供えしたあのお婆さんに悪いではないか。

本当によくもまあこんな山のてっぺんまで毎日毎日登って来なさる。私は感心する。

それだけでも信仰心の篤さが窺えるというものだけれど、足腰は大丈夫なのだろうか。

膝のヒアロルン酸とか枯渇してそうだし、元気に登山というより縁側で猫と日向ぼっことかの方が似合いそうなお婆さんなんだけど。

彼女は毎朝ここに来ると、まず昨日の分のお供え物を袋に入れる。ナイアガラの滝級のヨダレを垂らす私の目の前で、というかこのオンボロ神社の前か。

そして新しいお供え物を取り出して並べると、ここの土地の参拝

方法らしき仕草で礼をする。

手を合わせるでもなく、十字をきるわけでもない。額と鼻と顎にちゅんちゅんちゅんと指を置いた後、三回お辞儀をするのだ。その後は目を閉じてお祈り。

お祈りしている間は無言なので私は暇である。

まあ無言だろうが、寿限無を唱えようが会話ができないからしかたがない。

彼女を見かけて何度目かの時に一大決心して、あのーと声をかけてみたらぎょぎょと物凄い顔をされた。

こつちがびつくりした。

ので、以来私は貝の如く黙っていることにした。

誰もいない所から声をかけられてさぞや驚いただろうに、その後も足しげく参拝しに来る腰の曲がったお婆さん。

なかなかの強者つわものである。

私だったら一週間は寄りつかないだろう。

最近耳が悪くなったのかねえなんて言ってたし、なかなかの呑気屋さんでもある。

呑気さでは私も負けてはいないと思うけれども、こちらには呑気にならざるを得ない理由というものがありまして、やっぱり天然ものの呑気さには敵わないだろうかと。養殖真珠なんて所詮紛いものよ奥様。むきーなんですって。

ああ何を言っているんだ私は。

お腹が減った。

ふと妙案が閃いた。

擬音語で表すならば「ピッカーン」とか「ピロリロリン」とかそんな感じだ。

レベルアップなら「チャララチャッチャッチャ」である。関係ないけど。

ともかくこれならいける！

マンガの主人公が絶体絶命のピンチを思いつきのアイデアでなぜか切り抜ける時のあの勢いでいける！

恩返し作戦。

鶴とか亀とかキツネとかがよくやるアレだ。

機織ったり、竜宮城連れてったり、栗くれたりするあの行為だ。

まあ最後のは鉄砲で撃たれて終わるけど。

小学校の教科書にあの話はなかなか重かった。悲しすぎて何度兵十を恨んだことか。

ごん、おまいだったのか。いつも栗をくれたのは……っとそんなことは今は関係ない。

脱線するのは私の悪い癖だ。

人間無くて七癖というが、じゃあ私には他にどんな癖があるのだろうかと一度真剣に考えてみたことがあったが、思考が脱線しまくって訳が分からなくなった覚えがある。シャーペン回しが癖ですつて言いたくてもものすごく練習したつけ。そう言えばあのとき兄から奪って食べた苳大福はかつてないほど美味かったなあ……。

待て待て。

今、完全に思考が脱線していた。

報恩の精神。

そう、それだ。

この崇高な作戦を全うすれば神様も「しゃーねーなあ許してやんよ」とか仰ってくれるはずだ。

何もしないでただうまいものを食おうなんて甘っちょろい考えをそいやと背負い投げするのだ。

ここ数日の悲惨な食生活とアデューするために。

ちなみにフランス語で「さようなら」は大抵「オ　ヴォワー」で

ある。

「アデュー」は永遠の別れを意味するのでうっかり使ったりしたら結構非難される。

だがあえて私は言おう。

水と渋柿っぽい果実の生活に、アデュー（永遠にさよなら）と！

第1話 空腹少女の恩返し 2

神社つぽいオンボロの木造建築物で。

饅頭つぽい食べ物を。

空腹に耐えかねて。

幽霊つぽい私が。

上品つぽく食べる。

現状報告以上。

いただきます。

ぱく、むしゃむしゃ。

むしゃむしゃ、むしゃっ……がつがつ！げほ！ごほがほむし

やむしゃごっくん。

ごちそうさま。

完食。

そして訂正。

上品には食べられませんでした。

そして饅頭は肉まんでした。

もちもちしたパンに大きめのそぼろの様なものが入った感じというか。

素材とか何の肉かなんて正直どうでもいいけれど、美味しすぎて食べながら涙が溢れ出た。

そしてお婆さんに深く深く感謝した。

お婆さんとしてはこの肉まん饅頭、略して肉饅頭は神様に差し上げたわけであって、それを私という部外者が横取りしたあげく感謝するなんてきつと筋違いも甚だしいことだろう。

これでへらへらとありがとうなんてのたまったらこの罰当たりめがとつと吐け！そして去ね！とか言われてしまつかもしれない。

でもほんとサンキューお婆さん！超美味しかった！！へらへら。

なにせこの三、いや四、五？ 日間もの間私が口にしたものと言えば水と渋柿っぱい果実だけだったのだ。

あの果物、見た目が枇杷っぱいから喜び勇んでかぶりついたら舌が麻痺した。不味すぎて。

オンボロ神社のお供え物にはもちろん初日から目をつけていた。最初に目を覚ましたのがこの場所だったのだから当然だ。が、しかし。

食べられる物を探す努力もせずに堂々と神様のものに手をつけるのはそれは巫女的にどうよと思い、遠慮していたのだ。巫女とか人として？

いやいや、恐らく私の巫女レベルはこの数日で飛躍的に上がったと思う。

「恩返し作戦」という妙案を思いついてしまった今、そう思わねば正直やってられない。

さて、ここまで私の極貧食生活を披露したわけだけでも。

それならお前山から降りて人に助けを求めろよ、と当然の考えが出てくるだろう。

ふおふおふお私も若かりし頃（注意：数日前）はそう思考したもののじゃ。

まさか山から出られないなんて馬鹿げた話があるなんて思いもせ

ずに……。

出られない。

出られないのだ、山から！

この標高何メートルあるのか知らないが、崖やら川やら滝やら洞窟やらがある明らかに大自然オンリーの山から！

どうやら私は信じられないことにエレベーターでも独房でも秘密の部屋でもなく、「山」に閉じ込められてしまった様なのだ。

ノープロブレム。

腰の曲がったお婆さんが日帰り登山できるような山だ。

極寒のチヨモランマでもない。

日本各地のどこにでもみられるような緑いっぱい、夏には蝉と入道雲が似合いそうなそんな山だ。

でも出られない。

イエスプロブレム。

山頂からスタートして順調に降りて行けたのも束の間。

中腹も越え、そろそろ平地に着くぞーという辺りで唐突に足が止まる。

平地だ平地だわーい、と仕切りなおしてもやっぱり止まる。

あげく勝手に方向転換する。元来た道に向かって。

恐怖である。

そしてそれを上回る怒りである。

平地だぜちくしょう！と雄たけびを上げて走り出しても、いつの間にもやら山の中に舞い戻っている。

「怒りは無謀に始まり、後悔に終わる」

とはピタゴラスさんの言であるが、私はその言葉の体現者となった。

とりあえず山を一周した結果、後悔した。

どこへ行ったとしても、それが山から出ようとする行為に変わった瞬間、私は山に呼び戻されるのだ。

こんなホラーな言い回し使いたくないが、全くもってそうしか表現できない現象である。

いやいやどこかに出られる抜け穴的な場所があるはずだ。

普通の足腰ひ弱な現代人が、たった数日で山中を探し尽くせるはずがないじゃないか。

そう、普通ならば。

確かに私は足腰ひ弱な現代人だった。

長距離走は中の下の下くらいだし、通学だってもっぱら電車だった。

だということなのでしょう。

一歩地面を蹴れば数メートル先に進み、軽く飛び上がれば木の枝に着地する。

この重力無視のもはや理解不能な身軽さ。

気が付いたのは石に蹴つまずいて咄嗟に強く地面を蹴った時だった。

勢いづいた私は、ぽーんと景気良く宙を飛びあつという間に木の上を越えた。

アイザック・ニュートンが泣く。

ついでに忍者好きの兄が泣いて悔しがる。

前者は過去の人なのでどうでもいいし、後者は今現在再会の目途が立っていないので問題なしとする。

とにかく超人的な身軽さを手に入れた元・ひ弱な現代人の私はその能力を余すことなく駆使して崖やら川やら滝やら洞窟やらを駆けずりまわったのだった。

この、登山に適したものは口が裂けても言えない服装で。

……つまりどんな格好かというと、あれだ。

巫女装束。

ぶつちやけて言えば、誰かに会ったらどうしようかと真剣に焦っていた。

「え、なんで巫女が山で遭難してるんですかギャグですか」とか笑われてもちよつとうまい言いわけが思いつかない。

馬鹿正直に「いや、正月の巫女バイト中にいきなり気絶してですねー気が付いたらこの山の中だったんですよー」なんて言ってもミクロレベルの説得力も見当たらないだろう。むしろこれで納得されたら私が戸惑う。

山から出られないのであれば、山にいた人間に助けを求めればいい。

異常なまでに身軽な体はこの際ちよつと脇に置いといて、全てはそれからだ。

結局そんな考えに落ち着き、来るべき第一発見者との遭遇に備えてああでもないこうでもないというまい言いわけ」を悶々と考えていた私はかなりの呑気屋であつたと言えるだろう。

人生甘く見てたよ。

まさかね。

自分が透明人間になっているとも知らないで。

第1話 空腹少女の恩返し 3

「ひいひいお助けえええええ！」

「誰だっ！？で、出るなら出てこい！！ぶ、ぶつた切つてやる！！」

「ひつ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいい」

「恐ろしや……物の怪の声じゃ、恐ろしや……」

以上、第一から第四遭遇者の皆さんから頂戴したお言葉でした。

とてもバラエティー豊かですね。

……別に茂みから突然出てきたわけでも恫喝したわけでも、増し
てや不気味な笑い声を上げたわけでもなんでもない。

ただ普通に「すみません」と声をかけただけでコレである。

どないせいつちゅうねん。

でーんと効果音が付くくらい道のと真ん中で待ち構えていたとい
うのに、そんな私に対して彼らが完全に無反応だった時点で何かお
かしいと思うべきだったのだ。

その時、こいつ……スルースキルはんぱねえ！　とか思っていた
私は阿呆の極みだと言える。

結果的には、物凄い悲鳴を上げて走り去られたり、抜刀されたり、
いきなり土下座されたり、念仏らしきものを唱えられたりしたわけ
で。

何だこれああ無情。

散々だ。

あんまりだ。

そうして一人取り残された私は、とある有り得ない仮説を立てる
に至った。

アイザック・ニュートンは「我、仮説を作らず」とかい放つたらしいけれど私はそんな思いきつたことは出来ないのとおりあえず、仮説。かつこ仮である。

………もしかして、私、透明人間？

訂正。

仮説と呼ぶにはおこがましい戯言^{ざれごと}である。

透明人間だなんてちゃんちゃらおかしい。

私は自分を現実主義者だと思っていたがどうやら違っただけらしい。失望だ。

でもこれが現実。

失望している場合じゃない。

失望するのなら兄の味覚中枢に失望すべきだ。

なんだプリンにマヨネーズって、和食にポカリって、メロンパンに山葵^{わさび}って！

あなたほんとに人間デスカ！？

……よし。

失望のあまり、落ち着いてきた。

というか失望がなんなのか分からなくなってきた。

我が兄ながら強烈である。

で、私が透明人間であるという仮説だけだ。

あり得ないということはあり得ないと言いますし、まあ有り得るんじゃないかと。

現実主義者とは、現実が起こった事態に即して物事を処理する人間のことだ。

だから私は承認しなければならぬ。

私が透明人間になってしまったという非現実的な現実を。

だってさあうだ言っても話進まないじゃーん、とか思っていた私は色々と精神的に疲れていたと思う。

——透明でふわふわと身軽なもの

これなーんだ？

それってそれって幽霊的なアレでしょうか。

幽霊的っていうか。

まんま幽霊……？

私は悩んだ。

私は死んだのか？

気絶したと思っていたけれど、あれは突然死だったのだろうか。

そんな馬鹿な。私は健康優良児だ。

家族中がインフルエンザに罹った時もピンピンしていた。

死んだはずがない。

生命力はゴキブリ並だよなお前ははと兄から称賛されたこの私が。

死んだのはアイザック・ニュートンであり、私の怒りの拳を食らった哀れな兄のはずだ。

前者は寿命で、後者は……まだ生きているか。ちつ。

ともかく私は生きている。

なぜなら

ぐつぐつぐつぐつぎゅるつづつづつづつ

と、お腹が全力で生きてます声明を発表しているのだから。
あ、生命の声明。

……なにを言っているんだろう私は。

第1話 空腹少女の恩返し 4

いつもお供え物を持ってくるあのお婆さんに声をかけたのは、この人ならもしかしたら話を聞いてくれるかもしれないと思ったからだ。

だが返ってきたのはもの凄い変顔だった。

例えるならば鳩が豆鉄砲ではなく特大ミサイルを食らった、みたいな表情だった。

びっくりした。

そしてがっかりした。

人に声をかけたとき、当然のように返事が返ってくるというのは実はとても大切なことじゃないだろうか。少なくとも、自分と言う存在を理解し認めてくれない限り会話なんてできやしないのだから。

我思う、故に我あり。

でもさ、違うんだよ。

私がいることを私が認めるだけじゃなくて、他の誰かにも「私」と言う存在を認めて欲しいんだよ。

それはもはや私にとっては過ぎた望みなんだろうか。

結局食べた肉饅頭。

そして決意の大作戦。

恩を返してプラマイゼロ。

神様どうか許してね。

とまあ、こんな感じの私である。

「もしもしかめよ」の節でレッツシンギン。ああパ。の実食べたくなってきた。

当たり前だけど、恩返しと言うからにはまずあのお婆さんの望みを知らねばなるまい。

私に可能なことならばそりやあなんだってするつもりだ。

それだけあの肉饅頭は美味しかったし、なんか色々と救われたのだ。

鼻息も荒くなるってもの。ふんがー。

ひとまず最初に私がすべきことは何か。

感謝の気持ちを表すべし。

よし、そうしよう。

お供え物が無くなっているのを見たらきつと動物の仕業かと怪しむだろうし。

あ……動物のせいにするという手があったか。

いやでもそれはさすがに却下。

私は食い逃げするような不届き者じゃありません。ありませんてば！

行動を開始すべく、私はすつくと立ち上がった。

オンボロ神社、と呼んでいる木造建築物はここ数日の私の住処だ。老朽化が激しく、柱もぐらぐらしているけれど一応屋根はあるし寝転がれるスペースも十分ある。

形が社^{やしろ}っぽいし、実際何かを祀っているようなので神社と呼んでも差し支えないだろう。

鏡とか、そういった御神体は見当たらないけどね。

山頂に建てられている辺り、山の神様じゃなかるうかと私は睨んでいる。

山神様が。

そういえば山の神様は女の神様が多いらしい。

豊穰とかそんなイメージが出産と結びつくからで、ええっと産土神だっけ。

雑学にやたら詳しい兄がそんなことを言っていた気がする。

巫女のバイトするなら神様のこともちゃんと知つとけとかなんとか言つて、べらべら喋っていた。

その時私はおじゃまぶよを消すのに忙しく、右から左に流してと
いうか完全に聞いていなかった。

今にして思えばちよつとは聞いておくべきだったろうか。

ちよつと反省。

しかし今さらではあるけれど、ここはどうも日本じゃないみたいだ。

今まで遭遇した人間は東洋と西洋を混ぜたような不思議な顔立ちをしていた。

彫りはそこまで深くないんだけど鼻が高かった。羨ましい。

目が青かったり、髪が茶髪だったりとそもそも配色が日本人のものじゃなかったし。

来ているものもまた、着物と洋服を足して二で割った感じだった。前合わせの丈が短い着物を帯で締めて、下にズボンとブーツ。大
体そんな服装。

あのお婆さんはズボンの代わりに長い西洋風のスカートを履いていた。

遭遇した人の中には刀持っている人もいたし、なかなか物騒な国かもしれない。

かもれないというか、目の前で抜刀されたんだった。

生の刀なんて初めて見たからあれはかなり怖かった。

どっちかと言えばあっちの方が怖がつてたけど。

ちえ。どうせお化け扱いだよ。

うーんと私は唸る。

はてさて一体ここはどこなのだろう。

我ながら呑気なもんだ。

いやこれだけ訳の分からん存在になってしまった以上、呑気にならざるを得んのだよ君。

誰とも会話ができないから自問自答スキルがどんどんアップしていく私。

このままだと自分で自分と喧嘩しだすんじゃないか私。

大丈夫か私。

だいじょうぶ、だいじょうぶ！ ほら全然問題ないよ！

なんだ良かった。もう、心配したじゃないか。

はははよせよ照れるだろ。

……………このままではダメだ。

ほっとけば脳内で私同士が熱い友情ドラマを繰り広げ始めやがる。そのうち恋愛に発展しそうで怖いです。ふんがー。

第1話 空腹少女の恩返し 5

あつちにふわり、こつちにふわり。

縦横無尽に船内を移動する宇宙飛行士。その中継放送をテレビで見たことがある。

いいないいな楽しそう、と私が鼻息荒く彼らの様子を眺めていると、ちょうど居間を通りかかった兄があのならと呆れた声で切り出した。

——あのなら、おまえ。無重力状態ってのは怖えんだぞ。

あれが人体にどんな影響を及ぼすのか知っているのか？

平衡感覚が狂う、血液中の赤血球はがんがん減っていく、そもそも血液量自体が減る、地球みたいに負荷がかかってねえから、ぼけっとしてたら筋肉も萎縮して骨ごとガリガリになっちまう。色々大変らしいぞ。

なるほど。

自分という負荷を支える必要が無い世界だからか。

骨からカルシウム分がどんどん減っていくのかな。あ、だから火星人にはタコみたいな軟体動物チックなやつが多いんだ。

うんうん、と私は神妙な顔で納得した。

そっぴやマツチヨな宇宙人なんて見たことがないしね！

いやお前宇宙人自体見たことねえだろというツツコミは当然無視である。

じゃあ無重力でも骨太な体をつくるにはどうすればいいんだろうか。

ここはオーソドックスに牛の乳をがぶ飲みでファイナルアンサー？
兄はそっけなく答える。

——運動すりゃあいんだよ……いいんだよ……イインダヨ……

「ん……？」

ぱちりと目が覚めた。

むくつと身を起こす。

どうやら寝ていたみたいだ。兄と宇宙と牛乳の夢を見ていた気がする。

見上げると、ごつごつとした岩壁。見下ろしても、ごつごつとした岩壁。

そして私が座り込んでいる現在地は、貴重な平らスペースになっている、岩と岩の段差部分だった。

ひゅうと吹きつける風が頬に涼しい。

一つに纏めていた髪がいつの間にかほどけている。

ああ、そうだった。

恩返し作戦の手始めとして、私はロッククライミングを執行していたのだった。

いや、この場合フリークライミングか。道具も命綱も無いし。

おお我ながらなんとアクティブ＆クレイジーな人間になってしまったんだろ。恐ろしい子……！

垂直に切り立った崖を素手でひょいひょい登るなんて猿か私は、猿だ私は。うきー。

躊躇したのは最初だけで、登り始めたとたん拍子抜けしてしまった。難易度でいうならば、小学校のグラウンドにあるジャングルジムくらいのレベルだった。

うわ超楽勝ー何これソウイージー！ ヤフー！

などとまあ完全に調子に乗っていたら、目的の場所一步手前であつさり手を滑らせた。

のち落下そして昏倒。全くざまあない。

よく考えれば…… というかよく考えなくても当たり前だろう。

私は依然として袴姿なわけだし、足袋たびに雪駄せったを履いているわけである。の、癖にこの無謀な運動にトライしたのだ。ちよつと体が身軽になっただけで、もちろん無重力というわけでもない。最強超人になったなんて勘違いしちゃいけないのだ。お前はあくまで平凡な人間なのだから。

はい反省。うきー。

それにしても、岩壁をしゃかしゃか這い登る巫女なんて…… 傍から見れば相当薄気味悪かっただろうな。色々な意味で誰にも見られていないからいいけど。

一体何をしているんですかーなんて聞かれても、ちよつとうまい言い訳が見当たらない。

馬鹿正直に「いやーこの崖に見たことないくらい綺麗な花が咲いてましてねー今からそれを自力で摘みに行こうと思うんですよーえ？ もちろん命綱無しで」なんて答えても正気を疑われるだけだろう。

場合によつちや薬物乱用の疑いを持たれそうな発言だ。ダメ、ゼツタイ。

はたと顔を上げる。

そうだ、花だよ花！

あのお婆さんに真心込めて贈る花！

あともう一步、あともう一步で手が届きそうだったのになあ……と志望校落ちした受験生並にずん、と落ち込む。志望校どころか崖から落ちたけど。

幸いにも落ちた距離が短かったからか、身軽だからか分からないけれど、とりあえず私は無傷だった。

だが目的は達成されていない。

あの花を摘むという目的が。

山から抜け出そうと必死に駆け巡っていたときに、私は花を見つけた。

崖に隠れるようにして咲く美しい花だ。大きな花弁を垂らしたその優美な姿は、花に興味の無い私でさえも一瞬言葉を失ったほど艶やかだった。形は百合に似ているけれど、こんなに目の覚めるような綺麗な青を持った百合なんて私は見たことが無い。

山巡りしている間に色々なものを発見した。でも、あの花に私は凄く「特別」なものを感じた。

決して人の目に触れることはない場所で、それでも美しく凛と咲く潔さ、その気高さ。深い神秘を秘めているような鮮やかな青さが胸を打つ。

そつとしておくべきかもしれない。でも、あの花はもつと多くの人に愛でられ、称えられるべきだ。直観的に私はそう思った。そして肉饅頭を食べた私がお婆さんのお礼に真っ先に思いついたのが、この花だったのだ。

あーあ、がつくりだよ。

もう一回崖登りに挑戦するにはもう時間が立ち過ぎている。

一体何時間気を失っていたのだろう。

立ち上がるとオレンジ色の夕日が真っ直ぐ顔に当たって眩しかった。

日暮れはあつという間だ。夜の闇は驚くほど駆け足でやってくる。ぐずぐずしているとオンボロ神社と言う名の我が家まで帰れなくなってしまう。お婆さんへのお花のプレゼント——と表現するとなかなり乙女チックで妙に気恥ずかしいが——は、今日は諦めるしかないらしい。

まったく……思いつきで行動するもんじゃないなあ。

ぱんぱんと緋袴についた土埃を払い、崖から降りようと私は夕日に背を向けた。

——ん？

今、奥の岩陰に青い何かがちらりと見えた。

まさかまさか。

ええ、まじですか神様！

岩と岩の隙間にたった一輪。

あの青い花がひっそりと揺れていた。

あつちにふわり、こつちにふわり。

「自分」という負荷をなくしていることに私はまだ気が付かない。

第1話 空腹少女の恩返し 6

「光あれ」

と、初っ端（天地創造時）に言い放ったのは、世界のベストセラ―のあの唯一神。

日本神話のナンバーワンに輝くのは、天照大神。日の神様だ。太陽神？ それってどの太陽神ですか？ とか言い出すのは多神教の聖地インドで。

中国神話にいたっては、十個の太陽が天にあったという気前の良さを発揮してくれる。

でもそのうち九個は弓矢で落とされたい。シユール過ぎる。

要するに、人間にとって昔から光は尊いものだということだ。

太陽は作物をはぐくみ、あらゆる生命を賛美する。

月は暗闇を照らし、見えぬはずのものを眼前へと導いてくれる。

火を灯し、電気を用い、湯仰するかの如く人間は光を追い求める。

希望を表す言葉を「光」と呼び、それを追い求め続ける。

ああエジソンは白熱球の眩い光に何を見たのか。

人よ、光なくして何を願う。

實に尊きは光である。

……とりあえず光が欲しい理由を高尚な理屈で考えてみた。

だってもう嫌だこい。

暗過ぎるよ。

日が暮れた途端、この「一寸先は闇」を地で行く暗さだ。幾夜か過ごしたとは言え、耐えることも慣れることもそう簡単にできるはずがない。

雨風をしのげる程度の包容力をオンボロ神社に見出しつつ、今夜も私はひとり、膝を抱える。

おーおー、あの遠吠えは狼ですか山犬ですか。今夜もおおんとご精が出ますね。どっちにしたって怖いものには変わりなし。私も一緒に遠吠えしたいくらいだ。恐怖によるストレス発散のために。

てやんでい、こちとら真夜中に蛍光灯がんのコンビ二へ行くのが当たり前の現代日本人だってえのに。夜の山に身い一つたあ、どう考えてもハードルが高すぎだろばらばらめ。

本当に何の苦行くぎやうですかこれ。暗くなってテンションが跳ね上がる現象なんて、小学校の学芸会以来覚えが無いというのに。

……ヘイ！ カモンライト！

って叫んだらガコンとスポットライトが付いたりしないだろうか。いいよいいよ。そうなりやムーンウォークだってなんだってやってやるよ。

どうせ誰も見やしないんだしさ。

ポーウ！

正確な時刻は分らないが、眼が冴えて冴えて仕方がない。

思考を弄ぶことに飽きた私は、のそのそとオンボロ神社から這い出してみた。

この神社は山頂にあるとはいえ、嶮しく切り立った場所にぽつんと孤立している訳ではない。辛うじて他の場所よりも高いただっ広

い空き地、そんな場所に建てられている。見晴らしはとてもいい。昼間には、遠くにある山々の連なりが濃く淡く空の下に見える。

私はまだこの山の名前すら知らない。

けれど、ここ数日の地道な奮闘によって大まかな山の構造は頭に入っている。

遠くから見たならば、きつとひらがなの「へ」に似た姿をしているだろう。

崖や急な斜面が多く「へ」で言うなら左の棒部分が山の西側で、私が青い花をゲットした場所はこの辺りだった。

この西辺り一帯はすごかった。

何がすごいつて滝がすごい。

滝壺まで一気に落下するド迫力のものから、何段階かに分かれて流れ落ちるものまでと、その種類は実に変化に富んでいた。日本だったら絶対に観光名所に名を連ねていること請け合いだ。

おまけに滝の裏側には洞窟もあるというわくわく冒険ポイント付き。スリリング好きのアウトドア派にはたまらないね。もちろん私は穏やかなインドア派。の皮を被ったただの面倒くさがり屋。

諸事情により、最近はめっきりアクティブになってしまった。

崖？ 素手で登っちゃうぜいいやつふう！

一転して東側、つまり「へ」の右の棒部分。

こちらは鬱蒼とした森がゆるやかな裾野を作り、広範囲に渡って木々を伸ばしている。その深い森の中を縫うようにして幾筋もの山道が存在し、東西南北あちこちへと枝分かれているようだった。

ちなみにまだ全ルートは網羅していない。獣道や岐路も多いし。

で、私はこの山道のわりと広めの場所に立って、通りがかりの何人かに声をかけたわけだ。結果は悲鳴とか抜刀とか、露骨にアレな感じだったけれども。

あのお婆さんは、いつもこの勾配がぬるい方面からよいしょよいしょと登ってくる。

そうして幾つもの坂や階段をのぼり詰めて、彼女がようやく山頂に到着するのは大体お昼すぎ頃だ。

東の山道を木の上から眺め、西の崖と崖の間を飛び回り、木々を伝いながら南へ進み、岩を飛び越えて北へ走り抜け……と、出口を求めて日々延々と山巡りをする私が疲れ果て、神社で一休みしているとき。

あの美味なお供え物を引っ提げてやってくるのだ。

今日、とうとう私は誘惑に負けた。

言いわけしながらそれを口にしてしまった。

老体に鞭打って毎日お供え物を持ってくるお婆さん。曲がった腰をさらに曲げて、オンボロ神社を丁寧に掃除してくれた。こんなに大切にされているこの神社を私は気に入った。

一通り参拝を済ませてしまうと、彼女はまたよいしょよいしょと帰っていく。

会話することができなかったからと言って、一方的にがっかりするのは私のエゴだ。

私は必ず報いねばならない。

あのたったひとつの肉饅頭に。
そうだ。

いつもたったひとつなのだ。

決して裕福そうな人には見えない彼女が、大事そうに持ってくるあのお供え物は。

勝手に食べてしまつて、ごめんなさい山神様。
そしてお婆さん。

空腹を救つてくれてありがとう。

あのとき食べながら流れた涙には、忘れがたいものがありました。
家族と引き離され、気が付けば見知らぬ土地。

人であることを忘れそうになるような状況で。

こんなにはろぼろになった心に、希望の光が見えました。

あなたに花を贈ります。

言葉の代わりに綺麗な花を。

あの青く凜とした花は、人知れず神に祈るあなたにこそ愛でられ
るべきだから。

夜風が吹いた。

私は顔を上げる。

暗闇を照らす月は、満月まであと少しだった。

第2話 老婆と花騒動 1

里の朝は早い。

空が夜明けを告げる前に人々は動き出す。

農具を持って朝飯前の一仕事をしに田畑へ向かう百姓。
隣村まで出稼ぎに行く若者たち。

店を開けるまでの下準備をする店主。
意気揚々と里を出立していく旅人。

だが、そのどれでもない人間が饅頭屋の前に立ったのはそんな刻限である。

「キリナばあさん、もういい加減やめたらどうだい」

善良そうだと里で評判の顔に呆れと同情を乗せて、饅頭屋の旦那は今日一番の客を出迎えた。

彼の幾度目だか分からない忠告を受けた朝の常連客は、しかしいつものようにどこ吹く風といった顔つきで汚れた銭を差し出してくる。

もちろん、いつもの文句付きである。

「あんたもいい加減、老い先短い婆のすることにケチをつけるんじゃないよ」

二枚の銭を強引に手に握らされた饅頭屋の旦那はやれやれと溜息をつき、その大きな肩を落とす。

それから、ついさつき出来たばかりの湯気を上げているものを手早く紙に包んでやった。

今までの経験上、彼がそうしない限り頑固な彼女は決して店の前を動こうとしないのだ。

しぶしぶと饅頭を手渡しながらも、彼はその人の良さ故について小言を口にしてしまう。

そしてこれもいつものことだった。

「いつも言っているがな、俺はばあさんが心配なんだよ。いくら東道が他の道と比べて登りやすいとは言ってもな、何も山のとっぺんまで毎日行くこたあ無いだろう」

一度口を閉じ、キリナの様子を窺いながら付け加える。

「……気の毒なことだが、お孫さんの目が手遅れなことなら里の者なら誰でも知っているんだ。医者もお手上げの病なんだろう？　気持ちは分かるがな、足腰痛めて叶いもしない神頼みなんてもういい加減やめときな」

そこまで言ってから、ふと数日前の話を思い出した。

「それにほら、近頃の朔月山にや物の怪が出るってもっぱらの噂じ

やないか」

それはほんの数日前の話だ。

その日、顔を真っ青にして里へ降りてきた者は一人ではなかった。いわく、誰もいない山道で突然「何か」に声をかけられたのだという。

やれこの世のものとは思えぬおどろしい声だったとか、いや美しい女の声だったとか、山越えをしてきた商人や百姓や流れ者の荒くれ男が雁首そろえ、泡を飛ばして不可思議な体験談を語ったものだから、平和な里は束の間大騒ぎとなったのだ。

血気盛んな若衆が「物の怪退治だ」と息巻いていたが、不思議なことにそれ以降「声」はぴたりと止み、何の音沙汰もない。

結局手掛かりらしきものは何も出てこなかった。

別段これといった被害があつたわけでもない。

しばらく経つと里の騒ぎも治まり、獣の声を人の声だと勘違いしたのではないかという考えで一先ずは落ち着いたのだ。

しかし、油断は禁物だ。

怪や物の怪と呼ばれる、人ならざる存在はこの世に確かに存在する。

遠く離れた都にはそのような魑魅魍魎の退治を生業とする集団がいると聞く。

平和な里暮らしに慣れ、他人事だと高を括っているとつか手酷

い目にあつやもしれない。

もし本当に物の怪だったとしたら、山神様は一体何をしていたさ
るのやら……。

饅頭屋の旦那は心中で独りごちた。

——朔月山の頂には山神が住んでいる。

嘘か本当か確かめる術など無いが、それは昔からの言い伝えだっ
た。

里の子供たちは、何か悪さをする度に「山神様が見ているぞ」と
いう言葉で脅しつけられるものだ。

かく言う饅頭屋の旦那も幼いころは散々その言葉を耳にしたもの
だった。

しかし実際のところ、山神を本当に敬い信仰している人間など里
に何人いるのだろうか。

長い間放置した山頂の社はすっかり廃墟になっている。

薄情でも背信でもなく単に無頓着なだけだが、今や参拝者など皆
無に等しい。

たった一人、キリナばあさんを除いては。

「はい、ありがとさん。ああ、そう言えば私もこの間なんだか妙な
声を聞いたね。まあ大方、鳥の声を聞き間違っただらうよ。物の

怪なんて出る筈がないさね。ほれ、今までも山神様が追っ払ってくださっていたから何も出てこなかっただろう」

あっけらかんと言いつきリナに饅頭屋の旦那は掴みかからんばかりに身を乗り出した。

「もしその声が物の怪だったらどうしていたんだ。意味のない神頼みをしにこの山へ行った挙句、そいつに食われちまってたかもしれないじゃないか。なあ、ばあさん。悪いこた言わん、家に戻ってお孫さんに付き添ってなつて。俺が言うのもなんだが、饅頭を買う銭をお孫さんの療養に使えばいいだろう」

白髪頭を束ねているのは粗末な髪留め。

身に着ける服は薄汚れており、みすばらしい。

彼女が無理をして毎日饅頭を買いに来ているのは、一目瞭然であった。

だが、貧乏な老婆は頑^{かたく}なに首を振る。

「心配してくれる気持ちだけ有難く受け取っておくよ。けどね、私みたいな年寄りはおもう山神様におすがりすることしかできないんだよ。それにわたしや必ず山神様があの子を救ってくださいと信じておる。意味がないだなんて、滅多なことを言うもんじゃないよ」

そう言つて今日も山頂を目指して歩きだすキリナ。

その曲がった腰を半ば諦めに近い気持ちで見送りながら、饅頭屋の旦那は再び溜息をついた。

毎朝似たようなやり取りを繰り返し、その度に彼はキリナの頑固さを思い知るのである。

何かあつてからでは遅いんだがなあ、と首を振り仕事に戻るために店の奥へと引っ込んだ。

まさかキリナの言つとおりになるとは夢とも思わずに。

第2話 老婆と花騒動 2

「あいたたた……」

とんとんと腰を叩いてキリナは思わず呟いた。
よいしょと膝を曲げてその場に尻をつける。

あちこちにガタがきている老骨に山歩きはひびく。

それが何百段もの階段昇りともなると、体中のいたる所が悲鳴を上げるのも致し方ないことだった。

若い者ならば毎日の山登りはさぞかし鍛錬になるであろうが、肉体が衰える一方の彼女が頑張ってみた所で、徒に疲労が積み重なるだけであつた。

「やれやれ、あと百段くらいかねえ」

キリナは持つてきた竹筒の水を取り出してゆっくりと喉を潤した。
一息入れた後どっこいしょと立ち上がり、再び一段一段階段を昇りはじめる。

東道の山道は緩やかだが、それゆえ長い。

夜明けに出発しても、山頂近くまで到達する頃にはすっかり日が昇りきっている。

そこから数百の階段を上がってようやく、山神様の社にたどり着けるのだ。

この参拝も、今日で何度めだろうか。

キリナは、今朝方の饅頭屋の心配顔を思いだした。

——気の毒なことだが、お孫さんの目が手遅れなことなら里の者なら誰でも知っているんだ。医者もお手上げの病なんだろう？

孫のクラトが奇病に見舞われたのは昨年の暮れ。

クラトは生来病気がちの少年だったが、年を重ねるごとにその病弱な身体も徐々に回復の兆しを見せ始めていた。この調子ならば、里の若者と同じくらい遅くなれるだろう。

キリナはそう信じていた。

だがある日、彼は突然原因不明の大病に侵されたのだ。

熱にうなされながら彼岸ひがみと此岸しがみを幾日も彷徨いその両目から光が失われるに至るまで、全てはあつという間の出来事であつた。

最早、今の彼には人の動く影が辛うじて判別できる程の視力しか残されていない。

残念ながら治る手立ては無い、やがては完全に盲目となるだろう。里の医者が酷く言いづらそうに告げた時、十七歳の寝たきりの若者はぎゅっと唇を噛みしめ一言、「分かった」とだけ低く答えた。

キリナにとって孫のクラトが何よりも大切であり、全てである。

始終憎まれ口を叩いてばかりのクラトが可愛くて仕方がなく、そして可哀そうで仕方がなかった。

側にいるのに何もできない歯がゆさともどかしさが、キリナを朔月山へと向かわせた。

——山神様、お願い申し上げます。
どうか私の孫を御救いください。

あの子はまだ若いのです。これからどんなことだって挑戦できる未来がある。

けれど病魔に体力を奪われそのうえ光まで失くしてしまったら、一体クラトはどうなるのでしょうか。

私はこの先、あの子を残して逝かねばならないのでしょうか。

たったひとり、真つ暗闇の中に置き去りにされるあの子を残して……。

取るに足らぬ私の、一生にただ一度きりのお願いです。

どうか、どうか、孫を御救いください。

山神への祈りは、常にクラトの回復祈願である。

それ以外は何も望まない。

キリナはただひたすら山神に祈り続けた。

例え里の人間に呆れられ、奇異の目で見られ、陰で笑われようと祈らずにはいらなかった。

クラトが病魔に侵されるまで参拝すらして来なかった自分を責め、山神に詫びた。

困った時にだけ神を顧みる己の姿を深く恥じた。

せめてもの償いに社を毎日掃除し、少ない銭を使ってささやかながらけれど精一杯の供物を奉げた。

山神がいつか必ず願いを聞き届けてくれると固く信じて。

社が建っている山頂まであと十数段という所にさしかかった時、不意にキリナはぐいと袖を引かれたような気がして振り向いた。きよろきよろとあたりを見回すが、誰もいない。

妙だと思いつつ残りの階段を昇ろうとして、唐突に足を止めた。

「うっ……」

風の音にかき消されそうなほどの小さなうめき声。

見ると、丈の長い雑草が生い茂る草叢くさむらの中に誰かが倒れている。

キリナは驚きに目を見開いた。

こんなに近くに人が倒れていたことに、今の今までまるで気が付かなかった。

石の階段の脇、丁度斜面を覆う草の陰にすっぽり隠れて見えなかったようだ。

「もし、大丈夫かい。そこの方」

慌てて草の中を泳ぐようにしてかき分け、苦勞しながら側へ近寄る。

疲勞が溜まった身体は、動くたびに節々が痛んだ。

あともう少しで山頂に辿り着いていたのだが、目の前で倒れている人間を平然と捨て置いて行くことなど、キリナにできるはずもなかった。

それに、行き倒れの者を助けずに自分の孫だけ助けてもらおうなどという浅ましい考えでは、きっと山神様もお怒りになるだろう。

倒れているのは少女であった。

それも異国の。

大きな箆やぐらうに似た箱型の薬籠らしき物を背負い、横向きになつて手足を投げ出している。

地面に広がるのは草の色に溶け込みそうな深緑色の髪。

見慣れぬ服や顔立ちは、海向こうにある西の大陸の人間のものだ。

都では異国人はそれほど珍しくも無いらしいが、彼らはこんな鄙びた場所にまでわざわざやって来ない。

孫とそう幾つも歳が変わらぬような異国の少女が山の中で行き倒れているなど、珍事と言ってよかった。

「あんだ、しつかりしなされ」

「うう……った……」

「何、なんだって？」

「お腹へりま……した……」

キリナが迷わず饅頭を取り出すと、少女ニーナ・フィカスは瞬時に飛び起きて食らいついた。

後にキリナはこの時のことを何度も思い出し、涙が出るほど笑い転げるのであるがそれはもう少し先の話である。

第2話 老婆と花騒動 3

昨夜はなかなか寝付けなかったが、今朝はいつもより早く目が覚めた。

遠足が待ち遠しい小学生か、私は。

寝起きの目をこすりこすり立ち上がる。

さて、ひとつぱしり朝風呂に行きますか。

滝壺に飛び込み、思う存分泳ぎまわる。

清らかで澄み切った水は冷たくて、全細胞が洗われるような気がするほど気持ちがいい。

飛沫をあげる滝の様子を泳ぎながらしばらくぼーっと眺める。

あーマイナスイオンがほとばし進ってるなこりゃ。

疲労軽減、精神回復。

眉唾ものだと思っていたけど、これは結構効くかも。

身も心もさっぱりとしてから水から上がり、柔らかい葉っぱで作った即席タオルで身体を拭いた。地面の近くまで垂れさがっている太い木の枝から、引つ掛けておいた巫女装束を手取る。

馬鹿は風邪をひかない説があるらしいけど、私は馬鹿ではなくあくまで健康優良児だ。いつまでも素っ裸だとさすがに風邪をひいてしまう。

待てよ？

私が素っ裸だろうがなんだろうが誰にも見えないのなら、もういっそのこと裸族にでもなってしまうたらいいんじゃないか。移動する時によく袖とか袴が枝にひっかかって面倒くさいしなあ。うん。

……いやダメだろ。

それはちよつと止めとけ私。野生児の道への第一歩を踏み出してどうする。

ターザン女版とか笑えない。

ふゝ危ねえ危ねえ。まさか裸族を試みようとする日が来ようとは。この世はなんて無常なんだ。

まずは肌着の襦袢^{じゅばん}。

これは丈が腰の辺りまでしかない短衣で、要するに下着だ。

巫女をすると兄に言つたとき、奴は私の肩をがっしり掴み、かつてないほどの真剣な表情で「……ひとつ聞くが、巫女さんがノーパソって本当なのか」と尋ねてきたが、もちろんそんな訳はない。

私は乙女の拳を唸らせてきつちりがつつり否定してやった。

殴られながら男の夢がどうたらとか叫んでいた兄はどう考えても変態だ。パンツなしとか、一体いつの時代の話だ。

きちんと現代の下着を身に付けた上で、襦袢を着る。緩まないように和装用の紐で縛ってから、次に袖を通すのは白衣。白衣はそのまま着ると丈が長すぎるので手早く御端折り^{おはしよ}を作り、長さを調節する。だらしなく弛んでしまわないようにピシッと衿の合わせを整え、また上から紐を縛った。

和装だからあたりまえだけど、ボタンもチャックも付いてない。服が弛んだり緩まないようにするのに使うのは全部紐だ。これを強く結び過ぎると動きづらくなるし着心地がキツくなるから、ほどほどに結ぶのがポイントだ。

着る途中で寄ってしまった皺^{しわ}をきれいに伸ばしてから緋袴^{ひばかま}に足を入れる。

袴と言えば普通は両脚の部分が二つに分かれているものが多いけれど、私のは行燈袴あんどんばかまといってスカート状のものだ。見た目だけだと普通の袴にも見えるから、最初に履いた時はへえ〜と驚いた記憶がある。

胸の下辺りに緋袴の帯の位置をセットして、ずれないように袴の前と後ろの両端に付いている紐を交互に締める。おしまいに、お腹の前で蝶々結びをすれば完成。

足袋と雪駄を履けば、じゃーんどこから見ても立派な巫女さんの出来上がり〜。

立派なと言っても新米だし、本職じゃないけど。この巫女服もバイト先の神社からの借り物だから早いところ返さなくちゃいけない。だがしかし、いかんせん状況が状況だ。

山×日本外×透明人間〃返しに行ける訳がない。

というか着るものが今のところコレしか無いから、しばらくは借りっぱなしになること間違いないだろう。申し訳ない、そして物申したい。

着崩れが無いかどうか点検してやっぱり、と私は思わず呟いた。

「ぜんっぜん汚れてないなあ」

崖から落ちたり、木の枝に寝転がったり、山道を疾走したりと、この数日間でかなり汚れていてもおかしくない行動しかとっていないかったというのに。

手で軽くぱんぱんと払う動作だけで、この白さ・手触り。常に洗いたてのような清潔さに戻ってしまう。汚れない、と言うよりもまるで「汚れ」そのものを拒否しているかのようだ。この世界に由来する汚れを？

どうやら異常になったのは中身わたしだけじゃないみたいだ。

うーん。

ということは、泥やペンキをぶっかけたら体の形が浮き出て見える、なんて透明人間を見破る王道的方法が私には通用しないということなのか。いや、ぶっかけた瞬間は分かってても、すぐに汚れが落ちたり消えたりするから追跡しようとしても長くは続かないってことも。

あーもうこの際深く考えるのはやめよう。
面倒くさい。

手間暇入らずの便利な服だーと素直に喜ぶだけでいいや。

水でじゃぶじゃぶ洗ったからか、臭いもしないし。ああ、臭いも削除対象なのかもしれない。

まだ少し湿っているけどそれも直に乾く。まったくもって便利なものだ。もしこれがスーツなら、多忙を極める世のサラリーマン達にバカ売れするに違いない。

この一着で洗濯機、洗剤、染み抜き、乾燥機、アイロン全て不要！
なんてクリーニング屋泣かせなんだ……。

水を吸ってしっとりと重たい髪は、走っていれば風が天然のドライヤーになってくれる。

服を着終えて身支度を済ませた私は、とんと軽く地面を蹴っていつものように木の上に向かった。これまでの経験上、地面の上を走り続けるよりも枝から枝へと飛び移るように走った方が断然速いからだ。

時間の短縮にもなるし、小腹が空けば手近な果実をもいで食べることも可能だ。

……この果実が曲者だったけど。
不味くて不味くて仕方がないのだ。
かといって他に食べるものは無く。

こんな非食用果実ばかりじゃなかったら、私も神の供物に手を出す真似なんてしなかっただろう。

美味しい物に慣れきった現代人のグルメな舌に、毎日あの不味さは酷というものだった。もちろんサバイバル知識なんて皆無だから、食べられる植物なんて全然見分けが付かないし、沢の魚は驚くほどすばしっこくて小さかった。

四足の動物を狩って食べるなんてさらにハードルが高くて、とてもじゃないができそうにない。

大体、鹿とか猪に私が勝てるはずがない。蹴られたりなんかしたら、身軽な私はどこまでぶっ飛ばされることやら。

それに奴らは私がそうつと近づいても本能で察知するのか、あつという間に逃げていくのだ。

悔りがたし、野生動物。

と言う訳でこちらに来てからの食生活は、冷たい山水と渋柿もどきの果実オンリーと相成った。

それでも何も食べられるものが無いよりはマシだと思っていた。とりあえずおなかが満たされれば生きていけると思っていた。思っていたけど。

人間の食べ物に心底恋しかった。

おなかがへるんだよ。

私がここにいるのか、それともいないのか、私ですら分からなくなるのに。

涙を流して食べた。

それでやっと分かった。

ああそうか。

私はずっと、心が空腹だったんだ。

第2話 老婆と花騒動 4

すう、と瞼を開く。

暗い、と思った。

一度目を閉じ、再び開く。

眼球が晒されるのは相変わらず薄暗い闇の中だった。

その闇を睨みつけるように鋭く見つめ、昨日のそれと無意識に比較する。

——やはり、濃くなっている。

こみ上げてくる苛立たしさに強く舌打ちをしたかったが、出てきたのは意思と反して弱々しい音のみだった。

日を追うごとに、闇が迫ってくる。

夜の帳が降りるよりも緩慢に、月が欠けていくように刻々と。

静かにひたひたと忍び寄る暗闇の波に、いつの日か己の両眼は溺れてしまっただろう。

それは杞憂ではなく、比喻でもない。いずれやってくる憂鬱な現実だ。

(……熱い)

広がる熱に四肢が燃えそうだ。

呼吸をするのも億劫なほどの気怠さが全身を支配している。

ああ、全てが煩わしい。

いつそのまま燃えてしまえばいい。焼け死んで、灰だけになっ
てしまえばいい。

そう考えると少しだけ気分が楽になる。

だが、そう言えば祖母はいつも声を荒げた。

自棄になるな、投げやりになるな、お前はまだ若いのだからと。

私が側にいるから諦めるなど。

「……うるせえ……ばあの癖に……」

呟く声は掠れ、一人きりの部屋に空しく消えた。

叫びたかった。

やめてくれ、そんな風に励ましてくるなど。

大声で怒鳴りたかった。わめき散らしたかった。暴れたかった。もう、そうする体力さえクラトには残っていないけれど。

昨晚の発熱と共に眠り始めたが、それから日をまたいで今は昼時のようだ。

いつものようにキリナはいない。

薄闇の世界に身を横たえたまま、意味のない瞬きを繰り返す。

枕も掛け布も、窓から降り注ぐ日の光を浴びてすっかり温もっている。

暗いと感じるのは恐らく自分だけだ。

どうやら外は晴れているらしい。

天井の木目模様を思い出しながら仰向けになっていると、ピチチと鳥のさえずりが聞こえた。

（二羽……いや、三羽か）

そのまま耳を澄ませば、里の子供らが歌う童歌が風に乗って届いてくる。

聞き覚えのある童歌だ。幼いころから病弱だったクラトは加わったことがなかったなので、遊び方は知らない。ただ、その歌だけは病床でもよく耳にした。

お山のてっぺんにいるのは誰だ
ふもとの里までおりてこい
目隠しするからおりてこい

となりのとなりで笑うの誰だ
おまえの名前を言ってみろ
耳をふさぐから言ってみろ

欠けの懸路かけじをのりこえて
満ちの抜道ぬけみちいざゆかん

子供らの歌う「山のてっぺん」とは、朔月山の山頂のことだろう。
ならばそこにいるのは祖母のキリナだ。そして「目隠し」をされ
ているのは自分だろう。

童歌にそう自分たちを当てはめてから、クラトは無意識にぎり、
と唇を噛んだ。

いつからか祖母は、いるのかいないのか分からない山神を拝むた
めに朔月山へと登るようになった。

それは毎日、欠かすことなく行われる。晴れの日も、雨の日も、
雪の日も。

彼女はその行動について、一切何も言おうとしない。だがそれが
何の為であり、誰の為であるかなど聞くのも白々しかった。夜明け
前に家の戸を開けて出ていく、祖母の腰の曲がった後姿を思い浮か
べたクラトは、再び苛々と舌打ちをした。

十七年、そのほとんどを病床で過ごしてきた。

そして今は抗う術もなく、暗闇の底へと沈んでいく自分。思うように動かない身体を布団の上で持て余し続ける日々が延々と流れる。今日も朔月山へと向かう祖母。

その献身が重く、厚遇が耐えがたく、嘆願が苦しい。

（生きているだけで、俺はばああの重荷であり続ける）

燃えて灰になりたいと願う。

自棄になっているからではない。そんな気楽にはなれない。全てを投げやりに考えるには、余りにも病が長引き過ぎた。

自分の側にいると言うからだ。

若くこれからも生き続けなければならない自分の側に、年老いた祖母が。

もう、十分だった。

（もう十分だ、やめてくれ！ ばああの癖に無理しないでくれ！俺は、もう……）

いつそ燃えてしまえばいいのだ。

クラトという存在が重く、耐えがたく、苦しく祖母の残りの人生を蝕むというのならば。

それでも。

（……それでも俺はこうして今もしぶとく目を開けている）

舌打ちをしたかったが、かわりに出てきたのは塩辛い水だった。

虚を映す両眼から流れたそれは、こめかみを伝い、日の光を浴びる枕へぼたりと落ちた。

と、その時。

「だから足速いですってばー！ 薬ならちゃんと作りますから落ちて着いてくださいって言ったじゃないですか！ ってわあやめてください！ 神薬花しんやくかをそんなに握りしめちゃダメです！ ちよっと待って、待ってくださいおばあちゃんああん！！」

「ええいグズグズせんで早く来んかい！ あんたそれでも十八かい！？」

「ええ！？ あたし行き倒れてたの忘れてますよね！？ 絶対に忘れてますよね！？ …… ふぎゃあつ」

「転んでる余裕があるなら走らんかい！」

「もう無茶苦茶言ってますよ！ ああだから神薬花が潰れちゃいますから！ もっと丁寧に抱えてくださいおばあちゃん！！ は、花が、伝説の花が！！」

ばたーん！ と家を揺らすほどの勢いで戸を開けて、祖母と見知らぬ誰かが入って来る。

ついで、ばたばたと荒い足音が二人分近づいてきた。

クラトが慌てて涙を袖で拭ったのと、部屋の引き戸が開くのはほぼ同時であった。

「なんだようっせえなばあ！ ゆっくり帰って来いよ！ ぎっくり腰になったらどうすんだよ！」

「クラト！！ 今すぐ山神様に感謝しな！」

「はあ！？」

「ぜえ、はあ、お、おばあちゃん、ちよっとは説明してあげましょーよ！」

薄暗い闇の中で動く二人の人間。

目の前に立つ見慣れた影と、横で疲れ果てたように崩れ落ちるも

うひとつの影。

一人は祖母だとして、もう一人の声はクラトの知らない若い女のものだ。話す言葉に少しでも異国の響きが混じっている。突然の成り行きに何が何やらのクラトは自然と眉根を寄せて、その見知らぬ人物に顔を向けた。

「……とりあえず、あんた、誰」

屈みこんでいた影が闇の中でゆっくりと立ち上がる。

「あたしですか？ あたしは『薬取り』のニーナ・フィカス」

姿勢は何も目に映らないが、クラトにはそいつがにっこりと笑ったような気がした。

「君の目に光を取り戻してあげられます。身体も丈夫になれます」
ヤマガミサマの神薬花でね、と少女は透き通るような声で高らかに続けた。

こうして彼の奇跡は始まった。

第2話 老婆と花騒動 5

例えば、だ。

私がごく普通に山で遭難していたとすれば、だ。

当然、私は助けを求めてうろろと慣れない山道を歩きまわっていただろう。

で、とうとう誰にも遭遇することなく空腹で力尽きてしまったとする。

そうしたら

「うう、もうだめ……限界……」

とかなんとか言いながら地面にがばりと倒れ、そのまま動かなくなっていたかもしれない。

これは大いにありうる展開だ。うん。

ちようど今、目の前で倒れているこの女の子のように。

愛しのマイホーム、オンボロ神社がある山頂から遙か西。

そこで雄大かつ贅沢な朝風呂をばしゃばしゃと心ゆくまで堪能したその帰り道、私は実に数日ぶりにお婆さん以外の人間と出会った。出会ったというか、見つけたと言った方が正しいかもしれない。

場所は山頂まで続く長い階段。

つい先日この階段をひたすら降り続け、一心不乱に下界を目指した事は記憶に新しい。

お婆さんも毎日ここを通ってやって来るので、段々馴染みになってきた場所だ。

つま先に軽く力を込めて階段を蹴り、一瞬宙を飛んだのち数段先で着地。

とーん、とーんとテンポよく軽快に昇っていく。

階段を蹴りあげるたびに緋袴がふうわりと揺れ、袂たもとが風にひらりと翻る。このスピードだと数百段もの階段も大した長さではないし、第一ほとんど疲れを感じない。むしろ昇っていると爽快感があつて楽しいくらいだ。もっと全速力で駆け上げればさらに短時間で山頂に到達することも可能だろう。

どのくらいの速さかつて？ まあ、神社でカップラーメン作っていても余裕で間に合うくらい……かな。

すっげえ！ かっこいい！ かっこいいよ私！

自画自賛スキルもうなぎ昇りです。

だってしょうがないじゃん！

自慢する相手がいないんだもの！

褒められて伸びる子だもの！

……なんかどんどん痛々しくなってるないか？ 私。

そんな感じで山頂を目指しつつ、私は今朝がた供物の御台の上にそつと乗せてきた青い花に思いを馳せた。

あのお婆さんはあの花を見て、一体どんな反応をしてくれるだろう。

突然現れた花に驚くだろうか。

その美しさを喜ぶだろうか。

一体誰が、と訝しがるだろうか。

私のとつた行動が他の誰かの心に影響する、それはなんて凄いとだろう。

私という存在を個人として認識してくれなくてもいい。やっと人と触れあえる、今はそのことがたまらなく嬉しい。心からの感謝の気持ちをどんな風に受け取ってもらえるのか、こんなに緊張して待ったことは今までに一度もなかった。

これまで数え切れないくらい口にしてきたけれど、本当はこんな

にも真つ直ぐで無防備な言葉だったんだ。「ありがとう」という五文字は。

メールや友達同士の会話の中ではこんなふうには使ったことなんてない。

この違いをどう表現したらいいんだろう。心に生まれた純粹で透明な感情をそのまますくい取って込めた、これはそんな「ありがとう」だ。ああ、恩返しをした昔話の動物たちも、こんな気持ちでいたのかもしれない。

もうそろそろ山頂だ、というところでテンポよく階段を昇っていた私はなんとなく上を見上げた。

——タンスが歩いていてる。

ええええ何アレ！？ と、思わずその場に立ち止まってよくよく観察してみると、それはタンスのように引き出しがたくさん付いた箱型の荷物を背負っている人間だった。

箱が大きすぎて頭から腰の辺りまで隠れているので、後ろからだと足だけしか見えない。

その足取りはよろよろと実に危なっかしい。左にふらついたかと思えば右に傾き、よたつきながら階段を昇っている。私今から倒れます的な雰囲気はかなり濃厚なその人を見つけた私は、人だ人だ人だーととにかくお婆さん以外の人間に興奮してしまった。どれだけ人に飢えてるんだ私は。

で、次の瞬間やっぱりというかその人はぶっ倒れた。

ふらあ、と階段から足が離れたかと思うと、そのまま脇の草むらに背負った荷物ごとどっさあ！ と豪快に転がったのだ。ふぎゃっという猫みたいな悲鳴。そして沈黙が降りる。

あ、今行き倒れたのか。
うわ初めて見た！……。

ってちよつと待て！！

突然の行き倒れ劇をばけつと眺めていた私は我に返ると、慌てて
その人の場所まですつ飛んで行った。

背の高い草の中にすっぽりと隠れるように倒れていたのは緑の髪
の美少女だった。

何このタンス誰これ可愛いっわー外国人だよっていうかなんなん
だこの急展開。

「だ、だいじょうぶ……？」

「うう……」

え、今の返事ですか！？

会話成立した！？

したよね！？

「もうだめ……限界……」

おや、と思う。

日本語で理解できるけれど、どこかお婆さんや山で遭遇した人た
ちと言葉が違う気がする。

外国語？ いや、そもそもお婆さんたちも日本語じゃない言語で
話していた。

なぜか言葉が理解できたから気にしなかったけれど。

考えることが多すぎて、細かいことをいちいち気にしていると
つくに私の頭は爆発している。

呑気に呑気に。

している場合じゃない。

美少女を助けなければ！

もうすぐお婆さんがやってくるはずだ。

よし、お婆さんに発見してもらってとりあえず保護してもらおう。
ついでに私も保護して欲しいくらいだけど、そこは我慢。

カモンお婆さん！

レスキューしちゃってください！

第2話 老婆と花騒動 6

一段、二段、三段……。

ゆつくりと長い階段を昇ってくる老婆さんの白髪頭。

そこから視線を少し横にずらした所に倒れている、緑の髪の美少女。

まるで映画のカメラワークのような構図で、私は近くの木の上から二人の様子を俯瞰した。

背景の空は高く青く、眼下に広がる山の緑は目に沁み入るように青々としている。

ピュールルと山鳥の鳴き声が遠くから聞こえた。

どきどき……と、木の枝を握りしめる。

気分はスクリーンの前の観客だ。ど、どうなる、どうなる。

ああコーラとポップコーンが欲しい。できればキャラメルポップコーン希望。できたての熱々で、キャラメルがたっぷり絡まったやつがいいな。シンプルな塩味も捨てがたいけれど、あの胸やけしそうなほどに甘ったるいキャラメルの匂いにつられて売店の列に並び込んでしまうのだ。兄はそれを映画館スメルトラップと呼ぶ。あ、いかんヨダレ出てきた。

ごくりと色々な意味で固唾を飲んで展開を見守っていると、いよいよ老婆さんが行き倒れ少女の側へと近づいてきた。ぐっと私も身を乗り出す。

よし、気づけ！

ほら横、横見てお婆さん横よ！ 志村、横お！ …… ってそれは違う。

四段、六段、七段。お婆さんは全く気が付かない。

八段、九段、十段。その足が止まることはなく、少女の脇を何事も無く通り過ぎようとし……ちよおおつと待ったあああ！

あいや待たれよとばかりに、私は木の上からしゅたつと降り立った。

そう、ここではスクリーンの前でただ指をくわえて眺めているだけの観客ではないのだ。

『山の中で行き倒れた美少女を心優しい老婆が救う』そんな筋書きを現実にさせようとフィルムの外で躍起になっている監督、そうそれだ。想像上のメガホンを片手に持って、私は階段を一気に駆け上る。

そして少女を完璧にスルーして山頂へと向かっているお婆さんに、手を伸ばした。

ぐいと袖を掴んで引つ張る。

指先にざらついた布の感触。——ああ、やっぱり触れることはできるのか。

はっとした様子でお婆さんが私を振り返った。

その距離、たったの階段一段分。

相変わらず、アジア人にも欧米人にも見える不思議な顔立ちだ。

皺だらけの顔にかかる白髪は長く、木製の髪留めで後ろに纏められている。

いかにも老人らしく曲がっている腰のせい、それほど身長の高くない私よりも随分と小柄だ。だが、上品に筋の通った鼻や少し吊り目気味な紺色の瞳を見るに、若い頃は相当な美人さんだったと思われる。

その綺麗な瞳が不思議そうに辺りをきよろきよろと見回し、ふと私と目が合った。

はて、と言いたげな表情で私の顔を見ながら首を傾げる。

……いや、違う。

これは私を見ているんじゃない。私を通して後ろの階段を見ているのだ。

そう、『誰もいない』階段を。

こんなに近くに居るのに、私は声をかけられない。

その代わり、お婆さんは行き倒れ少女のうめき声に気が付いて声をかけた。

「もし、大丈夫かい。そこの方」

うん、よしよし、よかった。

ミッションコンプリート。行き倒れ少女放置ルート回避しました。お腹が減ったと弱々しく言う少女にお婆さんは例のあの肉饅頭を差し出した。

大切なお供え物だろうに、出し渋る気配すらないことに私は軽く感動する。もし私が同じように倒れていたとしても、このお婆さんなら迷わず救いの手を差し伸べてくれていただろう、一人そう確信した。

美少女は倒れていたのが嘘のようにバネ仕掛けのごとく飛び上がると、無我夢中といった感じでそれを食べ始めた。

……私が言うのもあれだけど、凄い食べっぷり。

鬼気迫るとは正にこのことか。

お婆さんもぽかんとしてその様子を眺めている。

ああでも分かる。分かるよ、美少女よ。私はくつと目元を袖で拭く。

だってそれ超美味しいよね！

味良し、量良し、お値段良し……かどろかは知らないけどお金持ちではなさそうなお婆さんが毎日持つてくるくらいだし、恐らくそれほど高くないだろう。

一口食べるごとに肉汁がじゅわあつと出てきて、中に入っている
ごろっとしたお肉を噛みしめると味噌に似た味がして、なんかもう
本当に絶妙なのだ。

ものの数分で食べ終わると背中の中のタンスをがたがた揺らしながら
美少女はお婆さんにお礼を言い、自分は薬取りのニーナ・フィカス
だと名乗った。

名前が横文字だ。やっぱり見た目通り完全に外国人らしい。

ぱっちりとした瞳も髪と同じ緑色。緑の髪も目も初めて見るけど
すごく自然で綺麗な色だと思う。年齢は十八だそうだ。ちよつとび
つくりした。こんなに美人で大人びた雰囲気なのに私と同じ年なの
か。

え、なんなのだろうこの差は。……胸か？

彼女はとある目的で遙々海を越え、この国の都を経由し、この山
まで一人旅をして来たらしい。ちよつと外国語なまりの丁寧な話し
方が耳に心地いい。

ニーナちゃんか、名前も可愛いなあ。

『薬取り』って薬草とか探す職業だろうか。ますます現代っぽく
ないな、この世界。本当にどこだここ。

私はもやもやと考えながらよつこらしよと階段に座り、頬杖をつ
いて本格的に二人の会話に耳を傾ける。

逃げも隠れもしない、堂々たる盗み聞きである。

「そりや難儀だったね。わたしや、この朔月山の麓の里に住んでる
キリナばあさんさ。それだけおしゃべり出来ればもう大丈夫かね。
ほれ、水もお飲み。……私は今からその山頂に用があるから、あ
んたはしばらくここで休んどきなされ。それから帰りに里まで案内
してあげよう」

お、おお、お婆さん、キリナって名前だったんですか！
っていうかここ朔月山っていうんですか！ この山の名前！
会話って、なんて情報が満載なんだろう。と言うよりも今までが
情報無さ過ぎなんだよ……。

「ありがとうございます、おばあちゃん。でもあたし、サクヅキ山のヤマガミサマに一度お参りをしなくちゃいけないのです。その土地の神に断りも無く勝手に山の草花を取るのは、薬取りとして良い行いではないから……」

ほうほう、そんな決まりがあるのか。
自然破壊しまくって家やらビルやらをぶっ建てる現代人達が忘れて
久しい考えだね。

「はあ、それで山頂を目指してたってわけかい。でもあんた、野垂れ死にしそうになる前に一度里を通ってから行けば良かったんじゃないのかい。何をそんなに焦ってるのだから知らないけどね、あんたは私と違ってうんと若いんだから。焦ってもなあんにも良いこたないんだよ」

そっか……。

焦らなくてもいいのか。

それなりに呑気に過ごしているけれど、私は今すぐにでも元の世界に帰りたくてたまらない。焦っても仕方がないと分かってはいる
んだけどな。

「あたしには急がなきゃ、焦らなきゃいけない理由があるのです。
……それに、さっきの肉入りパンで元気が出ました、山頂までぜひ
ご一緒させてください！ だめですか？」

なるほど、ニーナちゃんは訳あり美少女らしい。
悲しそうな顔で「だめですか？」なんて聞かれたら「はい喜んで
ー！」って叫びたくなる可愛さだ。
おかしいな、私も十分訳ありなんだけれど。
この差はなんだろう。……色気か？

結局二人は一緒にオンボロ神社に向かうことにしたらしい。
すなわち、あの青い花がある場所に。行き倒れ劇で忘れかけてい
たよ。

二人の後を追って私も階段を昇る。今度は一段、一段踏みしめて
私の行動と彼女の行動がとうとう交差するのだ。ああまた緊張し
てきた。

そしてついに花がキリナさんの目に映った。

「これは……」

「『エニ・レニ・フロー』!!」

目を見張るキリナさんの眩きをかき消したのはニーナちゃんの絶
叫だった。

「えに……なんだって？」

「なんて美しいの！ 信じられない！こんなに早く見つかるなん
て！ エニ・レニ・フロー、こちらの言葉で言えば『神薬花』です。
あたしはこの花を探すためにここまで旅をしてきたんですっ！ お
ばあちゃん！」

「そ、そうなのかい。ちょっと落ち着いたらどうだい。なんなんだ
いその神薬花ってのは」

「文献にしか存在しない幻の花、伝説の花です。その蜜は万病を治
す奇跡の薬となり、瀕死の人間をたちどころに回復させ、竜よりも
強靱にさせるほどの効力を持つと言われています」

ええええええええええ！

何その花！　ちょ、これそんなに凄い花だったの！？

普通に崖に咲いてましたよ！？

愕然として早口でまくしたてるニーナちゃんの隣で、私もあんぐりと口を開ける。と、その言葉を聞いたキリナさんがくわつと目を見開いてニーナちゃんの肩に掴みかかった。あわわ、曲がった腰が伸びてますよキリナさん！

「そりゃ本当かい！？」

「わあ、は、はい、本当です！　形も色も大きさも全て文献通りですし、この山に……」

「おお！　山神様ありがとうございます！　これでクラトは……クラトは元気になれるのですね！」

キリナさんの目から、はらはらと涙がこぼれていた。

結論から言えば、私は恩返しに成功したらしい。
知らなかった。

病気の孫の回復祈願のために、キリナさんは毎日山神様にお参りしていたのだ。

肉饅頭をもらった感謝の印として、私が贈った青い花。それは万病を治す、神薬花だった。

偶然にも、その花自体が彼女の望みだったというわけだ。

薬を作る代わりにそれを分けて欲しいとのニーナちゃんの申し出に食らいついたキリナさんは、いつものごとく参拝と神社の掃除を済ませると、神薬花を手にとって階段を転がり出しそんな勢いで山を下り始めた。慌ててその後をふらつきながら追いかけるニーナち

やん。

私は二人の姿を再び木の上から見下ろす。

嬉しくて嬉しくて……少しだけ悲しい。

彼女たちには彼女たちの物語がある。その物語に関われたことが嬉しい。

恩返しできたことが嬉しい。

けれど、そこへ参加することは決してできないのだ。目を見て、名乗り合って、会話をして、隣を歩く。そんな当たり前のことができないことが、悲しい。

一段、二段、三段。二人が遠ざかって行く。

どうして私なんだろう、とぼんやり思う。

キリナさんと山を下りていく二ーナちゃんが、少し羨ましかった。

第3話 奮闘少女の計画と誤算 1

ジリリリと鳴り響く目覚まし時計。

耳障り極まりないその物体を脊髄反射で叩き落とし、体をすっぽりと覆う温かな布団の中に再び安寧を求めて深く深く潜り込む。流れ込んでくる冷たい空気を遮断するために、掛け布団を頭の上まで引っ張り上げて、隙間をぴったりと閉じた。

そうして幸福なまどろみを布団の中で噛みしめながらさらなる眠りの世界へと突入しようとする。

……が、無粋な手がそれを阻止した。

——おい、人様より受験が早く終わったからって堂々と学校サボろうとしてんじゃねえぞ。三秒で起きろ。

瞬時に布団が体の上から消え、蓑を取られたミノムシのように無様にベッドに転がる。寒い。

うるさい寒い眠い寝かせる布団返せこの味覚音痴。

——ほう？ 寝汚い妹をわざわざ起こしに来てやった素晴らしいお兄様に向かってそんな暴言を吐くと？

寒い眠い寒い眠い寒い眠い。

呪詛のように呟き、ベッドに転がったまま残された枕にかじりつく、わざとらしい溜め息が聞こえた。

——往生際の悪いやつめ。

起きなきゃいけないのは分かってる。
でもこんなに眠いんだもの。あと少しだけ、寝かせてよ。

——……ちつ、世話の焼ける。

忌々しげな舌打ちの後、ふわりと布団がかけられる。

ああ、あったかいな。

——五分。いいか、五分だぞ。それ以上寝てたら朝飯抜きに刑な。

ははは、超絶不味い朝ご飯抜きなどむしろ望むところさワトソンくん。

そう言いたかったけれど猛烈な睡魔が襲ってきて言えなかった。
代わりに口から出てきた言葉は寝ぼけているせいか、自分とは思えないほど殊勝なものだった。

ありがとう、お兄ちゃん。

完全に眠りに落ちる前に、ふつと微笑む気配がした。
とても優しい気配だった。

異常事態発生。

目が覚めたら、大勢に拝まれていました。

「ああ山神様、私の子供の病気を治してください」

「ワシの子牛達がこれ以上山の獣どもに狙われんようになにとぞ、山神様のご加護をば」

「どうか一雨お恵みくだされ山神様。ここところ、畑の作物の調子が悪うございます」

「俺を都へ行かせてください、山神様。おふくろが反対して聞かないんです」

「饅頭屋の旦那くらい商売繁盛しますように、あつしにもひとつお願いします山神様」

「あいつよりも武芸が上達しますように」

「いつかあの人が振り向いてくれますように……」

「身長が伸びますように」

山神様、山神様、のモーニングコール。

……一体全体これは何事だろう。

もしかして今日は正月か何かですか、三社参りか初詣ですか。

オンボロ神社の前にずらりと並ぶ人、人、人。ざっと目算すれば三、四十人。

山頂のちよつとした空き地がすっかり手狭になってしまう人数だ。老いも若きも男も女も、ある者は地面に膝を付き、ある者は胸に手を当てて、ぶつぶつと呟く人もいれば目を閉じて黙っている人もいる。やり方は十人十色だけれど、皆熱心に祈りを奉げているよう

だった。

私に向かつて。

いやいや、神社に向かつてか。

なんだろう、一夜にしてこのオンボロ神社の信者が急激に増えたのか。それとも今日は山神参拝強化月間か何かなのか。私は目の前に広がる異様な光景をただ呆然と眺めた。

こちらの季節なんて知るわけがないしそもそも四季があるかどうかさえも知らないけれど、今日も空はからりと快晴だ。高く昇ったお日様は麗らかそのもので、温かな日差しを惜しげもなく降り注いでいる。そんなぼかぼかと陽気な中で二度寝する夢を見てしまったせいか、私はすっかり寝坊してしまっただけらしい。

そして目を覚ませば、いきなりこの光景である。
寝ぼけ頭でこの状況をどう理解しようと。

正直、私は怯みまくっていた。この山で初めて目にする人数の間だ。

いくつもの青い目が真剣なまなざしを私に注いでいる。けっして交わることはない視線だと分かっているけれど、これほどの集中攻撃を食らって緊張するなと言う方が無茶な話だ。そもそも見た目だけはいい兄と違ってこれまでの私の人生、目立つ機会なんてそうそう無かった。

あれ……いや、最近あったか。正月の巫女バイトで。

受験の合格祈願をしに次々と襲来した友人たちによって、散々指を差され否応なく注目を浴びたんだっただけ。笑われるわ無断で写

メを撮られるわ、あれは今思い出してもかなりの羞恥プレイだったと言える。

ちよつと待つてなんで皆知ってるのと聞けば「えーだつてお兄さんが教えてくれたよー」と頬を染める我が友人たち。「ぜひ、写真を撮つてきてくれて言われてさー。いいなあ、あんなにカッコイイお兄さんがいて」「うらやましー」

私は誓った。

兄殿る。会つたら絶対殴る。有無を言わさず殴る。

そんなシャイガールな私だ。

ガン見の域をとうに超えている視線の雨の中、目は自然と宙を泳いでしまう。

ふよふよと頼りないそれが供物を置く御台の方に止まった瞬間、文字通り思考が吹っ飛んだ。「目が釘付け」を飛び越え、目が瞬間接着剤並にがっちり固定される。

くわつと私は両目を見開いた。

「っ、豪華になつてるー！ー！！」

御台の上の白い皿の上には、なぜかあの肉饅頭が今にも雪崩を起こしそうなほどてんこ盛りに盛られていた。真ん中にでーんとある、その肉饅頭の山の横には綺麗な花や、穀物でできたおにぎりらしき食べ物や、干した肉や果物、お酒が入つてそんな徳利とくぐりに似た陶器の瓶、などが所狭しとばかりにずらりと並ぶ。

恐らくここにいる参拝客が何かしら一つずつ持つてきて、この量に膨れ上がったのだらう。

………っ！

目に毒過ぎる。

うわああ片っ端から食べ尽くしてえ！ という腹の底からの切実な欲望を根性マックスでなんとか押しとどめ、ついでに垂れていたヨダレを袖でそっと拭う。

食べちゃだめだ食べちゃだめだ食べちゃだめだ食べちゃだめだ。

人には見えない私が何か手に取って食べようものなら、人々は突然宙に浮いた饅頭やら肉やらを目にすることになるのだ。んな怪奇現象が目の前で起きれば私ならかなりびびる。驚きで腰を抜かすに違いない。

いや、というかそれ以前にこれは私のものじゃないんだから食べたらダメだろう。

キリナさんの時の二の舞になる気か。

そこまで考えた時、はたと私はあることを思いついた。

第3話 奮闘少女の計画と誤算 2

ならば、また「恩返し作戦」をやればいいじゃないか。

——ただ己の空腹を満たすことだけを良しとせず、「恩返し」という形で他者に誠意を示すことにより供物を横取りされた山神様のお目こぼしを頂戴する。

それは、私の紛れもない感謝の念と隠しようのない打算が入り混じった作戦。

キリナさんへの「ありがとう」は本物だ。

心の空腹を満たしてくれたあの肉饅頭に報いたいという気持ちは純粹で、嘘はない。

でも、神様のものを勝手に食べたという後ろめたさを「恩返し」という大義名分で包み、半ば開き直っていることもまた確かだった。

別にそれでいいじゃないか、と私の中の私が囁く。
それ以外に私が人と接する方法はあったのか？

二ーナちゃんは私と似たような境遇だったにも関わらず、こんな後ろめたさを感じることなく空腹を満たしたじゃないか。

私に何ができたというんだ。

もつと話しかければよかったのか？

私に起こった出来事を包み隠さず話せばよかったのか？

そうやって少しでも私のことを理解してもらおうと、努力すればよかったのか？

——声をかけた。

ただそれだけで驚かれ、恐怖されたというのに。

「ありがとうございます」と言ってくれた。

皺だらけの顔に涙を流して、何度も何度も。

嬉しかった。

偶然だったとはいえ、私の感謝の気持ちにキリナさんの望みとして受けとめてもらえた。

「私」という存在が認められた気がした。

驚かれ、拒否されるのはもう真っ平だ。

ここがどこで、どうしてこんな風になってしまっただうすれば元の世界に帰れるのか。

考えても分からない。誰も教えてはくれない。

手から零れ落ちていく砂のように日常が崩れ去って行ってしまっ

た。

残ったものはあやふやな自分^{わたし}だけ。

この世界で無様にもがき何者にもなりきれないでいる、私だけ。

……誰か。

ぽつりと心に湧いた願望は、あつという間に荒波となって押し寄せた。

人の姿が見たい。

声が聞きたい。

会話がしたい。

目を合わせたい。

冗談を言い合いたい。

顔を覚えてほしい。

明日もまた会おうと、約束してほしい。

誰か、私の存在価値を教えてください。

誰か、私というものの確かな根拠をください。

誰か、私に生きた感情を与えてください。

誰か、誰か、誰か……。

また夜が来る。狂いそうなほどに孤独な夜が。
元の世界がまた一日、遠くに行ってしまう。

温かい布団をそつと掛けてくれる家族がいた。
一緒に笑いあえる友達がいた。
その全てだ。

突然私の両手から零れていったのは。

ならば。

私は顔を上げた。

目の前には大勢の人々。

空いたこの手で何かを掴みたいのならば。

——「恩返し作戦」、実行しようじゃないか。

第3話 奮闘少女の計画と誤算 3

「まったく、たまげたよ……」

いつもよりも数刻早い店仕舞いの作業をしながら、饅頭屋の旦那は善良そうだと評判の顔をやれやれと振った。彼の今日一日を思い返せば全くもって、「たまげた」の一言に尽きる。

朝、店を開けたとたん目の前に並ぶ客の数にまず仰天した。

開ける時間を間違えたのかと首を傾げたのも束の間、行列を作る見知った里の面々が「これから山神様にお供えしに行くから饅頭を売ってくれ」と、やいのやいのと騒ぎ始めた。

今にも山へ駆けていきそうな彼らをなんとかいなし、まだ寝ている家の者を大声で呼びたててから大慌てで饅頭を作り始める。幸い、下ごしらえは前日の夜に済ませていたので後は蒸すだけであつたが、かつてないほどの盛況ぶりに饅頭屋一家は目を回した。

それから客足は途絶えることはなく、里の者が店前に訪れては饅頭を買っていくというのが延々と繰り返された。ともかくにも、商いの神様が突然気まぐれでも起こしたのかと思うほどの大繁盛である。

だが、どうもこの僥倖とも呼べる出来事の裏にいたのは商いの神などではなく、朔月山の山神様であるらしかった。

興奮した客達はこちらが何か問う前に、手前勝手にぺちやくちやと話をしてくるので、半時もせずに大体の事情を理解することができたのだ。

いわく、「キリナばあさんが朔月山の社から持ち帰った不思議な花で、孫の病気がその日のうちに治り始めた」だの「山神様のお導きで異国の少女と山中で巡り合い、その少女が不思議な花を用いて薬を作った」だの「この饅頭屋の饅頭を供えて毎日祈れば、願いが成就する」だのと、どの話もちよつと聞いただけでは信じがたい話ばかりであつた。

この店は主に田畑で仕事をする百姓が仕事の合間でも買いに来られるよう、里からやや離れた場所にある。そのため、老婆に起こつた花騒動の噂も昨日のうちにここまで届いて来なかつたようだ。一夜にしてこの騒ぎである。

前回の物の怪騒ぎといい、里の者の噂好きとその伝達力もここまですれば大したものだと饅頭屋の旦那は苦笑する。

恐らく自分は、里の誰よりもあの老婆の苦勞と努力を知っている。毎日毎日、ここで饅頭を買って行つては孫の回復祈願のために老体には過酷な山登りを続けていた頑固な彼女を、己は何度止めようとしたか分からないほどだ。

——だが。

（まったく、たまげたよ。キリナばあさん）

驚嘆の思いをもつて、再び胸中で彼は呟く。

まさか本当に、山神様が願いを聞き届けてくださるとは。

しかも、そのおかげでこちらは商売繁盛なのだ。まったくもつて有難いことこの上ない。

善良なる饅頭屋の旦那は、世の中何が起こるか分からねえなあと大きな頭をこりこりと掻いて一人ごちるのであつた。

さてこの分だとしばらくは忙しくなるだろう、明日の分の下ごしらえをするかと、店に入ろうとした時だ。

「だから今日は俺が参拝しに行くって言ってるだろ。ばばあがぎつくり腰になつちまつたんだから。ニーナお前、ばばあを看てろつて

言っただろ」

「ですから、今日は私が行きますので貴方は家に居てくださいと言っているじゃないですか！」

「だからお前が行っても意味ねえだろうが」

「ああもう、いいですか？ 神薬花の効き目は貴方が一番よく分かっているでしょうけれど、貴方の体は昨日まで寝たきりだったのですよ？ 神薬花の作用と経過を見つつ、まずは適切な運動から始めないと……」

「はあ？ 山登りは運動だろうがよ？」

「『適切な』と言っているじゃないですかああ！」

騒がしくやって来た二人の会話を聞き、悪いが今日はもう店仕舞いだと言おうとした饅頭屋の旦那は慌てて振り向いた。そこには、やけに顔の綺麗な細身の少年と異国の顔立ちをした少女が立っていた。

「おう、饅頭屋のおっさん。うちのばあがここの世話になってたみたいで。礼を言いに来たぜ」

「ということは、君がクラトくんかい……？」

そうだと頷いてみせる青年、いや少年か。

歳は十七だと聞いていたが、痩せぎすの頼りなさげな細い体つきは里の同じ年頃の若者たちよりもいくらか彼を年下に見せていた。首の後ろで無造作に束ねられている髪の毛はこの国ではありふれた茶色だ。括りきれなかったその幾筋かが、青白さの際立つ彼の頬をさらりと覆っていた。

いかにも病氣上がりという風体をしていたが、光を失いかけていたという双眸には力強い輝きがあり、今も饅頭屋の旦那をしっかりと捉えている。ややつり眼の紺色の瞳は、なるほど見れば見るほどキリナにそっくりだ。

それにしても、ずいぶんと乱雑な話し方だ。

顔立ちこそ少女と見紛うほど整ってはいるものの、それからは全く想像もできない口調に落差を感じる。もっとう、大人しくて祖母思いの病弱な少年を想像していたのだが、どうやら違ったらしい。まあ、何はともあれ山神様の不思議な花とやらで彼が健康を取り戻したという噂はこうして目の前に現れたことで真実だと分かった。饅頭屋の旦那は、にかつと大きく破顔した。

「いや、何なに、お礼を言うのはこっちの方だ。なんて言っただけ。キリナはあさんはうちの大事な『常連』だからな。ありやあ本当に大したばあさんだよ。元気になったってんなら、これからちゃんと孝行してやりな。親ってえのは孝行したい時にはいねえもんだからなあ」

「んなこと、言われなくても分かって……」

「そつ、そんなことないですっ！ 必ず生きているうちにできます！」

突如、クラトの隣に立っていた少女が甲高い声を上げた。

ああクラトと一緒にいるということはこの子が薬を作ったという異国の少女か、と遅ればせながら彼女に目を向ける。

まるで山の精か何かのように、髪も瞳も美しい深緑の色だ。肌は透き通るように白く、すんなりと伸びる手足は華奢でクラトよりも細い。

こりやあ西の辺りの外つ国の人間だな、と饅頭屋の旦那は推測する。

滅多にないとはいえ、朔月山を越えてくる旅人の中には異国人が混じっていることがある。

その中には西大陸出身の者も含まれており、彼女の話し方の抑揚の付け方やその容姿は彼らのものとよく似ていた。

クラトが突然声を上げた隣の少女を訝しげに見やった。

こうして見ると二人の背丈はそう変わらないようである。

「ニーナ？ どうした、急に」

「あ、ご、ごめんなさい。何でもありません。えっと、あ、おじさん。マンジユウはまだ残っていますか？」

何かを誤魔化そうとするかのように慌てて尋ねてくる少女。

饅頭屋の旦那はちよつと眉根を寄せ、頷いた。

「ああ、残念だけど今日はもう全部売り切れちまったんだよ。悪いな、お嬢ちゃん。……なんでも俺んとこの饅頭を山神様にお供えすれば願いが叶うつてんで、里の連中がわんさかやって来てなあ」
山神様様さと笑おうとしたとき、

「大方、うちのばああの真似事だろ」

先ほどとは打って変わって、切り捨てるような冷たい声が響いた。思わず声の主を見ると、彼は冷ややかに里の方を見つめていた。紺色の瞳がす、と細められる。

視力を取り戻した少年の目には今、世界はどう映っているのだろうか。饅頭屋の旦那はふとそう思った。

少年が口を開く。

「調子がいいと思わないか、おっさん。今までばあがやってきたことを陰で笑ってた連中なんだぜ。山神様がいると分かったとたん、手のひらを返しやがって。今更になつて俺の事を心配していたなんて抜かしながら、ばあにすり寄ってきやがる。ばあが死ぬのが先か俺が死ぬのが先か、噂していた連中が。……本当に心配してくれてた人間なんて、里長とライヒとカンナくらいだ」

「クラトさん」

ニーナと呼ばれた少女が氣遣わしげに少年の名を呼び、その袖をくいと引っ張った。

暗い怒りを目に宿したキリナの孫は、つと少女に目線を向ける。
少女はその視線にびくりと身を震わせたが、懸命にクラトから目を逸らさなかった。

しばらく見つめ合う少年と少女。

饅頭屋の旦那はその張り詰めた空気の中、はらはらと若者二人を見守るしかなかった。

ふと、クラトの目が和らぐ。同時にピンと張っていた空気も緩んだ。

「……仕方ねえ、今日は帰るか。手ぶらで山神様にお会いするわけにもいかねえしな」

少女は少年の袖を掴んだまま、がくがくと大きく頭を振った。

「そつ、そうですね。帰りましょう！ そうしましょう！」

「おっさん、邪魔したな。こいつの許可が下りねえと俺、朔月山に登れねえみてえ。一応、薬師で恩人だしな」

「む。一応じゃなくて、恩人ですっ！ それとあたしは『薬取り』

です！ もしかして、わざと間違えてませんか？ クラトさん」

「ああ？ 同じようなもんだろう？」

「いいえちがいます！ そもそも薬取りは薬を作るのが本業ではなく、もつぱら山などで……」

「はいはい、要するに山菜取りみてえなもんか」

「全っ然ニユアンスがちがいます！」

「にゅあん……なんだ？」

「あああもう！ ですから！」

たちまち騒がしさを取り戻した二人は、ぎゃあぎゃああと言い合いをしながら里の方へと引き返していく。その後姿を見送りつつ、饅頭屋の旦那は一つ溜息をついた。

里の者の心無い言葉に病気がちの少年はどれほど傷つけられてき

たか。今更になって思い知る。

——クラトは里の者を嫌っている。

のんびりとした性格の自分でも、今はっきりと分かった。

だが、このままでは苦労するのはクラトである。

今までは寝たきりだったが、これから彼はますます健康になっていくだろう。

そうして田畑を耕してキリナと共に暮らしていくというのなら、彼は早く里の一員として周りと馴染む必要がある。

里は一つの共同体だ。物に溢れた都ならばいざ知らず、周り近所との協力なしではこんな辺鄙な場所で暮らしてはいけない。協調性なくして生きていけるほどこの里は甘くもなく、豊かでもないのだ。

あの少年の様子じゃそれも容易ではなさそうだが。

ともすれば近い将来、彼はここからいなくなるかもしれない。

——隣にいた異国の少女。

何もかもを切り捨ててしまいそうな彼の瞳から、決して目を逸らさなかった少女。

出会ってたった一日ちょっとしか経っていないというが、既に二人の間は絆らしきものが垣間見える。頑なな少年の心も、異国から来た優しい少女にはその扉を開いたのかもしれない。

だがやはり、クラトが里から出ることは無いだろう。

この里にはキリナがいるのだから。

饅頭屋の旦那は夕暮れに向かいつつある空を仰ぎ、それからその下にある朔月山を眺めた。

——山神様のご加護を真つ先に授かった少年が、この里を嫌っている。

それは何か、縁起の悪いことのような気がしてならなかった。

果たして里の連中の願いは叶えられるのだろうか。

今まで見向きもしなかった社を拜んで。

（答えは山神様のみぞ知る、ってわけか）

見慣れているはずの朔月山が、得体のしれない何かを抱えている
様に見えた。

第3話 奮闘少女の計画と誤算 4

『妙なる花よ。神薬花よ。』

万の病と言えど、其の甘き蜜一滴に敵わじ。

死の淵と言えど、生の光なお明らかなり。

巡り巡れ、満ち満ちよ。

遂には猛き竜の如き力与えられん』

「——ばばあ、また腰、曲がつたな」

寢床から半身を起した少年は、まず最初にそう言った。

窓から差し込む日の光に、眩しそうに目を細めて。

その表情はどこか泣き笑いに似ていた。

それから彼は何かを確かめるように一度天井を見上げた後、枕元にいた少女に目を向けた。

交わるは、紺と緑の瞳。

少年の端整な顔がゆつくりと微笑みをつくる。

まるで、長い間凍えていた固い蕾が春風に綻ぶように。

「綺麗な目してんな、あんた」

少女はカァツと音を立てて顔が真っ赤になるのを感じた。

わたわたと目を逸らせば、それを許さないと言うように頬に手が伸びてくる。

くくつと笑う楽しげな声。

「ああ、『赤い』」

その一言が、全ての喜びを表していた。
彼の世界が鮮やかさを取り戻した瞬間だった。

「ニーナさん、先日は本当にありがとうございました」
そう言って深々と頭を下げるのは、一昨日前キリナの家の戸を叩いた若い母親だ。

暗闇の中、その腕に赤ん坊を抱き悲痛な面持ちでニーナを訪ねてきた彼女。そのとき無惨に青褪めていた顔は、今明るい日差しの下で喜びに輝いていた。ニーナはその表情を見てふわりと深緑の目を和ませた。

「いいえ、とんでもないです。お子さんの具合はその後いかがですか」

「それが、あんなに苦しがつていたのが嘘みたいにすっかり元気になって。あの恐ろしい斑点もきれいさっぱり消えてしまつて、お医者様も驚かれていたわ。……あの、うちの子の病は一体何が原因だったのかしら？」

どう説明したものか、少し考えるそぶりを見せてからニーナは言う。

「ええと。あれは普通の病気ではないんです。内存魔力……多かれ少なかれ誰しもが持っているものですが。うーん、こちらでは何と言つのでしょうか。『気』と言えば分かりますか？」

相手が頷くのを確認して、続ける。

「体を絶えず巡っているそれが、ごく稀にですが突然それまでの調和を崩すことがあります。それが原因で生じた歪みが皮膚上に表層化したもの、それがお子さんにあったあの黒い斑点なのです。通常は二、三日ほど放っておけば自然と調和を取り戻しそれと共に熱や痛みも消えるのですが、抵抗力のない乳児は歪みが暴走しやすくなるため、危険な病気とされています」

実際、あの赤ん坊もあともう少しで命が危うかったのだ。

「そんな恐ろしい病だったなんて……。それじゃ、頂いたあの薬草はさぞかし素晴らしいものだったのでしょうか？」

ぶるりと身を震わせた若い母親は、ちらりとニーナの隣りに立っている少年に視線を送った。

数日前、奇跡の回復をみせたキリナの孫は二人の会話に加わる気は無いようで、先ほどから興味無さげに戸口にもたれかかっている。視線の先を追い、彼女が何を言いたがっているのかピンとくる。

「ああ、クラトさんが飲んだ薬とは違うものです。私が差し上げた薬草は『氣』の流れを一時的に停滞させるものでして、本来は妖魔や魔物……えっと、こちらではモノノケかアヤカシでしたっけ？ の、動きを鈍らせるときに使う毒薬の一種なんです」

「どっ、毒薬!？」

「あ、もちろん心配はありませんよ。薬草として用いるのは、うんと効き目の弱い部分をほんのちよっぴりだけですから。あたしが言いたいのは、作用や効能を正しく知って上手に利用すれば、『毒』と呼ばれる草花でも時には薬となる場合だってあるってことです」

逆に言えば、『薬』とされているものでも使い道や量を間違えればそれはたちまち毒となる。

毒と恐れるか薬と崇めるか、呼び方の違いなど人の都合で勝手に変わるものだ。

全ての症状に等しく治癒を施す絶対的な薬など、この世には存在しないのだから。

ただひとつ、あの幻の花を除いては。

「まあ。ニーナさんはお若いのに本当になんでもよく御存じね」

「いえ、そんな……」

「山神様が信頼なさるのも当然だわ」

大仰な動作で感心して見せた若い母親は、ぼろりと非常に気になる言葉を口にした。

無言のままクラトの目つきが鋭くなる。

ニーナはぴくりと肩を揺らして固まった。

——実はさつきからそのことについて聞きたくて仕方がなかったのだ。

「ごくりと唾を飲み込んでから、いまだ感心し続けている彼女に向かい、思い切って尋ねてみた。

「あのう。ヤマガミサマがあたしの名前を仰ったって、本当なんですか？」

——『薬取りのニーナ』さんという方はあなたですか……！？

突然やって来た見知らぬ女が自分の名前を口にした時、ニーナは思わず耳を疑った。

それもそのはず。

ニーナがこの里に来て名乗った回数はたったの二回。朔月山でキ

リナに拾われた時と、クラトに問われて答えた時だけである。キリナとクラトしか知らぬはずの、しかも昨日やって来たばかりの旅人である自分の名を、なぜ見ず知らずの他人が知っているのか？

ただただ驚いて戸口に立ち尽くしていたニーナだったが、すぐに赤ん坊の様子がおかしいことに気が付いた。

急いで彼女を明るい場所に連れて行き、赤ん坊の症状を確認する。そして慌てて部屋へ取って返し、薬籠の引き出しをがたがたと開けたのだった。

ニーナの旅の相棒は、箱型の頑丈な薬籠だ。九つの引き出しには何百種類もの薬草や薬花や木の根などが、効能と効き目の強度別に分類され、ぎっしりと詰まっている。顔を近づければ染み付いた薬独特の匂いが鼻を刺激する。

クラトが妙な匂いと言うそれは、ニーナにとっては心落ち着く郷愁の残り香である。

故郷がある西大陸は、今は遠い。
海を隔てて東随一の大国、ヒノワ帝国へとたどり着くまでの二月の間。

ニーナは海の上以外を通る時は、珍しい薬草や貴種の花などを探しながら旅を続けていた。

苦勞しながら発見と採取を繰り返せば自然と集まるのは価値の高いものばかりであり、大きな街に着く度にそれらを商人や薬屋に売るなどしてニーナは路銀を稼いだ。

無事ヒノワ国に入国し、都で働きながら必死で情報を集めること一月。

その間も、自国には無い様々な品種を方々で手に入れることができた。もちろん、人が溢れ物がごった返す東大陸一賑やかな帝都である。巧みな話術を得意とする胡散臭い商人や、偽物を堂々と店先に並べる薬屋といった手合いには何度も遭遇した。若い旅人、しかも女であるニーナはどう見ても騙すには格好の獲物であると思われ

たのдарう。

だが、ニーナはそんな紛いものなどには決して踊らされることはなかった。

当然じゃないか、といささか憤慨しながら思う。

そもそも本物を見抜く「眼」が無ければ、薬取りなど名乗れはしないのだ。

彼女は己の職と生き方に誇りを持っていた。

それ故に旅に出たのだから。

今やニーナの背負う薬籠には、そこらの店では滅多に手に入らない貴重な薬で溢れている。

質の高いものが凝縮したその薬籠は、その道の者にとっては垂涎ものの宝箱といっても過言ではないだろう。

……そして今は、それだけに止まらない。

恐らく、国が喉から手を出すほどの逸品がその中にあった。

ニーナの旅の目的。——すなわち、エニ・レニ・フロー神薬花である。

悲願叶って手に入れた伝説の治癒花。

その蜜で、ニーナは薬を作った。だが、それはまだ治験薬ちけんやくの段階である。

それが果たしてどれほどの効果を発揮するのか、答えはほとんど未知数と言っている。

古い文献の文章は曖昧で、服用すれば現実問題どうなるのか、詳細までは分らない。

早く早くと気持ちは逸るが、国に持ち帰る前にまずはそこをはっきりと確かめねばならなかった。

そこでニーナは、しばらくの間キリナの家に居候させてもらうことにした。

もちろん、クラトの回復経過をこの目で見るために。

二人の了承を得て、無事に居候が決まった日の晩。
奇しくも、その晩に赤ん坊を抱いた若い母親が彼女の前に現れた
のだった。

「山神様の御声に導かれた」
そう言つて。

第3話 奮闘少女の計画と誤算 5

当たり前のことだけど。

そして今さらだけど。

私はランプを擦ったら出てくる魔人じゃないし、七つのボールを集めたら出てくる龍でもない。

兄が言うところの「異世界トリップ特典」である言語自動翻訳機能はばっちり作動しているようだが、この世界に来てそろそろ一週間は過ぎようというのに、未だまともな会話すら成功していないという初期段階レベルでのつまづきっぷり。

その翻訳機能以上のトリップ特典……例えば、唐突に物凄い魔法が当然の如く使えるようになったりとか、最強のモンスターをあつさり使役しちゃったりとか、勇者や英雄に祭り上げられたりとか、逆に魔王になって世界征服を目論んでみたりとか、「見つけたぞ我が花嫁……」「そ、そんなっ」的なめくるめく展開とかそういうの。

全くもって起こる気配ゼロ。

兄よ。

ちよいと話が違っぞ。

空腹ゲージならば常にマックス！

動ける範囲、山！

以上！

ああ、限らない残念臭が私の周りに漂っているのがわかる……。誰かファ。リリース持ってきて。

そんな残念臭まき散らす私にできることなんて、たかが知れているのだ。

本当に、マイナスからのスタートだと言ってもいい。

——でも、私は決心してしまったのだ。

ステップ1。

まずは声をかけてみよう！

注意点。

狙いを定めた人だけに聞こえるように、耳元でそつと語りかけましょう。

声はあくまで優しく、丁寧なものに。

驚かれてもめげずにチャレンジすること。

ステップ2。

返事がもらえたら、すかさず提案してみよう！

注意点。

無理のない範囲で言いましょう。

相手が実行してくれるか否か、また成功の有無は、ぶっちゃけ運
としか言いようがありません。

曖昧にぼかして誤魔化しが効くような言い回しを試みましょう。

ステップ3。

結果を待とう！

注意点。

お悩み解決の結果報告があるまで、決して供物じょうぶつに手を出してはい
けません。

待て状態で、ヨダレを垂らしつつ辛抱強く待機すること。

その間に他の人々の解決策も模索しておきましょう。

以上が私の3ステップ計画である。

うむ。

杜撰過ぎてもはや言葉も無い。

仮定を前提に想定してどうするんだ。

意気込んだ割にはちよっとお粗末過ぎやしないか、私よ。

現状を打開するに当たって、多くの問題点を包含していると言わ
ざるを得ない案ですな。

もっところ、抜本的な……。

総理異議あり、異議あり！

却下、却下あ！

静肅に。皆^{みな}まで言うでない、私とてただ漫然とこの計画を立てた訳ではないのだ。

一応だな、それなりに考えてま……………すん。

総理iiiiiiii!!

ええいこれにて閉廷！ 散！

ああ、人間寂し過ぎると頭の中に阿呆ウイルスが湧くのかもしれない。

誰か、除菌もできるファブ。ーズ持ってきて。

というわけで脳内国会議事堂がほどよく解散したところで、3ス
テップ計画開始である。

最初のターゲットは一番熱心に祈っていた、ふくよかな若い女性だった。

大抵の人々が拝礼とお祈りを済ませると満足したように帰って行く中で、彼女だけはいつまでも山神様の神社に向かって祈り続けていたのだ。

神社の屋根の下から外に出て、彼女の側へふわりと近寄る。

袴の裾のしゃらりという衣擦れの音が大きく立たないように、そ
うつと慎重に慎重に。

焦茶色の髪の毛と青い瞳の人だ。ここではこの組み合わせが圧倒的に多いようだった。

顔が西洋人にも東洋人にも見えるのはその色合いのせいかもしれない。ちなみに黒髪や黒い瞳は今のところまだ目にしていない。あれかな、黒い色は珍しいとかまたそういう兄曰く王道パターンのかな。

まあ見えないから関係ないけど。

隣に立ってみると、彼女の体がほんの少しだけ震えているのが分かった。

耳を澄ませると、子供の病気が治らないのでお助けください、みたいなことを繰り返して聞いている。

鬼気迫る何かを含んだ、悲痛な表情。

見ていてなんだか痛々しい。

もしかしてキリナさんが神薬花を里に持ち帰ったためだろうか、とようやく思い至る。

だから彼女はここまでやってきたのか、と。
なるほど。

だとすればこの正月級の騒ぎも納得できる。

恐らく、あの私の思いつきのプレゼントが本物の山神様が起こした奇跡として広まってしまったのだろう。

昨日の今日だというのに、噂とは正に風の如しだなあとしみじみ思う。

きっと皆、この神社は靈験あらたかなのだと勘違いしたに違いない。

ということは、ニーナちゃんは無事に薬を作り、クラトくんという名のキリナさんの孫の病気を治すのに成功したということか。

すごいな、と素直に思う。

同年代なのになんて頼もしいんだろう。

私なんて、たまたま神薬花を見つけただけに過ぎない。

たった一日で効くあの花も相当凄いとは思うけれど、真実クラトくんを病魔から救ったのはニーナちゃんの行動に他ならないのだ。

「薬取り」というからには医療系の知識も豊富にあるのだろうな。

あのタンスみたいな箱の中には薬草がたくさん入っていそうだし、旅をしてきたと言っていたからさぞかし色々な種類のものがあることだろう。

うん。

……うん？

あ、なーんだ！

はい一件目解決、解決。

私は悲痛な顔の彼女に改まって向き直った。

「——子供を救いたいのですか」

そうつと囁く。

「……！？ は、はい……」

よっしゃ返事もらえた！

心の中でガツポーズしつつ、つま先立ちをして静かに語りかけた。

まるで内緒話するように、耳元へこっそりと。

「キリナという老婆と共にいる『薬取りのニーナ』を訪ねなさい。そこに救いの手がきつとあるでしょう」

そう、つまり私は問題をそーれとニーナちゃんに丸投げすることにしたのである。

いや、ごめんニーナちゃん。今の私にはそれ以外の良策が思い浮かばなかった。今度もう一回崖をよじ登って、神薬花取ってくるからさ。なんか伝説の花の割には、あと二、三輪は生えていたし。

ひゅつと息を飲む気配がした。

思わずといった動作で口元に手をやる若い女性。

まばたきの激しさが、声にならない驚きを分かりやすく示していた。心なしが顔が青褪めているようにも見える。きつと突然の空耳に混乱しきっているのだろう。

無理もないな、と私はぱりぱりと頭を掻いた。いきなり何も無いところから声をかけられて、よく悲鳴を上げなかったものだ。山道で声をかけたときは完全に化け物扱いされたから、今度は少しかっこつけて神々しさを意識してみたけれども。結構恥ずかしいなこれ。

驚かせてしまってどうもすみません『おかあさん』。どうぞ、あなたの大事な子供が助かりますように。

痛々しいまでに必死の、子を思う母のうつくしい表情を思い出して、一人そう思う。

人と触れ合うことに達成感を覚えて、私の口元はついほころんだ。だからたぶん気のせいだったんだ。
不意に鼻の奥がツンとしたのは。

私にできることなんて、きつとたかが知れている。

——でも、私は決心してしまったのだ。

空腹と孤独と存在の曖昧さ。

それらを打破してくれるというのなら、可能な限り人々の声に耳を傾けようと。

恩返し。

他者への誠意と神への諂いとを織り交ぜた、独り善がりで傲慢な「恩返し」。

現実だったものは全て幻に消えてしまったんだ。

あるいは、私が幻となって現実から消えてしまったのかもしれない。

そうして虚実入り混じるこの世界に立った時、私が必要としたものは「理由」だった。

明確で、揺らぐことのない存在理由。

自分で見つけなければ。なんとしても。

だって、一体誰が約束してくれるというのだろう。

私こそが唯一確かな「現実」なのだ。

第3話 奮闘少女の計画と誤算 6

誤算の名は何であるか。

答えるならば、ただ一つ。

与えてはいけないその名は――。

鬱蒼と立ち並ぶ巨木の森。

石や岩が其処此処に転がる嶮しい地面の上を巨木の根が縦横無尽に走る。

膝丈ほどもあるつかというほどの太さの根が木と木の間を地上と地中で繋ぐように互いに絡み合っており、まるで無言で行く手を阻んでいるようだ。

朔月山の中腹に無数に存在する獣道。

その一つを少女は少年と共に歩いていた。

「あたし、思ったのですが……あ、すみません。もしかしたらヤマガミサマは精霊や妖精の類の存在なのかもしれないって……あ、ありがとうございます」

話しながら、足元に横たわる苔むした根を一息に飛び越えようとする。先に少年がそうしてみせたように。だが二の足を踏んでしまい、失敗した。

言葉を紡ぎながらもう一度試みようとする木根に靴をかけたところ

で、ずっと目の前に手が差し出される。きょとんとそれを見つめていると、その手は焦れたような動きを見せた。

短く礼を言っておずおずと己の手を重ねれば、意外な力強さで引っ張り上げられた。

大きく、骨ばっている少年の手。

背丈こそ自分とほとんど変わらないが、こういう部位はやはり男女の差というものが出てくるのだろうか。ごつごつとした手を眺めながらニーナはそんなことを考える。

引っ張られるままに木の根を越え、自然に近付いた目線のままに何気なくその腕を辿ると、こちらをひたと見つめる切れ長の双眸とぶつかった。夜空を思わせる紺色の瞳が木々の影にかかって一層、深みを帯びている。

数瞬の間、合わさる紺と緑。

ニーナは慌てて目線を引き剥がし、足場を確認する振りをして視線を下へ落とした。

この少年の眼差しはいつも真っ直ぐだ。

心の奥まで見透かすかのような鋭さにひやりとしたものを覚えて、ニーナは目を逸らす。

逸らせなくなる、その前に。

少年が身じろぎし、彼の茶色の髪が視界の端で揺れる。

自分のふわふわと軽い髪質とは違い、さらりとしていて硬質なそれ。

真っ直ぐで肩口まであるそれを一つにくくった様はいかにも無造作で適当な具合であるのに、それでも彼ならば上品に見えるから不思議だった。異国人である自分の目から見ても端整だと思える顔の造作は中性的で、口を開かねば同性かと思ってしまうかねないほどだ。

……あくまで口を開かねば、だが。

はあ、と呆れたような溜息が落ちた。

「まったく、気をつけて歩けよ。根っこがそこらじゅうにばこぼこ生えてんのが分かるだろう。お前、一人旅してたつてわりにはとろくねえか。そんなんでよくこんな辺鄙な場所まで来れたな」
ずけずけ、さばさば。

形の良い唇から繰り出される言葉は容赦ない。

「なっ、とろくなんかないです！ 大体、こんなに歩き辛い山道なのにクラトさんが速足過ぎるんですっ！」

「あ？ ここそんなに大変な道なのか。……もうずっと山歩きなんてしてねえから、よく分かんねえよ」

そう言つて肩をすくめる少年は、久々の山歩きだと言つ癖に息一つ乱さず涼しげな表情をしている。

ずっと寝たきりだったとは思えないほどの健脚ぶりだ。仮にもこちらは山歩きに関しては本職だと言つてもいいのに。

——やはり確実に、彼の身体機能は高まっている。ニーナは確信を深めた。

伝説の治癒花だからと言えばそれだけかもしれないが、この飛躍的な効き目は普通ではない。

たった数日でここまでくれば、これはもはや単なる「病気の治癒」に収まらぬであろうことは明らかだった。

もしかしたら彼と神薬花の相性が抜群に良かったのかもしれないし、あるいは薬が異常に効く体質だったのかもしれない。どちらにしても、今後まだまだ回復経過に変化が見られるだろう。それだけは確かなのだ。

人の身に、神薬花は一体どこまで奇跡の業を施すのだろうか。
ニーナはそれを確かめねばならない。

故郷に帰る、その前に。

「まさか、本当に竜級ドラゴンに強くなったりなんて……いや、でもそんなことが……ふぎやつ!？」

つい思考の海に沈んでしまったとたん、クラトの忠告もむなしくニーナは木の根に思い切り足を取られてしまった。勢いよく前につんのめる。

耳の横を緑の髪がふわと舞った。

反射的に両腕を伸ばし無我夢中で空を掻けば、ぼすりと何かに体ごと捕えられる。

以降、予想した衝撃はいつまでたってもやってこない。

辛うじて転倒だけは免れたようだ。

ニーナは思わずぼつと安堵の息をついたが、閉じていた瞼を開いた次の瞬間、先ほどの比ではないほどうるたえる事になった。背に、クラトの腕が回っているのだ。しかもあるうことが、自分はまるで彼の胸にすがりつくような格好である。

慌てふためいて両手を押し戻そうとするがクラトの腕がそれを許さなかった。

「ク、クククラトさん!? す、すみません、今離れ」

「薬の……」

ぼつりと年下の少年が低く呟く。

「は、」

「妙な匂いがする……」

ニーナはぱちぱちと目を瞬かせた。

次いで、むつと眉間にしわを寄せる。

——また、薬臭いと文句を言うつもりなのだろうか。

甘い香りなんてするわけがない。自分は普通の年頃の娘とは違う

のだから。そんなことはわざわざ指摘されずとも、百も承知であった。

離れようとして目の前の肩に手を置いた、次の瞬間。すいと梳くように首筋の髪が持ち上げられた。

え、と思う間もなく露わになったそこに緩慢な動作でクラトが顔を寄せる。

そうして静かな声が、無防備な耳朵にそつと吹きこまれた。

「妙な、気分になる」

それは熱の無い、冷静な声だった。

何かの感想を述べるかのごとく無機質なその声。

けれどその響きはごく淡く、微かに。

……甘い。

ニーナはぞくりとした。

「ク、ラトさ……？」

からからに渴いた喉から情けないほど小さな声を絞り出す。

（一体何事が起こって妙な気分とはまさか精神を乱すような毒草の匂いが身体に染みついて…… ああいやでもあれは薬籠の錠付きの引き出しに仕舞ってあるはずで、ならば吐き気を催すほど薬の匂いが強いとかで、でも彼からは嫌悪感のようなものは感じられないし、いやでもあのええ？）

完全にニーナの方が精神を乱されていた。

身を包む温もりに息も絶え絶えになりつつ、あの、と意味のない呼びかけをしたところでクラトがあっさりと身を解放する。

そのまま彼は巨木の陰になっっている隙間にひよいと手を伸ばした。

「お、コドロ草みつけ。これか？ ニーナが言ってた腰痛に効く薬草って。へえ、ホントわかりづれえ所に生えてんだな」

で、ぎっくり腰にはどれくらいの量がいるんだ？ と呑気に尋ねながらぶちぶちと大ざっぱに薬草をひっこ抜くクラト。何を言われているのか呆けた頭では瞬時に理解できず、「はい？」と間の抜けた声を漏らすニーナ。

そしてようやく、そもそもの今日の目的を彼女は思い出した。

「え、あ、はい。それで間違いないです。キリナさんのぎっくり腰は椎間板と神経根との安静が第一で、コドロ草は下肢痛を和らげる効能が……って、そんなにむしっちゃダメですよクラトさん！」

話題が薬草のこととなればそこは職業柄、無意識につるつると説明が口について出てくる。

例え、未だ心がざわついていたらまだとしても。

先ほどまでの雰囲気が束の間の幻であつたかのように、少年は白暫に笑みを乗せ嬉々とした様子でコドロ草を集めている。ニーナは慌てて彼を制した。

彼の側にいると自分はなんだか慌ててばかりな気がする。

「コドロ草は周辺に生えている植物を広範囲に渡って害虫から守る益草でもあります。必要以上に取れば周囲の環境バランスをも崩しかねません。キリナさんの症状でしたら二、三枚程度で十分事足ります」

「あ？ なんだそうなのか、先に言えよ。もう十枚くらいは引きぬいちまったじゃねえか」

なら、とこれまた無造作にニーナに薬草を差し出してくる祖母想いの少年。

「残りはニーナにやるよ。あのでっけえ薬籠で切らしていたからわ

わざわざここまで来たんだしな」

そもそも今日は一人で薬取りをする予定だった。

そして神薬花が生えていないか探してみようと密かに考えていたのに、気がつけば彼も朔月山の中までついて来てしまっていたのが彼女の誤算であった。

クラトが神薬花の薬を飲んでまだ五日と経っていない。

完全に治ったように見えるとは言え、内存魔力は枯渇寸前、加えてあれだけの病状だった人間だ。無理をさせる訳にはいけないのというのに、当の本人がやたらと動きたがる。ニーナとしては本当に気が気ではなかった。

「どうもありがとうございます……じゃなくって！ もう、クラトさんあたしの話ちゃんと聞いていますか！？」

「はいはい、で？ 山神様が精霊か何かだった？」

「そこまで遡るんですか！？」

「ああ、聞き捨てならねえからな」

まっすぐな眼がニーナを貫く。

もしや、この山の神を軽んじる言葉だと勘違いさせてしまったのだろうか。

やや早口になってニーナは弁解する。

「そ、その。あたしなりに考えた結果そう思った訳で、ヤマガミサマを愚弄しようと思って言っただけじゃ」

「んなことは分かっている。俺が聞きてえのはお前『も』そう思ったのはなんでだったことだ」

「『も』？ ええ？ じゃあクラトさんもそう考えたのですか」

「ちよつと考えりや、誰でもそう思うんじゃないの」

コドロ草の葉をいじりながら、クラトは木の幹に腰を下ろし胡座

をかいた。

当然のことのように肯定を返してきた彼を見下ろし、果たしてそうだろうか。異国の少女は内心首を傾げた。

ここ、ヒノワ帝国の宗教観は独特だ。ニーナの国のそれとは全く違う。

『万物には遍く神が宿る』

いわく、神々は人の数以上に多い、と。

知識としては知っていたものの、都で聞かされた話には穀物たった一粒に七人の神がおわすという信じられないものまであり、さすがのニーナも仰天した。

その多彩さゆえに、地方や地域によって信仰の対象となる神は様々に異なり、それが山の神であつたりあるいは海の神や風の神であつたりするというのだ。

その土地に生きる人々が特に崇めるのは、彼らの生活に最も必要とする神である。

一神教の国から来たニーナから見ればそうだった信仰の仕方は随分即物的だと思えたし、非常に現実的だとも思えた。神が多いということについても初めは抵抗を覚えたが、そこは薬を取る際にその土地を守る精霊に祈りを捧げるという習慣を持つ職業柄。対象の違いはこの際重視せず、祈るということに関してだけ考えれば大して変わりはないと思う。というか、無いと思い込めばまあそんな気もしてくるものだ。

それに、神ではなくあらゆる物に守護霊ガーディアンが宿っているのだと解釈すれば割とすんなりと受け入れることができた。

だが、そう解釈していたからこそ奇妙だと思ったのだ。守護霊とはそれそのものに宿る存在であつて、滅多なことが無い限り「人の世」にまで影響を及ぼすことは無い存在である。そもそも『魔力』

の源に近い塊がたまたま条件が重なり物に宿ることによって生まれるのが守護霊だ。当然、人格などは存在しない。

人間に声をかけたり、物を贈ったり、あげく個人名を挙げるなどというどう見ても確たる意思が垣間見えるような行為は、ニーナからしてみれば悪戯好きな妖精や高位の精霊の気紛れによるものとか考えられなかった。

ヒノワ帝国に存在するという溢れんばかりの神々。

もし本当に神々が意思を持ち、真人人と寄り添い近くあったのなら、なるほど朔月山の山神が人の世に干渉したとて不思議ではないはずだ。

だが里は今や蜂の巣をつついたかのように上へ下への大騒ぎである。

まるで、いるはずがないと思っていた存在を初めて目の当たりにしたように。

奇跡が起きたと言わんばかりに。

その一方で、誰もが疑ってすらいないのだ。

それが真^{まこと}の山神であると。

「俺にとつちや、山神様が精霊だろうが物の怪だろうが関係ねえ」

ニーナの思考を読みとつたかのように、少年が独白する。

『ヤマガミサマ』の恩恵をその身に受けた彼。

スカートの裾を払い、ニーナはクラトの隣に静かに腰かけた。

聞く体勢を整えた少女をちらりと横目で見たクラトは、目を閉じて背後にある木の幹に頭をもたせかけた。

こつり、と音が響く。

「……冬が訪れた。それまで経験したことのない病にかかって、俺

は失明した。それから、ばばあが毎日山神様を参拝するようになった。俺はそのことを知っていたし、そんなばあを陰で馬鹿にする言葉も聞こえていた。目が悪くなると耳が良くなるって本当なんだな。……ああ、里長は何も言わずにしょっちゅう見舞いに来てくれたな。あと二人、今は里長と一緒に山向こうに出かけているライヒとカンナつつ、ちっせえガキの兄妹がいるんだが、そいつらも本当に俺を心配してくれた。いつか、俺がふっといなくなっちまうんじゃないかって言ってな」

あいつらだって大変なのにな、と彼は目を閉じたまま苦く笑う。笑い、そしてまた表情を消して続けた。

「……ばばあは朔月山に登り続けた。やめるなんて言えねえまま、俺はいつも死ぬことばかり考えていた。本当に捨ててしまいたかったんだ。ばばあに下らねえ苦労しかかけらんねえような、そんな重荷の人生なら。いっそ」

少年の声は奇妙に凪いでいた。
胸が痛い。

ああ、彼は体も心も苦しんで苦しんで、そうして長い日々を生きて来たのだろう。

初めて彼を見た時のことを思い出す。

あの時、彼の焦点を結ばぬ目は確かに濡れていた。けれどもそれは、決して死を望む者が見せるような暗く弱々しいものではなかったはずだ。

手を伸ばして、少年の骨張った手をそっと包む。

クラトは目を見開いたが、視線は二ーナには無く宙にあった。

「どんな人間にも寿命があるように、心つてのにも寿命があるって

分かった。なら俺の心はとくに老衰していた。それでも、そんな風に死にたがっている癖に俺は生きていた。ばばあにしがみついて何年も、何年も。……けど」

ふと、淡々としていた声音が和らいだ。

「けど、山神様に救われた。そして何よりお前に、救われた」

気が付けば、彼はこちらを見つめていた。

息すら忘れてしまいそうになる、真摯な眼差しで。

包んでいたはずの手が逆に包み込まれる。大切なものを扱うかのように、丁寧に。

「ありがとう。ニーナ。俺とばあの前に現れてくれて。お前は俺に光をくれた。目を治したってだけじゃない、いつ死ぬか分からねえいつ死んだっていいと思っていた俺に、生きることの輝きを……希望の光をくれたんだ」

ともすれば冷たさすら漂う少年の端整な顔が、温かく柔らかに綻んだ。

ニーナの姿を初めて目に映した、あの時のように。そこに切なくなるほどの喜びを浮かべて。

もう、目は逸らせなかった。

少女は故郷を立つ前に、計画を立てた。

東大陸に渡り、都で情報を集め、何としても神薬花を見つけること。見つかったらその効能を確かめ、そして直ぐ様ここに帰って来ること。

必ず、必ず。

その為に今まで何度も修羅場を潜り抜け、この数カ月たった一人で旅を続けて奮闘してきたのだ。

だが、少年の笑顔を見つめながら自身の計画に誤算が生じつつあることを少女は知る。

それは、予想だにしていなかったもの。

それは、与えてはいけない名前。

誤算の名は、「恋」

第4話 透明少女に答える声 1

私は探し物をよくする方だ。

あれがないこれがない。昨日ここに置いたのに。さっきまでそこにあつたのに。

ぶつぶつ、うるうる、いらいらの三重奏は日常茶飯事。

電車の定期入れに始まり、携帯電話、小銭入れ、油性ペンのキャップ、靴下のかたっぽなどなど。

それが必要なときに限って無くなるから困るのだ。

むしろくしゃして兄に八つ当たりすれば、整理整頓しないお前が悪いとすげなく返される。

それが素晴らしく正論だからいよいよ腹が立つ。

ぶつぶつ、うるうる、いらいら。

でも見つからない。

それで「あーもういいや！」と叫んで探すのをやめた途端、それはひょっこり見つかるのだ。

毎回、毎回。

そこで私はふと考えた。

探し物というのは探し続けているからこそ見つからないのかもしれない、と。

見つからないから探すんじゃない。

探すから見つからないんだ。

一見すると矛盾しているようでいて、これはちょっとした真実だ。例えば一日分だけ欠けた月を見てなんて美しい満月だと微笑むように、無くしたことに気が付かない人は全てを持つ者と何ら変わりはないんじゃないだろうか。

見果てぬ夢をいつまでも追い続ける人は、夢の終わりを見つけて

しまわぬようにと願う人ではないだろうか。

彼らは探さない。

探そうとは思わない。

探すことを望まない。

だからそこにきつと満月は存在するし、夢は終わらずに続くのだ。

うん、まあそういう屁理屈をこねこねした所で私もそろそろ探すのを放棄しようと思う。

とめどもない思考の海から顔を出した私は惰性で走っていた木の上でようやく足を止めた。下を見下ろすと、清流という言葉が尻尾巻いて逃げて行きそうなくらいに綺麗な川が流れていた。

ああ通りでさっきから涼しげな水の音がすると思った。

白いカーテンのような滝が柔らかく苔むした緑色の岩肌の上をけぶるように滑り落ちてゆくのが見える。空気はひんやりとしていて辺りは静寂の粒子がみっしりと集まっているかのような深い静けさがあった。

いかにも幽境の地という感じが。

「よつと」

流れの中ほどにある大きな岩を目がけて木の上からふわりと跳躍する。

とん、と岩の上に華麗に着地。

この身軽さは一度慣れてしまうと将来的に非常に危険だと最近判明した。

今も眉ひとつ動かさずに飛び降りたけれど、ゆうに三階建ての家の屋根ぐらいは高さがあった。つまり元の体に戻った時にも同じ調子でいたら、それはただの飛び降り行為になるわけだ。

世を夢むにはまだ早いそんな私は番茶も出花な十八である。

着地と同時に膝をついて下を向くと、その拍子に髪の毛が肩から流れて頬にさらりとかかった。

ええいうつとおしい。落ちてくる黒髪を片手でぺいっと払って、ふむと考える。

髪留めか何かをそのうち調達するべきだろうか。

もちろんシュシュとか贅沢は言わない。

もうどこかそこら辺の蔓とか蔦とか何でもいいよね。

うん、天然素材過ぎてきつと泣けてくるよね。

岩の上からそうつと手のひらを水面の上にかざしてみた。

黒い斑点模様の魚が二、三匹、小さな背びれを震わせながら軽やかに通り過ぎてゆく。

すごい。水中じゃなくてまるで空中を泳いでいるみたいだ。

滝壺の時は水の透明さというよりもその深さと青さに驚いたけれど、この清水つぷりには違う意味で驚かされる。それはもうペットボトルに詰めて名水百選ラベルでもべちーんと貼ったるかっつて勢いの透明さだ。ああ本当の川とはこうあるべきなんだろうなあ。

魚の鱗がちらちらと光を跳ね返す。

その気まぐれな輝きが淵の方へと競うように向かっていくのを私はぼんやりと見送った。

それからかざしたままの自分の手のひらに再び視線を向ける。

水は透き通っていて、流れは憎いほど穏やかだ。

ひらひらとかざした手を横に振ってみる。続いてぐー、ちよき、ぱー。いないない、ばあ。

……あっかんべー。

やっぱり、駄目か。

穏やかで鏡のような水面。いつも通りそこには何も映っていない。

ちくしょーと思いながら私は雪駄と足袋を脱いで岩の上にぽいと放ると、裸足の足を川面にちゃぷんと垂らした。

「おーきもちー」

木陰の下を流れる川の水はほどよく冷えていて、歩き通しの足がすーっと癒されていくようだ。ばしゃばしゃと水面を跳ね上げれば、飛沫が木漏れ日に触れてきらきらと宙を舞った。緋袴が盛大に濡れてしまったけれど、どうせ高速自動乾燥機能が発動するだろうから気にしない。

今最も気にすべきことは他にあるのだ。

私は駄々っ子みたいに足をバタつかせるのをやめて、はあと溜息をついた。

あーあ、こんなに必死にあちこち飛び回って探しているのに。

「ほんと、どこにあるんだろ」

ぽつりと呟いてみるも、当然答えなんかが返ってくるはずもなく。

『ほんと、どこにあるんだろ』

……………え？ いまの、だれ。

ばばっと物凄い勢いで背後を振りかえると、いつの間に現れたのか。

そこには小さな男の子が一人、川の上に立っていた。

川の上……………上！？

どういうこったい、と思わず足元を凝視してしまった。

裸足のちまっこくて可愛らしい足が確かに水面の上に乗っている。川の水がやたらと綺麗なものだから、足元に広がる波紋を見落とすと空中浮遊しているようにしか見えない。

私は一瞬、まさか幽霊か！？ と自分の状況は棚の上にぶん投げ

て本気でびびってしまった。

突然の登場に呆然としつつも足元から上へと辿るように視線を動かしてしげしげと観察。浅葱色の甚平に似た服。髪は灰色だ。

というか睫毛も眉毛も瞳でさえも、塗りつぶしたような灰色だ。

鮮やかさとは程遠く温かみの無いその色は、全体的に彼をどこかぼやけた印象にさせている。

透明じゃないから幽霊ではなさそうだが、人のようにも見えない。……なんだろう、気配が希薄な気がする。

奇妙なほど感情が窺えないその灰色の目は私の方を向いてはいなかった。

どうやら自分の手の中にある物をじっと見つめているようだ。私もつられてその視線の先を見やる。

ん？ ちょい待って。

きみきみ、それもしかして。

「……オカリナ？」

「……オカリナ？」

あどけない声が私の言葉を正確になぞった。

無機的な瞳をぱちりと瞬かせる小さな男の子。私はうんうんと頷きながら立ち上がった。

「そうそう。それ、ちょーつと見せてもらってもいい？」

「そうそう。それ、ちょーつと見せてもらってもいい？」

ほぼ棒読みでそっくり同じ言葉を返された。……一体なんの遊びだろうかこれは。

そついえば小さい頃わざと人の真似をする男子がいたっけなあ。真似された友達が怒って、もうやめてよ先生に言うよって言った

ら「もおやめてよ」おセンサーにいうよ」みたいな感じでへらへら笑っていた。こいつは相当馬鹿なんじゃないかと白けた目で見ている当時の私、ランドセルもキュートな八歳である。

ちなみに十年後、そこには熱烈に将来を誓い合う友人と男子の姿が……！ というオチ。なんかもう本当におめでとうございました。ぺぺぺつ。

——とはいえ。

水面に静かに立っている男の子からはそういった人を揶揄するような気配は全く感じられないので私としては全然怒りなんて湧いてこない。

が、しかし相変わらず私の方を見向きもせずに、オカリナもどきの白い笛を珍しい物でも見るようにひっくり返したり撫でたりしているのはいかなものか。

「あのさ、それ、きみの笛？」

「あのさ、それ、きみの笛？」

言いながらオカリナを軽く振る男の子。

いやいや、それ吹く物だから。中に何も入ってないから。

「私ね、今それに似た物を探しているんだけど」

「私ね、今それに似た物を探しているんだけど」

オカリナを鼻先に近づける。

いや、臭いはしないんじゃないかな、うん。するなら多分唾液の臭いと思うよ。

小学校の時のリコーダーってそんな感じじゃなかったっけ。

ちゃんと洗わなきゃダメだもんなあれは。

「私が探しているっていうか、それを山で失くしてしまった人がい

てね。とても大切な物なのにつて困っていたから、私が探そうとしているんだけど……」

そう。

今私がこんな風に朔月山を駆けずりまわっている理由。

これは数ある恩返し作戦のうちの一つなのだ。

これまでも、探し物系の作戦は何回か成功していた。

参拝者の探し物をたまたま見つけてきて御台の上に置いていたら、いつの間にか「山神様に失せ物をお願いをすれば山の隅々まで探して来てくださる」とかそんな噂がまことしやかに流れてしまったらしい。

警察犬じゃあるまいし発見率低いすよ、とか思いつつ頼られると俄然やる気が出てくるから私も大概調子がいい。

山一個分の範囲での探し物というのはなかなか大変だけれど、雨を降らしてくれとか身長伸ばしてくれなんてどう考えても無茶ぶりだろそれ、という願い事に比べればまだましなものだ。

それになんだか最近妙に勘が冴えていて、こちら辺かな〜と思う方向に行つて探せば数時間で見つかるのだ。大自然に溶け込み過ぎで、よく分からないシックスセンス的な能力でも開発されたのだろうか？

人外にまた一步近づいた気がしなくもないけれど、便利だからまあいいや。

妻の形見の髪飾りやら、蓄えが詰まった蔵の錠やら。

そんな大事な物をなぜ山に持つてくるそしてなぜ落とすつ、と草むらをかき分けながら思うこともしばしばだったけれど、それ故見つかった時の喜びは大きいらしく、そういった里の人はその日のうちに供物をどつさりと持つてきてくれた。

それらをもぐもぐ食べながら、私は「……よし次もがんばろうかな」と決意を新たにするのである。

が、しかし今回は勘が外れに外れて中々見つからなかった。

そろそろ例のぶつぶつ、うるうる、いらいらの三重奏が始まりそうだったので、途中放棄と言う名の休憩をこの川でしていたというわけだ。

目標物確認します。

素焼きの白い笛、指穴は十個。うん、あのオカリナっぽいやつで間違いないだろう。

この不思議くんが拾っていたのなら、通りで探しても探しても見つからないはずだ。

少年よ、ネコババはいかん。拾得者は速やかに拾得をした物件を遺失者に返還するか、または警察署長に提出しなければならぬと日本の遺失物法にもあるじゃないか。

まあ日本じゃないけどね。

警察すらないけどね。

そもそも私第三者だけどね。

よし。こうなったらここはひとつ、優しく取り返すべきか。

落ち着いて、優しく、オブラートに包んで……。

ふと、男の子が初めて顔を上げた。微かに首を傾げ、口を開く。
『私が探しているっていうか、それを山で失くしてしまった人がいてね。とても大切な物なのになって』

「ええーい、やめんかい!!」

オブラートを引きちぎって私は叫んだ。

第4話 透明少女に答える声 2

気を取り直して、こほんと一つ咳払い。よし。

「いらつしゃいませー！」

『いらつしゃいませー』

「ありがとうございますー！」

『ありがとうございますー』

「温めますか！」

『温めますか』

「はい喜んでー！」

『はいよろこんでー』

またおこし下さいませーって、なにその棒読み復唱！？ 全然心がこもってねえ！

あーだめだめ全然だめだよ、そんなんじゃーお客様からクレーム来ちゃうよ。やる気あるのか少年。もっとこうスマイルゼロ円で明るくさあ、腹から声を出してさあ、なんて言つのかな。お客様に今日一日の活力をだな……。

——って、はいもうボケ長いね！ 突っ込むの私しかないからね！

ナチュラルに脱線しました。

いやあんまり真似するものだから、つい。

……でもこれでよく分かった。

接客に向いているかどうかはさておいて、この不思議くんは本当に私の真似しかしてこないようだ。マネだかモネだかゴッホだか知

らないけど、会話する気ゼロとはいっそ清々しいじゃないか。

甚平姿の不思議くんはオカリナもどきを両手に持ったまま、じつとこちらを見ている。見事なまでの無表情だ。感情というものがごっそりと抜け落ちてしまったかのような、ただ顔という土台の上に目と鼻と口を乗せました、そういう表情をしている。幼い姿にはまるで不釣り合いな……。

人間味が無いという意味でいうならそれこそロボットそのもの、もしくは精巧なマネキンだ。でもよくよく観察してみると、どこことなく戸惑っているようにも見える。灰色の目が何かを探そうとするように、右へ左へとろろろ動いているのだ。

何かを探す……？

ああ分かった。

この子もそうか、私の姿が見えないんだ。

そっか。

声をかけても全然驚かなかったから当然見えているものだと思うていた。

もう慣れてしまった小さな落胆が、ぽつりと苦く胸に落ちた。無意識の期待ほど虚しいものは無い。

ぱちぱちと灰色の睫毛を動かした後、不思議くんはこちらに向かってすつと一歩踏み出した。

一歩、二歩、三歩と彼が歩くと、円形の波紋の軌跡が水面に描かれていく。

あ、きれいだなーと思って呑気にそれを眺めていたら。……なんか思ったよりも近づいてきた。

え、ちょ、止まらないの？

近い近い近い。

「ストップ！ それ以上近づいたらぶつかる！」

『ストップ、それ以上近づいたらぶつかる』

そう言うなら、なぜ岩の上にまで上がって来る！ と怒鳴りそうになった。

想像してほしい。小学生くらいの男の子が無表情で近づいてくるのを。

なんかよく分からないけどちょっと怖いものがある。

ゾンビが突然出てくる系の怖さじゃなくて、ジャパニーズホラー系だ。

迫って来る分だけ、ひくと後ろに下がれば、あっという間に岩の端まで追いつめられた。

これ以上下がったらもうレッツゴー着衣水泳である。

これはあれだ。まるで目隠し鬼のようだ。

逃げ場がない場所で鬼に手を伸ばされる、あの瞬間のひやっとした感覚が全身を駆け巡る。

「ここ、ここにいますから！」

私は裏返りそんな声で叫びながら、思わずがしつと不思議くんの頭を掴んでしまった。ちょうど掴みやすい位置にあったのだから仕方ない。無駄に背の高い兄から「ちんまい」呼ばわりされる私でも容易に掴める位置だ。

なんだか思ってたよりも小さな頭だった。

そしてその灰色の髪の毛は私の予想よりもずっと……温かかった。その時だ。

『うっ、ここにいますから』

少年がそう言って、微かに頷いた。
うなず

——あ、今初めて。

この不思議くんと意思の疎通が図れた気がする。
そう、そうだよ。ここにいるんだよ、私は。
きみは気づいてくれるの？

『……オカリナ？』

それはさっき私が言った言葉だ。
けれどこれは彼の言葉だ。きつと知りがっているんだろう、その手の中にある物を。あんなに興味津津な様子だったから。

「うん。それ、たぶんオカリナ。息を入れたらね、音が出てくるの」

びっくりするくらい声が震えた。

だって今、私……「本当に」会話している。

驚かず恐れず怯まず、ただ純粹に私と言葉を交わそうとする人が目の前にいる。ああ、私はいつからこんなしょうもないレベルで舞い上がる様な人間になったんだろうか。どうしてこんなにも嬉しいんだろう。

不思議くんは私に頭を掴まれたまま、しばらくするとオカリナもどきにそうつと口をつけた。

おお、理解してくれたか。素直ないい子だ。

うん、でもね。

「そこ吹く所違うから。そこは指で押さえる場所ね。吹くのはその飛び出てる部分だよ」

つい、笑ってしまった。

笑ってから私はまたびっくりした。

声に出して笑ったの、久々だ。

全然気が付かなかった。

無言で不思議くんの頭を撫でてみる。

彼はきよとした顔をして（無表情だけど）今度は正しい吹き穴に口を寄せた。

ぴよーと柔らかい音がした。

私はまた笑った。

笑った拍子に涙が出そうになった。

不思議くんはその音色に体をびくりと揺らし、たった今自らが奏でた物体をしげしげと眺めた。

塗りつぶしたような灰色の瞳の奥に光が灯る。

彼の中で何かが渦巻いていくのが分かった。それが急激に、強烈に灰色の目に宿る。

相変わらず無表情だったけれど、静かな、そして劇的な変化だった。

そうか、と突然私は納得した。

別に今さら何がいようがいまいが、自分がこんな有り様なのだからもう何が起ころうとも不思議じゃなかった。だから現実主義者の私がこんなことを思ったとしても何らおかしくはないだろう。

——山にいて、人の言葉を繰り返す人ではない存在。それは……。

「きみ、もしかして『山彦』なの？」

もしそうだとしたら。

彼は「真似しかしてこない」のではなく、「真似しかできない」のだ。

聞こえた言葉をただ繰り返すだけ、他人の感情をなぞるだけ。だからこんなにも衝撃を受けているのだろう。

何にも囚われずに、自分だけの音を発することができて。

『きみ、もしかして』

「あーっと、いちいち全部真似しようとしなくていいよ。うーん。

あ、じゃあこうしよう。私が質問するから答えが『はい』なら一回、『いいえ』なら二回それで音を出してくれる?」

ぴよー。

返事早っ！

まずは「はい」ってことか。

「じゃもう一回聞くけど、きみは本当に『山彦』なの?」

ぴよー。

「そのオカリナは拾ったもの?」

ぴよー。

「きみみたいな存在はこの山に他にもいるの?」

ぴ……。

「あーっと、人間でも動物でもない存在って言ったら分かる?」

ぴよー。

「他にもいるんだ」

ぴよー。

「でも私、ここ二週間くらい朔月山に居るけど見たことないよ。普通は会えないものなの?」

ぴよーぴよー。

「あ、会えるのか。ええ何このファンタジー展開。あ、そういえば、きみに名前はあるの?」

ぴよーぴよー。

「……え!?!? 無いの!?!?」

ぴよー。

「そうかあ」

なんかめちゃくちゃスムーズに会話が成立してる。この子、順応

性高いなおい。

それにしても、ものすごくきらきらした目で（無表情だけど）こ
つちを見てくるのはなぜだ。

まあ若干視線ずれてるけど、そこは仕方ないとして。

「もしかして、名前が欲しかったりするの？」
ぴよーっ。

あらまあ元気がいいこと。無表情だけど。

……………。

「え。なに、まさか私が付けてもいいの？」

ぴよー！。

第4話 透明少女に答える声 3

氏、名、あだ名、敬称、職名、偽名、戒名、洗礼名、アーティスト名にハンドルネーム。

古今東西過去現在、とかく人とは何かしら名前を持ちたがるものだ。

近頃の世の中じゃとんでもない名前を我が子に付ける親もいるらしい。

地球と書いて「あーす」やら、楽舞里と書いて「らぶり」やら。正直、ハイカラってレベルじゃない。

でも、うわーとかあちゃーとか思っちゃいけない。そこに親の愛情が存在するのなら、周りがとやかく言うのは無粋というものだ。その子が成長し自分の名前と対峙した時いかなるコンフリクトを抱くかという現実問題はさて置いて。

とはいえ、さすがにあれには私も絶句せざるを得なかった。ほらあれ。

光宙と書いて「ぴかちゅう」

何か、ほんと、もうね、他人事だからどうでもいいんだけどさ。どうでもいいんだけどね。

胸が張り裂けんばかりに将来が心配だぜ……！

だが待てよ、もしかしたらまだ時代がぴかちゅうに追いついていないだけかもしれない。

うん、そうだ。きつとそうだよ！

と無理やり自分を納得させた所でそろそろ本題に戻ろつか。

不思議くん改め山彦少年の瞳は、その曇り空の色に反して眩しいまでの輝きを放っていた。

たとえば表情がミリ単位すら動いていなかったとしても、目は口ほどに物を言うもの。

「期待」という二文字を主張する灰色の目は、無言でありながら実に雄弁だった。

私は彼の頭をよしよしと撫でてやりつつ、頭の中では目まぐるしく思考をフル稼働させていた。

まだ名は無い、無いから欲しい、欲しいから付けてくれ。

つまりそういうことらしい。

自分から聞いておいてなんだけど、果たしてそんなに簡単に決めてしまつていいものだろうか。

というか会ったばかりの私で本当にいいのか。私である必要性があるのか。

「名前を付けてくれそうなら知り合いとか、いないの？」

聞くと「はい」の一音が返つて来た。

「じゃあさ、自分で決めようとは思わないの？」

少し間が空き、その後再び「はい」。

「今ここで決めてほしいの？」

大きめの音で「はい」。

うつむ。

これはもう本格的に、私が命名者にならねばならないようだ。

すっかり質問したことがよもやこんな流れを作ろうとは。

一体誰が自分の名前を初対面の人間に決めさせようとするなんて考えるだろうか。

私は「分かった」と大きく頷いて了承の意を彼に示し、あ、そうは見えないんだったと思い返して、ほんと灰色の髪の毛を軽く叩いた。

無言で両目をぱちくりさせる山彦少年。

おし。

「ただし！ 一つだけ条件ね。それを呑むなら、きみに素敵な名前を考えてあげる。できる？」

わざと試すような声を作って、そう聞いてみる。

条件内容の提示より先に確約だけでもらおうなんて我ながら卑怯千万だ。

でもここは大事なところなので、悪しからず。

「どうかな？」

返答を促すと山彦少年は無表情のまま、オカリナをぴよーと一回鳴らした。

ふ、ひっかかったな……じゃなくて。

私は遠慮なくその条件を口にした。

「うん。じゃあそのオカリナ、渡してくれる？」

山彦である彼が最も欲するもの。

それはやはり他人の音ではなく、自分だけの音だろう。

オカリナをいたく気に入ってしまったというのは見れば分かる。

音を出したくてうずうずしている気配も。

でも、じゃあそれをあなたの物にしましょうというわけにはいかないのだ。残念ながら。

あるべき物は、あるべき場所へ。

どうか見つかりますようにと懸命に祈る人の為に、私は私にできることをやるまでだ。

私の条件を耳にした山彦少年はびっくりと肩を揺らし、戸惑うように何度も瞬きをした。

ぎゅ、と小さな手がオカリナもどきを遠慮がちに握りしめる。

……うおーその行動、泣き喚かれるよりも数倍良心にダメージが

来る。

まるで灰色の捨て猫がおどしながら小さな魚をくわえているみたいだ。

恐らく、と私は努めて冷静に考える。

その手からオカリナを無理矢理奪うことはとても簡単だろう。

条件を呑むって言っただろう、あれは嘘だったのかとかなんとか言って彼を非難し、それから意気揚々ともぎ取ればいいだけなのだ。それで済む。

二兎追う者は一兎を得ず。

あれもこれもと欲しがるだけなら誰にだってできることだ。

欲望と満足の天秤は、いつだって欲望へ傾きやすく作られている。欲しがるものを欲しただけ与えるなんて、誰にもできない。

そう、それこそ、神様でもない限り。

——だけどね。

唇を舌で一度湿らせる。

そして、すうと息を吸い込んだ。

静寂が満ちる幽境の川辺に、私の下手くそな口笛のメロディが鳴り響く。音程は外しまくるし、高い音は途中で掠れるし、我ながら悲惨なものだった。吹き終わると、私はぼかんとしている少年の手にそっと触れた。にっと笑顔を浮かべて見せる。

「ほら、大丈夫だよ。確かに、きみは言葉を生み出せないかもしれない。でもこんな風に、きみはきみだけのオカリナを吹けるんだよ」

——欲しいものを欲しいだけ与えるなんて、誰にもできない。
ただどね、私は思うんだ。

あれもこれも全て与えることは無理だとしても、あれに代わる何か、これに近い何かを一緒に探すことはできるんじゃないかって。それは決して妥協なんかじゃなく、新しい可能性を見つけることだ。欲するものそれ自体を探そうとから、見つからないんだ。雨なんか降らせないに決まってる。身長を伸ばすことなんかできるわけがない。

でも私は。

「これ、口笛っていうんだよ。教えてあげるから、それを本当の持ち主に返してあげよう?」

私は、私にできることをやりたい。

遠くの木の上で山鳥が鳴いた。

岩の上に沈黙が落ちる。

控えめにささやき続ける水の音だけが二人の間をすり抜けてゆく。山彦少年からは、「はい」も「いいえ」も返ってこなかった。

なぜなら、私の手にオカリナを差し出していたからだ。

手渡されたオカリナは白くて軽くて、どこにでもありそうな代物だった。でもその中にはきつと、持ち主の鮮やかな思い出がぎゅしりと詰まっている。だからそれは重たかった。

「ありがとう」

礼を言ってから白衣の袂にひよいと仕舞う。

あ、今オカリナが突然消えたみたいに見えただろうな、と思うとちよつと面白かった。

さて。名前、名前かあ。

……ぴかちゅう。

いやなんでもないです。

ヒコ、だとの捻りもないしなあ。

とりあえず岩の上に腰を下ろして、脱ぎ捨てていた雪駄と足袋をもそもそと履いた。

緋袴も、もうすっかり乾いている。

ふと私は先ほどの自分の行動を思い出した。

水に映る自分を見ようとしたこと、独り言を呟いたら返事が返ってきたこと。

その瞬間、閃いた。

「……エコー」

ぼつりと呟くと、少年が首を傾げて繰り返した。

『エコー』

「そう。きみの名前、エコーはどう」

それはギリシャ神話に登場する森の精霊^{ニンフ}。

他人の言葉しか繰り返せない彼女と、美少年ナルキッソスの物語。

……まあ、山彦少年がエコーだとすれば私はナルシストの語源であるナルキッソスってことになるけれど、万が一にも私が水面に映った自分に恋することはないだろう。水にすら映らないのだから。

というか、例え映ったとしてもそれは無い無い。

ここしばらく自分の顔を見ていないが絶世の美少女ではなかったはずだ、うん。

もやもやと自分の顔を思い出そうとすると、それを遮るかのよう
に兄の顔が浮かんだ。

私の兄は悔しいことに美形である。

私は兄に全く似ていない。
ゆえに私は美形ではない。
以上。

あれ。何か言葉にならない黒い感情が渦巻いているよ。わあなん
だろこれ兄殴ろう絶対殴ろう。顔を。

またもや脱線しつつある私の思考を止めたのは少年の声だった。

『エコー』

「うん、きみ山彦だし、呼びやすいし。どうかな」

『エコー』

「うん」

『エコー』

「そうそう」

『エコー』

「……気に入ったの？」

山彦少年、いやエコーは何度も何度もその名を繰り返す。

まるで自分に馴染ませようとするかのように。

あんまり何度も言うので、足袋を履くためにしゃがんでいた私は
笑って彼の顔を仰ぎ見た。

見てから、ぎよっとする。

「ななな、なんで泣いてるの！？ ご、ごめん、そんなに嫌だった
！？」

灰色の瞳から透明な滴が一筋、頬を伝っていた。

エコーは無表情のままゆるりと首を振り、私の隣に腰を下ろした。
あ、私が座ってるの分かったんだね。

涙を流しながらエコーは、棒読みではない声で言った。

『ありがとう』

ああ。

さっきの私の言葉だ。

でもこれは、エコーの言葉だ。

私は笑顔で返事をした。

「どういたしまして」

胸が震えるほど、うれしかった。

温かな気持ちに包まれながら岩に並んで座る。

エコーは幼い姿をしているけれど、その希薄な気配と静かさが相俟^{いま}ってどこか老成した雰囲気があった。それでも、私は彼の頭をそつと撫でた。別にその行為には何の意味も無い。ただ、撫でたかったからそうしただけだ。エコーは目を閉じ、私に撫でられるがままにしていた。

それからしばらくして目を開き、私の方を見て言った。

『そういえば、きみに、名前はあるの』

おお。

一度聞いた言葉は時間が経っても繰り返せるんだな。棒読みだけど。

いやしかし記憶力いいなエコー。すごいぞエコー。天才だよこの子は！

私は親馬鹿的な思考を展開させつつ、満面の笑みをにこにここと浮かべてみせた。

まあエコーには見えないだろうけどね。オーイエー、スマイル0円。

「もちろん！」

もしかして呼んでくれるのだろうか。

私^がきみの名を呼ぶように。

ふっふっふ、よくぞ聞いてくれました。

そう、

「私の名前は――」

雷に打たれたような衝撃が、走った。

「私の、名前、は……」

掠れた声^{くわ}が空を搔く。

今の今まで確かに覚えていたはずだ。
それはそうだ。

自分の名前を探そうとするなんて普通はしない。
そう、あまりにも当たり前のことだからわざわざ口に出そうとは
しなかったただけ。

――違う。

違う違う違う！

本当に、私は、「覚えて」いたのか……？

戦慄^{わなな}く唇を意味も無く開閉する。
エコーがどうしたのと問うように灰色の瞳を瞬かせている。

みつからない、みつからないんだ。
ああ。

「探そうとするから見つからない」。

探してしまった。

だから気づいてしまった。

名前が、名前さえも、私から消えてしまっていたことに。

第4話 透明少女に答える声 4

記憶の片隅にある道筋に従って森を歩くと、予想通り川が流れる場所へとたどり着いた。

川辺に膝をつき、流れの中にコドロ草を突っ込んで葉に付いた汚れをすぐ。

水はほどよい冷たさでクラトの手を心地良く刺激した。

……いや、水だけではない。

踏みしめる土やその上に生える草の柔らかさ、木の幹を覆う苔の湿った感触、森の空気のはつとするような清々しい匂い、吹きよせる風、思い通りに動く手足の筋肉、そして何より目に映る全ての景色。

その一つ一つがクラトの鈍ったあらゆる感覚を刺激していた。今なら分かる。

五感の全てが厚い膜に覆われていたのだ。

それは神薬花の蜜薬を飲んだあの日から、一枚また一枚と剥がれ落ちていった。

広がるのは眩暈めまいがするほど鮮烈な世界。体中に喜びが漲みなぎる。

少し前のクラトには、想像すらできなかった。

健康であるということはこんなにも生の躍動に満ちているということだった。

羽化する虫のように、新しいものへと生まれ変わってゆく。

日に日に底知れぬ何かが目覚めていくような、そんな気すらした。

「ん」

「ありがとうございます」

コド口草を軽く振って水気をきった後、ニーナに差し出す。

そんな些細なことに対しても丁寧な礼を言う少女をクラトは改めて眺めた。

座る仕草や食べ方も、彼女の何気ない所作はどれも洗練されていると思う。里の者の粗野なそれとは明らかに違う、滲み出るような品の良さがそこにはあった。ひよっとすると目の前にいるこの少女は身分のある人間なのかもしれない。ふとした折にそんな突拍子もないことを思った。

神薬花を求めて遥々一人旅をしてきたという。

東大陸の言語を操り、自分よりも一つだけ年上で、異国の薬取り。

彼女の素性について知っていることはただそれだけだ。

だが、感情表現が素直ですぐに慌てることや、困っている人間を放っておけない正義感の強さ、傷ついた者をそつと癒すような優しさを持っていることをクラトは知っている。

その澄んだ緑の双眸がどんなに深く美しい色をしているかということも。

そのニーナの瞳には、先ほどから何やら複雑な色が浮かんでいる。小作りの顔に浮かぶ表情はくるくるとよく動いて、忙しない。恐らく彼女は今、考え事でもしている最中なのだろう。手に持った薬草を検分しているその目は、どこか違う所へと意識を向けているようだった。

一体何を考え、何について思いを巡らせているのだろうか。

口をつぐんだままの分かりやすい少女からは、しかしその頭の中まで窺い知ることは出来ない。

なぜか腹の辺りが落ち着かず、クラトはもやもやとした気分を持て余す。

そんな自分を疑問に思ったところで、ああと得心した。

（俺はこいつの考えていることが気になるのか）

——つい最近までは明日のことすら興味がなかったのに。

終わりの見えぬ暗鬱な日々、削られていくのは心だったのか体だったのか。

怒り、嘆き、暴言を吐いた。

咳き込みながら叫び、悲しみ、声をあげて泣き、あらゆる感情をぶつけて生にしがみついていた。そうして絶え間ない苦しみと共にクラトは成長していった。

季節を重ねていくうちに、欠陥だらけの身体は少しずつだがまともな方向へと向かい始めた。

このまま良くなるだろうと喜ぶ祖母の顔。恐る恐る抱く希望と、密かに思い描く未来。

そして、暗闇に捕まった。

暗転していく全て。

鋭敏になった耳には、悪意のある声が皮肉にもよく届いた。流れていく涙とは裏腹に、心は涸れ果て次第に干乾びていく。

苦痛の中、無感動な目で暗闇を眺め、ただ死の訪れを待ち望んだ。空っぽの自分。その癖、重荷にしかねない。

そんな生に一体何の意味があるだろうか。

世界はただひたすらに、暗かった。

明日のことすら、もはや興味はなかった。
クラトにとって、人も世界も明日には消えてしまうものでしか
なかった。

（それが、今はどうだ）

他人の表情たった一つにこれほど感情の波を揺らす自分がいる。
驚嘆に値する変化。

そして新鮮な感覚だった。
だがそれは決して不快なものではなかった。
それどころか、むしろ――。

「なあ、何考えてんの？」

膝をついたまま、少女の方を仰ぎ見る。

先ほどクラトの偽らざる感謝の気持ちを打ち明けた時から、二
ナの様子が何やらおかしい。彼女の挙動がおかしいのは割といつも
の事ではあるが、何か深刻な考え事をさせてしまうようなことを言
っただろうか。

「……は、えっと、何と聞かれましても、別に何も」

少女は慌てた様子で不自然に目を逸らす。

下手に隠そうとすることよりも、自分を見ようとしないうことにな
ぜか腹が立った。

「何もねえことねえだろ。さっきからぼけっとして、お前今度は川の中にすっ転ぶぞ」

「こ、転びません!」

「いや転ぶ」

「転びませんってば!」

「じゃあ俺が転ばす」

「なんでそうなるんですか!?!」

打てば響くような返事が面白い。

耐えきれずにくつくと笑えば、ニーナは顔を真っ赤にしてぷいとそっぽを向いた。まるで子供のように。こういう行動を人はなんと言ったか。世間から離れて過ごしていた少年はとっさに言葉が見つからず首を捻った。

愉快……いや違う、微笑ましい……ではない。

ああそうか。

「『可愛い』」

そうだ、これは可愛いという言葉がしっくりとくるのだ。一人なると納得して少女を見ると、大きな目をさらに見開き首筋まで真っ赤に染めてぼかんとしていた。

「あ? どうしたんだ、無茶苦茶赤いぞお前」

「だ、ただただ誰のせいですかっ!」

「は? 俺?」

「知りません!」

ますます怒るニーナの思考がよく分からず、クラトは変な奴だなと思った。口に出せばまた怒りだすかもしれないので思うだけにとどめる。

その時、川上の方でふと何かの気配がした。

一度闇を彷徨ったクラトはその名残なのか、視力を取り戻した今でも周囲の気配を敏感に察知することができた。感覚を研ぎ澄ませば、例え隠れていようと也容易にその数を把握できる。実際、病床のクラトは暇つぶしに近くににいる鳥の鳴き声や羽ばたく音を聞いて、それが何羽いるのかをよく数えていた。

はつと顔を上げたクラトを目にして、ニーナも表情を改めると素早く彼の視線の先を追った。

数ロンほど離れた場所に、拳に似た形の大きな岩が見える。その上に、誰かが座っていた。

「……子供？ 里の子でしょうか」

「いや、違う」

クラトは紺色の瞳をずっと細めて立ち上がった。

袖や裾の短い浅葱色の童衣を着た少年。

「アレは——物の怪だ」

一言で断じると、ニーナがさつと顔色を変える。

「まさか。……妖魔にしては魔力が濁っていません」

「魔力がどうかは知らねえけど、アレは間違いなく物の怪だ。まあ特に害は無いやつだから安心しろ」

「なんだかクラトさん、あの子を知っている様な口ぶりですね」

「ああ。一回だけ会ったことがあるからな」

「ええ！？」

昔、一度だけ朔月山に登った時にまさにここであの少年を見たことがある。

あの時クラトは彼とほぼ同じ背格好だったのに、今見るとあんな

に小さく幼かったのかと少し驚く。物の怪にとって時の流れなど無きに等しいのだろう。

「あいつは人の真似をするだけの山彦だよ」

「それは確かに害は無さそうですが……。それにしてもあんなところに座って、一体何をしているのでしょうか」

先日朔月山で起こったという物の怪騒動。

実はその話を耳にした時、山彦の仕業ではないかとクラトは考えていた。

物の怪が滅多に出ないこの山で、自分が見た音の妖^{あやかし}。彼が人の声を真似していたのではないかと。

だが、よく考えればそれもおかしな話だ。

「突然誰もいない場所から声をかけられる」という怪異、それはつまり最初にこちらから声をかけねば声を返せない山彦には不可能であるはずだ。

では、一体誰の仕業か。

「そういえばニーナはなんで山神様を精霊か何かだと思ったんだ？」

「え！？ と、突然何ですか？」

「いいから」

「えーっと……ここ最近の里の方々の話を聞いても分かるように、サクヅキ山のヤマガミサマは意思を持っていらつしやいますよね？ 人間に声をかけたり、物を贈ったり。あたしはヒノワ帝国の神々を魔力の塊のような存在だと解釈していたので、そんな風に積極的に関与してくるのはやはり実体を持つ何かだとは思えなくて。精霊や妖精の類かもしれないし、それこそ奇特な妖魔かもしれない、そう思っただけです」

「魔力の塊？ ああ、お前んとこの国じゃ神様は一人しかいないん

だっけ？」

ニーナは細い頤おこがに手を当てて不満げに唇をとがらせた。

「『しか』と言う表現は変な感じがしますね。あたしからすればこの国の方が多過ぎです。そんなに多くの神がいて、争いは起こらないのでしょうか」

「さあ？ 少なくとも喧嘩すんのは神様同士じゃなくて、それを信じている人間の方だろ。大体、わざわざ人の世に出てくる物好きな神様なんてのも普通はいないしな」

そう言うと、ニーナは目を丸くしてなぜか嬉しげに笑った。
見ていてつくづく飽きないな、とクラトは思った。

「ほらやつぱり！ じゃあヤマガミサマが『本物』という可能性は低いということですか？」

「そうだな。つつても、神様達がいらないわけじゃないらしいが。確か、うちのばあはあ**の**ばあ**の**そのまたばあが神様の姿を見る人だ**つ**た**つ**て聞いたことがあるな。ああ、それとこの国の皇帝は現人神あらひとがみつつつて一種の神様みたいな存在だしな」

「ちょ、ちょっと待ってください。今、猛烈なカルチャーショックが……」

「かる茶？」

「違います！」

二人が話している間も、山彦は身じろぎもせず岩の上に座っている。
いる。

妙だなと思った。

「それじゃ、クラトさんはヤマガミサマの正体は何だと思います？」
ニーナが思い出したかのように手に持ったコード草を腰の四角い巾着の中にしまった後、そう尋ねた。

「俺？ 俺は山神様が精霊だろうが物の怪だろうが関係ねえって言うただろ」

山彦は動かない。

「ただ、山神様は……いや、本物がどうかは分かんねえから『朔月様』って呼ぶか。朔月様がここに来たのは最近じゃねえかな。ニーナが来るちよつと前に物の怪騒ぎがあつてな、俺はあの騒動と今の山神様騒ぎは繋がっていると思う。ちよつと考えりゃ、繋がっているとは思えないんだよ。まあ、なんでばあに神薬花をくれたのかとか、里の奴らの悩み相談みたいなことをしてるのかとか、その辺りは全然分かんねえけど」

風が吹いて髪が揺れ、木々がざわめいた。

水面に漣が立つ。

山彦はじつと座ったまま、そこから動かない。

動いていない。

クラトは瞑目し、周囲に意識を集中させた。

「なんだっていいんだよ、朔月様の正体なんて。俺は、ただこうして当たり前に生きていることが……生きているって実感できることが嬉しいんだ。ニーナの目が何色か分かることが嬉しいんだ。もう、ばあに死にたいなんて言わなくてもいいことが嬉しいんだ。明日

が来ることが、嬉しいんだ。だから――」

目を開けてゆっくりと振り返った。

「だから俺は感謝したい。もし朔月様が返事を待っているのなら、俺は答えたい」

クラトは何もない空間に向かい確信を込めて言った。

「ありがとう、って」

姿の見えぬ気配が、確かに揺れるのを感じた。

第4話 透明少女に答える声 5

沈黙が降りる。

気配は身じろぎひとつせず、目の前にいる。

それが意味するものは。

逡巡か、当惑か。

……それともこちらを観察しているのだろうか。

やがてじゃり、と地面の土が擦こすれる音がした。

次の瞬間、頭上の木の枝がしなり、風も無いのにがさがさと葉擦れが鳴り響いた。

木漏れ日だけが音もなく揺らめく。

はらりはらりと身投げするように、数枚の葉が落下していく。

一枚。

二枚。

三枚。

最後の葉がクラトの足元までかさりと落ちた時——既に、気配は消え去っていた。

は、と息を吐き、知らず握り締めていた拳から力を抜いた。

手のひらが少し汗ばんでいる。

「今のは、一体……」

ぽつりと、細い声が響いた。

振り返るとニーナが呆然とした様子で立ち尽くしている。

その白い顔には、明らかな困惑と一刷毛ひとけの怯えが混じっていた。

どうやらたった今音を立てて消え去るまで、あの気配に気が付いていなかったらしい。

なぜ、と呟く声は僅かに震えている。

それは言外に「信じられない」とクラトに物語っていた。

有り得ないものを見たと……いや、「見ていない」と。

（——ああ、慧眼者だからか）

魔力が視認できる者の目を「慧眼けいがん」と呼ぶ。

先ほどニーナは、山彦の魔力に『濁りが無い』と口にした。

その時点で、彼女が稀なる眼の持ち主であることは明らかであった。

この世の生きとし生けるものならば皆、生得的に備えているもの——それが内存魔力や内流魔力と呼ばれる不可視の力である。

量や質に大小の差異はあれ、人や物の怪、獣にさえも必ず存在する。

それは厳然たる世の摂理であるにも関わらず、意外にも世間では知らぬ者の方が多い事実であった。

——ほとんどの人間は、魔力の流れを見ることが出来ないのだ。

増してや魔力を操ることなど、余程の才が無い限り常人には不可能であつた。

言うなれば、全身を巡る血流の様なものだ。

外からどんなに目を凝らしたとしても身の内にある血潮の量や色を知ることが叶わないように、魔力もまた決して表側へと晒されることはない。

大多数に見えぬという事実、それはすなわち見かけ上は「無い」も同然であつた。

人とは概して、己が目に見える物こそが真実だと思いたがる。故に魔力の存在は黙された理、^{「こゝろ」}「黙理」^{もくり}とも呼ばれていた。

物の怪の魔力は禍々しく、特徴として淀みや濁りがあるという。逆に精霊や妖精のそれは非常に繊細で幻想的な美しさを持つと聞く。

そしてそのどちらの特徴も持たず、しかし時折どちらの特徴も現れるという矛盾した魔力を持つ存在が「人」であるらしい。

慧眼を以てしても魔力が確認できない生き物など、この世にはいない。^{おんきやう}

隠形した物の怪でさえ、その身が宿す魔力を慧眼者の目から隠すことは出来ない。

唯一持たぬ者がいるとすれば、それは死の腕に抱かれ冥府へと下つた者だけだつた。^{かいな}

虚の肉体に再び魂が還ることなど無いように、死体に宿る魔力も

また存在しないのだ。

生命の強さや弱さ。

生と死の境界線。

人が肉塊へと変じる瞬間。

慧眼者は常人よりも遙かに容易に、そして明確にそれらを判別する。

彼らに医学の徒が多い謂れであった。

……いつだったか、病床で教わった黙理についてクラトは思い出していた。

（里長が話すからうさんくせえと思ってたけど、なんだ本当だったのか）

一つ息を吐く。

ふわふわの緑髪に手を伸ばし、遠慮無しにわしゃわしゃとかき混ぜてやった。

安心しろ、という気持ちを指先に込めて。

その頭が自分とほとんど変わらない位置にあるのがなんとなく面白くなかったが。

「わわわ、クラトさん！？ やめてください！ あああ髪がぐしゃぐしゃに……」

「何びびってんだよ」

頭上の攻防を繰り広げつつそう言つと、ニーナはきつと緑の瞳でクラトを見据え一氣に捲くし立てた。

「だって今、何も見えませんでした！ 魔力が見えないなんて！ そんなこと有り得ないのに……」もう、クラトさん！ 髪の毛引つ掻き回すのやめてくださいっ」

「ふわふわだなー、お前の髪。おもしれえ」

「怒りますよ!？」

「もう怒ってるじゃねえか」

ぺしつと腕を叩かれ、クラトは軽く舌打ちして手を引つ込めた。

頬を膨らませながらもつれた髪の毛を整える少女からは、先ほどの怯えた気配は完全に消えている。

叩かれた手を無意識に握ったり開いたりしながら、クラトはニーナを見つめた。

もうちよつとだけ、その柔らかい髪に触れていたかったような気がする。

「ニーナの目は慧眼だったんだな」

「そうなんです、たった今初めて自分の目を疑いました……」

優秀なる薬取りの少女はうつそりと呟く。

元より魔力の欠片すら見えないクラトにとって、ニーナの驚きは全く想像もつかない部類のものだ。

ただ、少女の目の美しさはそういう神秘的な能力を飲み込んだが故にあるのだと、柄にも無くそう思った。

そういえばと川の方を見やると、岩の上に座っていたはずの山彦

もいつの間にか姿を消していた。

恐らく彼もどこかへ行ってしまったのだろう。

単に隠形しただけなら、微弱ながらもまだそこに気配を感じるはずだ。

「さつき木が揺れたのは、もしかして、その『朔月様』、だったのですか？」

睨むように岩を眺めていたクラトに、恐る恐るといった雰囲気で二ーナが尋ねてきた。

「いや知らん」

「し、しらんって……それに、魔力が全く無い存在にどうやって気が付いたんですか」

「勘」

「か、勘なんですか。あのまさか、あたしより先に妖魔に気が付いたのも……」

「勘」

「分かりました。もういいです」

なぜか疲労したようによろよろと歩き出す二ーナ。

なんなんだ、とクラトは首を傾げた。

少女の後を追う前に、一度だけ気配が消えたほうへ視線を向ける。

切れ長の瞳を伏せ、目礼した。

それから急ぎ足で少女のもとへと歩いていった。

自分が慧眼者すら超える、人間離れした所業を易々とやってのけたのだとは、ついぞ気が付かずに。

がやがやと。

人だかりができていた。

農作業を放って来ましたと言わんばかりに、土が付いたままの鍬を担いだ男たちや、家畜を追う棒を持って飛び跳ねる子供たち。

円陣を作るように密集し、誰かをぐるりと取り囲んでいるようだった。

時折、その人垣からどつと笑い声が上がる。

朔月山の中腹から川に沿ってクラトとニーナが帰ってくると、そんな光景が里の入り口に広がっていた。

中心にいる人物は浮き足立った人々の影に遮られて、ここからはよく見えない。

里の家々の戸が次々と開き、中にいた女達もいそいそと足早にやって来る。

犬までもが興奮したようにわんわんと吠え、激しく尻尾を振って喜び勇んだように駆け回っている。

そのさなか、里に滞在している数人の旅人だけがお祭り騒ぎに取り残されたように、窓から怪訝そうな顔を突き出していた。

きょとんとしてその大騒ぎを眺めた異国の少女が、里に住む少年を振り返る。

「どなたか有名な方でも来られたのでしょうか？」

里が近づくにつれていつもの冷たさが漂う表情に戻っていたクラトは、人だかりを見た途端、げんなりとした顔つきになった。

「あーまあ、そんなもん」

心底、投げやりに答える。

その謎の反応に小首を傾げたニーナが再び口を開こうとした時。

「おおおおおおお！？」

張りのある男の声が突如、耳をつんざいた。

「そこにいるのはクラトじゃねえかひゃっひゃっひゃっひゃ！こいつぁーたまげた本当に山に登ってやがったのかぁ！？おいおいおいおいどうなってんだよ俺様がいない間に！べっぴんさんな彼女まで作りやがってひゃっひゃっひゃ！笑いが止まんねえなこりゃおい誰か止めてくれ腹が痛えぞ畜生ひゃっひゃっひゃ！」

ニーナの目が点になる。

クラトは思い切り眉間に皺を寄せ、魂まで抜け出るような深い溜息を吐いた。

「こりゃ長、言葉が乱れとるぞ。全く子供らが真似するとあれほど言っておろつに」

「里長あ、いい酒手に入つたんでよ、久々に一杯どうだい」

「おささま、遊んで遊んで！」

「ちよいと里長、あんた取りあえず落ち着きなさい。ニーナさんがびっくりしてるでしょう」

慣れた態度で里の面々が頻り喚き立てる男にやいのやいのと話しかけている。

クラトは首の後ろをだるそうに掻き、いまだに状況が飲み込めていない少女に向き直った。

「いいか、あれはただの馬鹿だ」

「ば……」

「三十二歳、独身。あと一応」

ここの里長だ、と心外そうに目を細めて言った。

「おいおいおい独身関係ねえだが！　一応ってなんだよ一応って！」

ひでえなあと文句を垂れながら機嫌良く笑い声を上げるという行為を器用にこなしつつ、人だかりを掻き分けて目の前にやって来る一人の男。

クラトは約半月ぶりに見る大男を見上げた。

厚手の白い手ぬぐいを巻いた頭からばさばさの茶色い髪が勝手放題に伸びている。

「ごわごわとしたそれは、まるで獣の鬣たてがみのようだと思っ

た。いや、どこもかしこも分厚い筋肉をくっつけたこの大男はその豪放な性格といい、まさに野獣そのものだと言つてよかった。

病弱だったクラトには、いつだってその姿が太陽よりも眩しく見えた。

——自然と舌打ちが出るほどに。

「ちつ……相変わらず無駄にでけえな、里長」

「ひやつひやつひゃ、おかげさんでな。いやあすつかり元気になっちまってこの野郎！ 力いっぱい嬉しいぞ俺様は！！ ちゅーしてやろうか！？」

「帰れ」

「ひやつひやつひやつひゃ！ だから帰って来たんじゃないか愛する俺様の里に！」

「ここはためーの私物じゃねえよ」

「俺様は里長！ よつてここは俺様の物だ！」

「頭の足りねえガキ大将かためーは」

「ク、クラトさんっ」

普段の数倍は容赦ない物言いに、ニーナが慌てて袖を引っ張る。

群青色の目をぐるりと動かし、少女を上から下まで眺めた大男は、ひゅーうと口笛を吹いた。

「目玉が溶ろけちまいそうな美人だぜ！ 耳がとんがってたら西大陸のエルフそつくりだな、あんた。いや俺様もちらつとしか見たことねえがありやこの世のもんじゃないやねえよ全く！ おっとそっういや名

乗ってなかったな俺様の名前は――」

「馬鹿だ」

「そう、いやちげえ！！　ロウザだロウザ！！」

「ローザさん……お、お可愛い名前ですね」

「ひゃっひゃっひゃ！　やっぱりそうくるんだなあ！　『狼が居る』
って意味なんだが、西の人間にやどうも女の名前に聞こえるらしい
！」

「す、すみません」

「いやいや、お嬢ちゃんの反応が一番気に入った！　何せ爆笑されるか、引きつった笑顔を浮かべられるか、聞き返されるか、どれか
だったからなあ！　ひゃっひゃっひゃ！」

「そうなのですか……」

声がでかい。

クラトはこれ見よがしに耳を押さえ顔を顰めてみせたが、ロウザ
がそれを気にかける様子は全く無くひゃっひゃと彼独特の笑い方で
ひたすら笑い続ける。

そして。

「よし、お嬢ちゃん！　俺様が特別にちゅーしてやろう！」

「『ちゅー』？　なんですかそれ。すみませんが教えていただけま
すか」

何やらとんでもないことを言い出した。

流暢に東大陸の言語を操る少女にも理解できない単語はあつたら
しく、勤勉にも聞き返している。

無骨ながら野生的な雄々しさに溢れた男は、少女の言葉を聞くと
一度「おや」と言うように瞬きをし、次の瞬間にはニヤリと悪い笑

みを浮かべた。

突然、彼の周りに意味不明な色香が漂う。

慣れた手付きで少女の顎をそつと上向かせ、ゆっくりと巨軀をかめた。

「いいぜ……？ 教えてやるよ」

入り口の方で里の者たちがいーぞいーぞと一斉に囃し立てた。

母親が子供の目をさつと手で覆い、やめろおおと若衆たちが泣き叫び、犬がわんわん吠える。

わけが分からないといった表情のニーナが、説明を求めるようにちらとクラトに視線を送った瞬間。

「触んな」

掻つ攫つように少女を取り上げた。

そのまま片手でひょいと担ぎ、冷え冷えとした紺色の目でロウザを射抜く。

にやにやと笑う大男はクラトの視線など意にも介さず、再びひゅうと口笛を吹いた。

「クラト、お前力持ちになったなあ。それともお嬢ちゃんが雛鳥の産毛みてえに軽いのか？ ひゃっひゃっひゃ！ まあそう怒んなって！」

「クラトさん！？ 下ろしてくださいっ！ 病み上がりですよ！」

「断る。お前、軽いし」

「そんなわけないじゃないですか！ 身長変わらないのにつ」

叫んだ後、はっと何かに思い当たったようにニーナがクラトを見下ろす。

「まさか、神薬花が」

ささやくように呟いた少女の言葉に、ロウザが片眉を上げた。

クラトはニーナを担いだまま、全く危ない足取りですたすたと歩き出す。キリナの家は外れの方にあるため、里の入り口を通らなくても問題はない。

理由は良く分からないが、クラトは一刻も早くこの場からニーナを連れ出したかった。

ふと小さな声が耳に響いた。

「クラトにい……？」

声がした方を振り向くと、人垣に押し潰されそうになりながら、一人の少年がこちらへ向かってこようとしていた。

その小さな手にはさらに小さな手が固く握り締められている。

半ば引き摺られるようにして、とてとてと幼い少女も彼の後から必死について来ているのだ。

幼い兄妹の姿を目にしたクラトは、冷え切っていた表情をいくらか和らげた。

「ライヒ、カンナっ」

その名を呼んでから、ふと担ぎ上げた少女の身体が震えたことに気が付く。

（——っ！　そうだった！）

クラトはざつと顔を青褪めさせた。

この異国から来た少女は——魔力を見通す『慧眼者』なのだった。

ならば里の人々とは違って、隠せるはずがない。

ニーナは恐らくはつきりと見えているはずだ。

「クラトにい、目が。目が見えるんだね」

「クラト兄ちゃん、ただいま。……ね、おにい。カンナが言ったとおりでしょ」

稀なる瞳は気が付いたはずだ。

無邪気に話しかけてくる幼い二人。

彼らが立ち昇らせる。

その、禍々しき魔力に。

第4話 透明少女に答える声 6

お山のとっぺんにいるのは誰だ
ふもとの里までおりてこい
目隠しするからおりてこい

となりのとなりで笑うの誰だ
おまえの名前を言ってみろ
耳をふさぐから言ってみろ

欠けの懸路かけじをのりこえて
満ちの抜道ぬけみちいざゆかん

あ。

エコー置いてきた。

そう気が付いたのは、さながら突発型ハリケーンの如くオンボロ

神社の中へと転がりこみ、体重をかけるとギイギイ不吉な音を立てる床の上に這いつくばって、若干目を血走らせながらせえはあと貪るように酸素を求めていたまさにその時だった。

吸ってー吐いてー、吸ってー吐いてー。

……よし。

息を整えて、むくりと身を起こす。

オンボロ神社の中から顔を突き出してきよるきよると辺りを見回すが、案の定あの小さな姿はどこにも見当たらなかった。

ああ、束の間だったけど心を通わせたのに。

彼をあの岩の上に置いてきてしまった。またねも言わずに別れてしまった。あとついでに朔月山を最速タイムで登頂してしまった。

……と言つても中腹からだっただけ。

いや、本気を出した今の私ならたとえカール・ルイスやマイケル・ジョンソンやウサイン・ボルトと波打ち際で「うふふ捕まえてごらん追いかけて」をしたとしても、恐らくぶつちぎりで逃げられるはずだ。

想像してほしい。

さんさんと輝く太陽と海を。

そして砂浜の上をマッハの速さで逃げる巫女、完璧なフォームでそれを追う陸上競技選手、舞い散る波飛沫、きらめく砂粒を。

もはや絵的に力オス。

いや待て、追いかけてこ以前に透明人間という時点であらゆる競技において私って反則……？

でもほら、膝をつかないのよボルト！　そうよ、諦めるのはまだ早いわ。

さあ風になって私を捕まえてごらんなさい！
できるものならだけどね！

うふふふ！ あははは！

—— 嗚呼、もう、何を言っているんだろう私は……。

私は再び床の上にはったり倒れると、仰向けになった。
呼吸はすっかり正常に戻っている。

ゆるゆると腕を上げて、手の甲で目元を覆う。

しばらくの間そうやって視界を暗くして精神的錯乱状態を落ち着けていると、白衣の袂がずりりと下がってきた。
緩慢に目を動かして剥き出しになった腕を見ると、皮膚にうつすらと血が滲んでいる。

ああ、走っている最中に枝か何かに引っ掛けて傷つけたのだろう。
特に痛みは無い。

でも血が垂れてくるのは嫌だな。

ここ、ティッシュも消毒液も無いし。

完全に機能停止した頭でつらつらとそう思い、無意識にその腕を口元に持っていく。

—— …… 不味い。

いやこれで美味いと思ったらお前アウトだろうという脳内ツッコミは忘れない。

鉄の味は、舐めても舐めてもじわじわと後から滲んでくる。
まるで後悔のようだ。

後悔。

なぜ私はあの場から、逃げてしまったんだろう。

面と向かってありがとうと言われて、頭が真っ白になって、それで……気が付いたら走っていた。

そりゃもう無我夢中で。

冷静になって思い返せば思い返すほど、自分の行動が謎過ぎる。

ニーナちゃん、久々に見ただけで相変わらずの美少女っぷりだった。あれは眼福ものだ。

そしてニーナちゃんとべたべた……もとい、仲良さげにしていた淡い色の茶髪の少年。

ちよつと青白かったけど普通に健康そうな感じだった。

神薬花は確かに効いたようだ。

クラトさん、と鈴が鳴るような声でそう呼ばれていた。

紺色のつり目がキリナさんにそっくりの、女の子みたいに綺麗な顔をした少年だった。

ちよつと近寄りがたいような、刃物のような綺麗さだ。

そして……彼は私の存在に気が付いていた。

私が何者であつてもいいと言ってくれた。真摯にお礼を言ってくれた。

あのストレートな「ありがとう」は本当に不意打ちだったんだ。すっと心に響いて、胸が一杯になった。

ああ、なのに私は、私は……！

ふつふつと湧きあがってくるこの思いをシャウトするならば、

「何さらしとんのじゃおどれはアホかああああ！！ ほわちゃああああー！！」

である。

ドストドスと自分の腹にひたすら正拳突きを食らわせてやりた

い。

せっかくこのわけの分からん私が人と話すチャンスだったのに、それをふいにしてしまったのだ。

他ならぬ私が、しかも全力で。

ここ一番の時にダッシュでヘタレたのだ。

思わぬところでヘタレ属性だったのだ私は。

ヘタレは兄で十分だよ！

——それに物凄く衝撃だったのだ。

「さくづき……か」

二、三度口の中でその名前を転がしてみる。

「朔月、朔月、朔月……」

繰り返し呟くと、目に見えない何かがふっと心に落ちてきた気がした。

身体のどこか深い部分へぼたりと落ちて沁み渡る何か。

なんとなく、エコーの涙の意味が分かったような気がした。

「朔月、さくづき……」

言いながらごろりと寝返りをうつた。

外は明るいが、昼はとうに過ぎている。たぶん夕方の一步手前くらいの間だろう。

参拝客がそろそろ途切れる時間帯だからか、山頂に人影はなかつ

た。

少し歪んだ窓枠に切り取られた空は青く、筆ですうつと引いたような雲が遠くに浮かんでいる。

本当に季節が分らないな、とぼんやり思う。

春のような、秋のような。

穏やかで。

——とても静かだ。

私は袂からオカリナもどきをこそごと取り出した。
見つけてほしいと頼まれた探し物だ。

必要とされるのが嬉しくて、自分の存在理由が欲しくて。
探して、考えて、話しかけて、自分ができることをやって。
そうして人々は私を呼ぶのだ。

山神様、と。

何度も何度もそう呼ばれて、いつしか自分がそんな存在のような気がして。

そうありたいと、密かに願った。

——でも本当は、本当の私は。

「そんな大層なもんじゃないんだけどな……」

仰向けになったままオカリナを口に当て、そつと吹いてみる。
ぴい、と弱い音が出た。

飛行機の爆音も、工事の騒音も、自動車が鳴らすクラクションも、携帯電話の着信音も、信号機の平坦なメロディも、救急車のサイレンも、学校のチャイムも、雑踏も何もかも。全て、ここには無いのだと思い知る。

目を閉じた。

弱弱い癖に、やけにはっきりと響いた一音。それは、とても、私をさびしい気分にした。

ギィ、と床が軋む音。

はっと目を覚ますと、辺りはすっかり真っ暗になっていた。どうやらあのまま眠りこけていたらしい。

顔が濡れていたので袖でこしこし拭う。きっと涎だろう。

なんかちよっと、センチメンタリティでホームシックな何かに飲

み込まれていたような気がする。

ふー、これだから気を抜くと危ない危ない。私はそんな悲劇のヒロインって柄じゃないだろう。誰だよ全く……。

『起。ようやく目覚めたか』

ハイ覚めました。

たった今、髪の毛一本残らず目が覚めました。

——真つ暗闇の神社の中。

「何か」が、居た。

ギイ、ギイと床が不気味な悲鳴を上げ、その「何か」が私の側まで近寄ってきたことを示す。

恐怖で身動きひとつ出来ない。

『訝。隠形が解けぬ……。ぬしは、何者だ』

頭上で響く、低い唸り声。

ようやく暗さに慣れてきた両目で恐る恐る上を見上げると、巨大な黒い影が視界を埋め尽くしていた。

私はあやうく力の限り叫びそうになり、慌ててばしっと口を塞ぐ。ハリウッドは言っている。ここできゃーきゃー騒いで相手を刺激

するのは確実に死亡パターンだと。

ゆらり、ゆらりと音もなく宙に揺れる何か大きな、尻尾のようなもの。

これは、一体全体、なんなのだろうか。

何が起きているんだろう。

思考回路がショートしそうだ。

『問。口がきけぬのか』

さらに唸りのっそりと近づいて来る、その有り得ないほど巨大な――。

「……狐？」

『応。やつと答えたかと思えば――ぬし、我が其処らの赤狐せきこに見えるとしても言うのか』

いや、そんな呆れたように言われても、赤狐とかほんと知りません。

赤いきつねと緑のたぬきなら知ってますけど。

ほんと美味しいですよねあれ。私はきつね派ですよ。

『まあ、元は赤鬼狐せきこではあるかな』

いや、ますます意味が分かりませんほんとすみません。

『疑。先刻からぬしの魔力が感じられぬ。真に生者か。何故此処に居る』

前足に力を込めたのか、すぐ近くの床がギィと一際大きく鳴った。はつきり言って怖い。

尋問されているみたいだけど、正直言っていることの半分も分らない。魔力って何。ファンタジーによく出てくるあれか。現代日本人の私にそんなけつたいな物、ある訳ないだろう。

というかさつきから変な圧力を感じる。全身に鳥肌が立っている。息苦しい。

それでも私は必死で頭を働かせた。

この巨大な狐っぽい生き物が一体何なのかを考える。

閃きはすぐに来た。

というかそれしか来なかった。

ごくりと唾を嚥下して、私は口を開いた。

「あの、私は……えっと、朔月という者ですが。もしかしてあなたは――」

『ぬし、今なんと言った！ 朔月、朔月だと！？』

「もぎゃああああ！ 近い近い近いです！ それ以上こっち来ると踏み潰されます私！」

急に声を荒げ、容赦なしにぐわあつと身を乗り出してきた巨大な狐っぽい生き物に、私は冗談じゃなく生命の危機を感じた。諸手を上げて叫びながら、俊敏な動きでざざざつと壁際まで下がる。

何、何なのその過剰反応。

苦情およびクレームならクラトくんをお願いします！

巨大狐がはたと我に返ったように、もさりと尾を揺らす。

……アレが四本に見えるのは私の気のせいかな。

『謝。すまん、我には見えぬが、ぬしは小さいのだな』

「いえ、あなたが大き過ぎるんです」

小さいって言うな、気にしてんのに。でも怖いから言えない。

『朔月。……そうか、我としたことが取り乱した。それは仮名^{かりな}だな？』

「あ、はい。今日から名乗ることしました」
『そうか』

ちよつと待てお前今日からかい！ とか、深く突っ込まない辺りに私はこの巨大狐に対して大物感を覚えた。

巨大狐はしなやかな首をもたげて、私がいると思わしき方向を眺めているようだ。

暗い中、爛々と光る二つの瞳が興味深そうにきゅうつと細まる。そういえばいつの間にか息苦しい感じが消えている。

警戒を解かれたのだろうか。もう何が何だか分からない。

『して、我はもしかして、の続きは何だ？』

「あ、えーっと。もしかして」

イフ、もしや、まさか、ひょっとして。

そんな思いで聞いてみる。

「あなたはこの山で一番偉かったりするんですか」

巨大狐は三日月のように細めた瞳を輝かせながら笑った。

『肯。如何にも我は、朔月山の主だ』

ホンモノが来ました。

第4話 透明少女に答える声 7 1

影が笑っている。

闇を纏って、泰然と。

異様な輝きを放つ二つの眼が、影の中に冴え冴えと浮かぶ。

まるで姿無き私を見定めているかのように、小揺るぎすらない。さっきの息苦しさとはまた違う、どこか緊迫した空気が急速に肺の中へと流れ込む。かちかちと奥歯が重なり合う音が嫌に響いた。ぐつと顎に力を込めてその情けない震えを抑えつけたけれど、食い縛ったそこから震えが伝わってしまい唇が小刻みに震え始める。

私は強く瞼を閉ざした。

自ら作りだしたその闇の中で、四方八方へと逃げ出そうとする思考をなんとか捕まえる。……この場で何よりもすべきことは何か、それを考えるんだ。

——今。

取るべき行動を間違えると、何か取り返しのつかないことになるだろう。

漠然とした予感と一瞬の直感。矛盾するようなその二つの感覚が、私の思考をやがて一つにした。

瞼を開ける。

ああ、ここはなんて暗いんだろう。閉じても闇、開けても闇だ。スイッチを押すだけで容易に得られた人工の光なんてここではただの幻。今私が向かい合う世界は、瞼一枚なんかじゃ決して隔てることはできない。暗闇から逃げることは許されない。これが「現実」であり続ける限り。

一度深呼吸した後、私は意を決して緋袴の裾を払った。

膝を曲げ、その場に正座する。

背筋^{せすじ}を伸ばして姿勢を正す。

表情を引き締め、前を見た。

——相手に見えるとか見えないとか、そういうことは今は関係ない。

晒す姿を失くしたからといって、尽くす礼儀まで無くしたつもりはなかった。

私は深く、頭を下げた。

「申し訳ありません。あなたの物を私は勝手に奪い取りました」

耳の隣に心臓ができたんじゃないだろうか。ばくばくと、鼓動がうるさい。

「あなたへのお供え物を食べました。神様に対する侮辱だと知りながら、あなたへと向かうべき信仰を私がもらいました。……今もそうして命をつないでいます。」

私は顔を上げ、美しくも恐ろしい狐の姿をした山の主を真っ直ぐに見た。

三日月に歪む青白い眼。

怖い、でも今は目を逸らしてはいけない。本当に何かを言いたい時は、決して相手から目を逸らさないこと、目を逸らさないことと決めたなら本心を隠さないこと。いつだったか、ごちゃごちゃと理屈をこねる私に兄がそう教えてくれた。

恐らく今が、その時なのだ。

「でも、里の人たちにしたことを私は後悔していません」

良いことをしているのだからきつと許してもらえらるだろう。

そのぐらいの気持ちだった。最初は。

けど気づいていたよ。結局は自分のための独り善がりな「恩返し」なんだって。傲慢な奴と糾弾されても仕方がないんだって。助言じみたことを散々他人に言っておきながら、自分の考えが間違っていないかいつも不安だったよ。全てが全て、うまくいっていたわけじゃない。

でも悩んでいた里の人たちが笑顔を見せてくれたから。ありがとうと真摯に言ってくれた人がいたから。例えば私がどんな理屈をこねようともそれだけは。

ただそれだけは——間違っていなかったと思う。

高級毛筆のような四本の尾が、夜の空気を含んで静かに揺れる。

その筆がやがて綴るだろう裁断の言葉を私は待った。

ふと、ため息のような呼気が聞こえて沈黙が破られる。

『可。……ぬしが供物を口にした時、腹が減っていたのだろう？』

労わるような音が鼓膜をやんわりと撫でた。

『空腹は苦腹だ。食せるものが目の前に有りながら、耐えて飢えよとは酷な事』

気に病むなど、唸る声は温かくて。

きりきりと張り詰めていた緊張の糸がぷつんと音を立てて切れた。強張った体が緩む。

……というか緩み過ぎて、いつそのことも何もかもをぶちまけてあのふさふさした巨体に突撃して大声でわんわん泣きつきたいという衝動に駆られた。いや、てっきり激怒されて追い詰められたあげく頭からばっくり食われてげふーごっそさん、になるかと思ったのに腹括って覚悟していたのに、八割くらい。

思いがけないカウンターを食らいました。

『寧。供物が増えておるのは喜ぶべき事。己で増やした物を己で食らったとて、何処に非が有ろう。ぬしが悔やむ事など何も有りはせぬ』

「え、いやでも私は『山神様』って呼ばれてて、つい調子に乗ったっていうか、なんか色々とやらかしてしまっただっていうか、その……」

『許。我が良いと言っているのだ。ぬし——朔月、近う寄れ』

あれー、優しさってこんなに胸に沁みるものだったっけ。

誰かに慰められるってすごいな。すごすぎてなんか込み上げてきたよ。

私は立ち上がりギイギイと床を軋ませながら、予想外に寛大なお狐様の足元までのそのそと近づいた。

……改めて近くで見ると本当に大きい。

頭が天井に着くか着かないか。軽く二メートル以上はあるだろう。毛色は暗くてよく分からない。漫画とかによくあるような眩い銀色……ではないようだ。ただ、闇の中でも艶やかだと分かる毛並み

が呼吸に合わせてゆったりと上下しているのが分かる。その動きを見て、本当に生きているんだなあとちょっと場違いな感想を抱いた。胸の辺りがちょうど私の頭の位置で、もふわつとしていて柔らかそうだ。ああ、ちょっとこれ、さ、触ってみたいなあ……はあはあ。でもやっぱり一番気になるのはポリウム感たつぷりのふつさりとした尻尾だ。こういう妖怪系？ の狐って定番は九本だったような気がするけれど、なぜかこの山の主の尻尾は四本しかない。九尾ならぬ四尾の狐というわけだ。まあ多けりゃいいってもんじゃないのかもしれない。

『——我が恐ろしいか、朔月』

しげしげとそのファンタジーなお姿を眺めていると、静かに山の主が尋ねてきた。

私が恐怖で固まっていると思ったのだろうか。

「いいえ」

……あなたの低い声は優しい言葉がよく似合うと分かったよ。

「なんで尻尾が四本なのかなあとか、思いっきり触ってみたいなあとは思いますが」

ぽろぽろと素直に口が動いた。いや、本心隠さなすぎだろ私。

『愉。……潔く謝罪したかと思えば意思是固く、許しは請わぬ。許しを与えれば戸惑いを見せるが、言いたい事は躊躇せぬか』

面白い、と低く笑う声。

「そ、そうですか」

しまった。

相手は神様神様、うかつな態度は改めねば。何が逆鱗に触れるか

分からない。

『来。何処ぞ怪我でもしているのか？ 微かに血の臭気があるな……それとこれは我の神気か。ぬし、真に我の供物を食らっていたのだな』

「すみません、お、美味しく頂きました。……あの、もしや血は『穢れ』なんでしょうか。いや、もう神様の血とか御法度に決まっていますよね！ すす、すみません気付かなくて！ 今すぐ出て行きます」

冷静に考えたらうかつな態度うんぬんの前に、これはすでに立派な住居侵入罪である。

神社とはつまり神様のご自宅なわけで。家に帰ってきたらどこの馬の骨とも知れん奴がぐうすか寝てるって、もうそれだけで普通にブチ切られてもおかしくない状況だ。ということとはつまり、ためコノヤロもう怒ったマジ祟ってやる的な展開も十分あったわけで。

まさかホンモノがいると知らなかったとは言え、考えれば考えるほど私というやつは命知らずである。

そそくさと速やかに立ち去ろうとすると、四本のもふやかな尻尾がざつと動いた。

何事かと思う私の目の前に立ちはだかる大きな壁。もちろんとっさに飛び越えられないことも無かったけれど、ここは迷うことなく特攻することにした。千載一遇棚からばた餅塞翁が馬初志貫徹アタックチャンスもうなんでもいいや、いざ突撃！
ぼふり。

すっぽりと体が包み込まれる感触。

うはーなんだこれ天国……っ！ あったけー！ 安定感抜群！

私は尻尾の上に乗るかかったまま、そのあまりの心地良さについて頼ずりした。え、うかつな態度？ 何ですかそれ。ああ、この有り

得ないくらいふかかな毛布があれば毎晩ぐっすり熟睡できるだろうなあ。

たった一人で膝を抱えて眠る夜よりも、きつとずっと。

『留。血など我は構わぬが——ぬし、何をしている』

「うあ、はい！ すみません、なんか切ないくらいに気持ちよかったのでつい！」

『……朔月は人の形をしているのか』

「え、分かるんですか！？」

『是。其れ程、我の尾に食らい付いておればな』

「め、面目ございません」

『許。先刻からぬしは些か腰が低いな。だが、どうも諂っている様には感じられぬ。阿諛あゆの徒に有らず、侮りや見縊りの顕れでも無し。

——面妖と言うか、小気味良いな』

「はあ、恐れ入ります」

これは褒められていると捉えてもいいのだろうか。神様の考えることは難しゅうてよくわからん。

マックス名残惜しいが、私は尻尾を堪能するのをやめて山の主の傍らに立った。

……しかし、一本イコール私の身長分くらいって凄く長さだ。これではしつと叩かれたら確実に吹っ飛ぶな。今の私はやたらと身軽だから、きつとギャグがっつてくらい見事に飛んでいくだろう。

黙れ小僧とか言われながら尻尾で吹っ飛ばされる自分を無言で想像していると、山の主がふいと神社の外を窺うそぶりを見せた。

「どうされたんですか？」

『聴。愛子あいこが泣いておる』

What?

「う、ういご？ 泣く？ ……何も聞こえませんが」
『——山を越えようとも我は傍に居たと言つに、会いに来たのか。やれ、困った子だ』

困ったと言つ割には、微妙に嬉しそう。例えるならそう、まるで自分の子供のワガママをしようがないなあと見守る親のようだ。床にお座りするように佇んでいた山の主が優雅に立ち上がる。そしてしなやかな身のこなしで神社の外へと出て行く。状況がよく分からないけれど、私はとりあえずその後を追った。一人にされるのは嫌だった。

＊＊

ギイギイと神社の朽ちかけた段差を降りた先は、相変わらずの真つ暗闇だった。

吹いてくる風は昼に比べるとやや冷たく、静謐な夜の匂いにする。確か今日辺りが満月だったなと空を仰いだけれど、生憎の曇り空だ。星すら見えない。

私がぼけーと口を開けて空を眺めていたら、同じように鼻先を上向かせていた山の主が突如不快氣に一つ唸った。ぼすんとやや乱暴に尻尾を揺らしたせいで、私の方に風が来る。そよそよ。

『——憾。^{いみじ}忌子も付いて来たか。ならば我が姿を現す訳にはいかぬ。

『惜しい事よ』

「いみご？」

『なれど、あれ程泣けば愛子に獣が寄るな。……了。まあ害成す獣など我が食うてやれば良いが』

何をぶつぶつと仰っているのだろう。

なんか後半に物騒な言葉を聞いた気がするけどスルーの方向で。

『駆。朔月、我について参れ』

「へ！？ 無理です！ こんな真つ暗じや何も見えませんですよ！」

『呆。人間の様な事を言うのだな、ぬしは』

「一応人間ですから……たぶん」

『制。問答は後だ。ぬしの顔は何処に在る？』

「はい？ か、顔ですか？ えーつとあなたの胸より少し下の辺りですが。どうしてです……」

か、と言おうとしたところでべろりと顔を舐められた。

ひいいい喰われる！！ と心の中で絶叫しつつぎゅっと目を瞑れば、その瞼の上を二、三度また舐められる。しつとりと、舌の感触。ま、前髪が強制オールバックになる……！

『済。此れで良いだろう。参るぞ、朔月』

恐る恐る薄目を開けると、どーんと赤茶色の毛が視界一杯に映った。

ぎょつとして周囲を見渡すと、あらゆるものが突然淡い燐光を放ち始めたかのようにはつきりと「見え」た。輪郭、色彩、陰影その他もろもろが手に取るように分かる。

山の主のベロパワーか！？

「すごい！　どうなってるんですかこれ！　うわー見える見える」
『宥。此れしきの事など造作無い』

赤茶色の毛並みの巨大狐はそうクールに言い放つと、地面を蹴って駆け出した。

ひゃっほーうとテンションの上がった私も木の上に飛び乗ってその後が続く。そう言えば、夜中にオンボロ神社の外に出たのって初めてだ。

草木も眠る夜の真ん中。道なき道を私たちは疾風のように走り抜ける。

でも山の主は私がちゃんと付いて来ているかどうか時々声をかけてくれた。その何気ない気配りにいちいちじーんと来てしまう。

袂を翻し、緋袴を捌き、ひた走る。いつもは不気味に感じる獣の遠吠えも、梟の鳴き声もちつとも怖くなかった。誰かと一緒だというその事実だけで、こんなに心強い。

唐突に始まった短距離走のような移動は、これまた唐突に終わった。

辿り着いたのは森の中にぽっかりと開けた場所だった。中央には、樹齢数百年はありそうな大木が堂々と鎮座し周囲に陰を作っている。あ、ここ最初に山中駆けずりまわった時に、一回だけ来たことがある。

『注。見よ朔月、あれが山神の――我の愛子だ』

可愛くてなりませんと言わんばかりに巨大狐が私に示したのは、大木の根元にできた洞の中。

うん？　ここからじゃよく見えないな。

木の枝を軽く蹴って宙で一回転した後、とんと地面に着地。あーもう私サーカス団員になろうかしら。空中綱渡りとか人間タワーの

てっぺんとか、今なら全部楽勝でやれそうだ。世界初曲芸できる巫女さん！ おおなんか売れそう。……いやでも観客に見せられないんじゃないや何しても無意味か。自分、透明ですから。こりゃとんだピエロだな。よしうまいこと言った。

いつものように若干思考を脱線させつつ、すたすたと大木に近寄ってひょいと洞の中を覗き込む。

子供がいた。

「!？」

思わず山の主を見やると、やや離れた場所で機嫌良さそうに四本の尻尾をもさりと揺らしていた。

え、いや尻尾振られても！ 何！ なんで洞の中で女の子が寝てるんですか!？

体を小さく丸めて眠る少女。視界がベロパワーで強化されているため、本来は暗闇に遮られているはずのその顔がしっかりと観察できた。

肩まである薄茶色のさらさらの髪がふっくらとした幼い頬にかかっただけでも可愛い。エコーよりもちよつと年下だろうか。大人しい子リスのような印象だけど、これは将来絶対に美人になる顔立ちだ。

ただ惜しむらくはその顔が涙でぐちゃぐちゃに塗られたらいいことだった。どんだけ大泣きしたんだよってくらい酷い。今は涙の潮が引いたのか、時折ひくひくと小鼻が動くだけに治まっている。なるほど、山の主はこの子の泣き声を聞きとっていたのか。

洞の中で静かにまどろむ少女を横目で見やりつつ、私は山の主に尋ねた。

「あの、どうするんですかこの子。連れて帰るんですか？」

寝た子を起こすのは忍びないので、話す声も自然とひそひそ声になる。

何やらお狐様からは母性だか父性だかそういった保護者的な雰囲気を感じるので、これは恐らく「お迎え」に來たと解釈していいんだろう。

そう思っていたら、返って來た答えは意外なものだった。

『否。其れは出来ぬ』

「どうしてですか？ この子このままだと風邪引いちゃいますよ。というかこんな真夜中にこんな場所で寝てるなんて危ないし、それに今頃親が心配しているんじゃないですか」

『無。愛子に肉親はおらぬ。……一人を除いてな』

「えっと、一人いるんですか？」

『洪。……あの禍々しき災厄の忌子が愛子の血族などと、我は到底認められぬが。だが彼奴は今、この子を探して必死の形相よ』

なるほど分からね。何か込み入ったご家庭の事情でもあるのだろう。

「えーっとつまりこの子は結局迷子で、現在家族の人が近くまで探しに來ていると。要するにそういう状況なんですよね？」

『是』

「それなら私がおの人をここまで案内しますよ」

何気なくそう言った時、ざわりと空気が揺れた。

空中に立ち昇る燐光。

淡い光の尾を引きながら巨大な狐の姿を怪しく彩る。

そのあまりの美しさに、肌が粟立つた。

『——興。或いは運命さだめの邂逅となるか。……我と朔月の様に』

それは。

どういつ、意味なんだろうか。

『頼。では我の背に乗れ。案内あないしてやろう』

忌子の許もとへ、と山の主が感情の見えない声で唸った。

第4話 透明少女に答える声 7 2

それはまさに矢の如き一陣の風だった。

私の付け焼刃の俊足なんて足元にも及ばない。

猛烈な風が頬を叩き、髪を掻き乱し、袖や裾を弄なぶってくる。その気流を食い千切りながら、山の主は脇目も振らず前へと進んで行く。打ち寄せる空気の波は怒濤となり渦となり、耳元でその咆哮を轟かせた。何もかもが瞬く間に私たちの遥か後方へと流れ去っていく。息もつかせぬ圧倒の走り、—— 比喻ではない「神速」だ。

啞然、愕然、呆然である。

つまり、さつき山の主は故意に速度を落としていたという訳だ。

燐光を撒き散らしながら、両脇の景色が豪速で通り過ぎる。木がよけてるー！ とか叫ぶ余裕すら無い。生きたジェットコースターがあれば、きつとこんな感じだろうと思った。

もし神様の乗り心地を誰かに聞かれたなら、とりあえずシートベルトの偉大さを伝えようと私は固く誓った。

時間にして、ものの数分もかからなかったと思う。

猛然と木々の間を抜け出た途端、一気に山道の上へと躍り出た。

ふわっとエレベーターが降下するとき特有の内臓の浮遊感。その感覚を一瞬だけ味わった後、ようやく山の主の動きが止まった。

しかしそのフィニッシュがまた何と言うかこう、無駄に派手だった。

着地と共にごおっという音がして、周囲に突風が吹き荒れたのだ。木々という木々がまるで殴られたかのように一斉にざわめく。葉っぱが狂ったように空一杯に飛び散った。

私も口から泡とか魂とか悲鳴とかエクトプラズムとかそれ系のものが色々まとめて出そうになった。しかし山の主の御前でそんな醜態を晒したくはないし（見えないとしても）、何より乙女としての沽券に関わるため、気合いと根性を総動員させてもろもろを見事体内に留めてみせた。

そしたら勢い余って、もぎゃつと舌を噛んだ。
い……いひゃい……。

『着。朔月、大事無いか』

息一つ乱さずに悠然とジェットコースター、ではなく山の主がこちらを振り返る。

私はこくりと頷き、ほがほがと答えた。

「あい、大丈夫れす。ひよつと舌を噛みまひたが……」

『惑。済まぬ。許せ』

「いえ、わらひが軟弱なだけれすからお氣遣いなふ」

『笑。左様か』

くぐもった笑いの気配がお尻を伝わってくる。

な、なんでそこで笑うんだ……正直に言ったのに。だってほら魔力とやらが皆無の私は、山の主なんかと比べればそれこそアリンコみたいなものだろう。

するりと背中から滑り降りて、あなたと私の間にいかに雲泥の差（もちろん私が泥）があり、私との格の違い（ただし逆の意味で）というものを熱く語ろうしたそのとき。

突然誰かの叫び声が夜の静寂^{しじま}を切り裂いた。

「カンナっ、カンナカンナ！」

驚きにぎくりと身を硬くする私を宥めるように、尻尾の一本が軽く背を叩いてきた。

「落ち着け」と言うようにぼすんぼすんと。

……おーけーちよつとのけ反りましたが、落ち着きました。

あとついでに和みました。

くっそー優しいなあもう。私と走った時は黙って手加減してくれるし。

思わずほんわりしてしまった気配を察知したのか、山の主が微妙に呆れたような視線を私がいる空間に向ける。そしてすぐにそのシヤープなラインの鼻先をくいと動かすと、声がした方を指し示した。

『凝。あれが愛子の兄だ』

——兄？

慌てて目を凝らし、示された方の山道を窺うと確かに一人の少年がそこにいた。

……怪我でもしているのだろうか、足首を握り締めてへたり込むように蹲っている。

これは予想外だ。

てつきり大人の人が探しに来ているものだと思っていた。うーん、エコーよりちよつと年上かな。あの子が「山神の愛子」の兄ということは、今聞こえた「カンナ」というのは、あの少女の名前なんだろう。

——それにしても、なんて悲痛な呼び声だろう。

いや、呼んでいるというよりも体中の恐怖を絞り出しているという感じだった。

小さな背中が震えている……。

そうか、そんなに君は怖いのに。それでもここまで来たんだね。

私は掴んでいた毛から手を離し、その少年の側へと歩み寄った。

山の主はじつと立ち止まったままだ。どうやらしばらくは成り行きを見守るつもりらしい。

——静かだな。

今まで聞こえていた獣の遠吠えはおろか、虫の声までぴたりと止んでしまっている。

そこでようやく、肌に理解が沁み込んだ。

ざわめきを生み出し、静寂を伝える。それは山の呼吸だった。

山の主とはこういふことなのだ。

私が少年の隣まで来たとき、彼は丁度立ち上がりよろよろと歩き出すところだった。

前髪が異様に長い。

顔が半分ほど隠れてしまっている。顔を見せまいとする意思さえ感じるような長さだ。でも隣に立ってよくよく観察してみると、その下にある両頬がびっしりと水に濡れていることに気が付いた。押し殺したような嗚咽が細い喉から漏らされる。

あ、と思った瞬間。

白い顎の先から透明な雫が落ちていった。

ぱたぱたと遠慮がちな音を立てて土に染み込んでいく彼の涙。それはまさしく「静の号泣」だった。

——なんて静かに泣く子だろう。

この子は、子供の泣き方を知らないんじゃないだろうか。

明るい日差しの下で何もかも曝け出して声の限り訴える、そういう泣き方を。

そんな風に泣かないで。

少年の頭にそつと手を乗せて、よしよしと撫でてみる。

私は小さい頃頭を撫でられるのが好きだった。撫でられる時に与えられる大きな手のぬくもりが幼心に嬉しくて、ほっと安心できた。なんだろう。今日はエコーの頭もよしよししてしまったし、こういう性癖でも開花したのかな私は。撫で魔……？　そうか撫で魔か。ちよつと変質者っぽい響きだな。

激しく下らないことを考えつつも私は何度かその薄茶色の髪を撫で、よしと勝手に満足して手を離す。ひょいと少年の様子を窺うとピキンと音がしそうなくらいに硬直していた。

その反応があまりに正直というか素直というか、本当に「僕驚きました！」という感じそのものだったので、私はついつい吹き出しそうになる。

まあそりゃ、誰もいないのに突然よしよしされたらびっくりするか。

怖くないよーただの撫で魔だよー。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

安心して欲しくて吐いた言葉はそんなありきたりなものだったけど。

私の胸はポリバケツ一杯分くらいの感動に満たされていた。

こんな夜更けの山にたった一人で、さぞ怖かったろうに。

一度ついた膝、それを再び奮い立たせるのは口で言うほど簡単なことじゃないのに。それでも、妹を探すために一生懸命立ち上がるうとする君は、なんて勇敢なんだろう。

どんなに涙を零していても、次に踏み出す足を持っている。恐怖を上回ったその一步がどれほど誇れるものか君は気付いているだろうか。

ああ本当に。

君は『お兄ちゃん』なんだね――。

「おいで」

一緒に行こう、妹の所へ。

暗くても大丈夫、私がいるよ。

独りだと夜は残酷なまでに深くなるから。簡単に絶望してしまいたくなるから。

私は知っているよ。たった一人の家族と会えないその寂しさを。

もう何度思い出したか分からない。その顔を、言葉を、ほんの些細なやりとりを。

でも君は違う、すぐに会える。

会わせてあげる。

だから

「こっちにおいで」

私が振り向いた時、既に山の主の姿は影も形もなかった。愛しの

「カンナ」ちゃんの所まで超特急で戻ったのだろう。

少年はというと、驚くほど素直に私の声について来てくれた。
怪我したらしい足を引き摺って、ふらふらと。

まるで夢の中を彷徨うような危なっかしい足取りが非常に気になったけど、私が「おいでー」というとゆっくりながらも確実にこっちへと足を進めてくれるのだ。

自分でやつといてあれだけど、よくこんな声だけのB級ホラー映画っぽい不気味な誘導に付いて来れるなと思った。彼にとってここが暗闇であることには変わりはないのに、どうして私の声を信じてくれるんだろう。知らない人に付いてっちゃん駄目って教わらなかったのかな。

…… まあ疑われちゃ困るんだけどね。

話しかけてみようかなと何度か思った。

でも、たぶん少年は暗い山道を歩くだけで精一杯なのだ。間違っても、楽しく談笑しながら登山しようぜみたいな雰囲気ではない。したがって私は空気を読むことにした。空気にはシャラッププリーズと書いてあった。

ちらりと少年を振り返る。

あ、また立ち止まっている。

「おいで」

こっちですよーと声をかけると、またふらふらと歩きだす。

なんだか野生動物を手懐けているような気分になって、私は少年をとつくりと眺めてみた。

七分丈の長袖の上にエコーが着ていたような甚平っぽい黒い服。エコーと違うのは里の人たちみたいに腰に幅広の帯を締めている

ところだ。甚平のぶかつとしたズボンの下からは、ひよっこり二つの膝小僧が見える。膝下からはサンダルブーツによく似た靴に覆われていた。指先と踵の部分だけ露出している、通気性のあるブーツだ。

全体的に見ると和服っぽいファッションだけど、ところどころに洋服をミックスして仕上げの味付けに中華風エッセンスを加えたような感じた。これだけ和洋中ごちゃ混ぜでも全然ちぐはく感が無いのが不思議だった。

思えば今日一日だけでも、不思議なことだらけだ。

それは、私の常識と「現実」を照らし合わせるからこそそう思うわけで。

元の世界との乖離から目を伏せて、私はそつと溜息をついた。

行きは数分、戻りは数十分。

やっとあの太木がある場所まで辿り着いた時、歩き始めて結構な時間が経っていた。その間も私が発した言葉は「おいで」か「おいでー」である。もはや「おいで」が飽和してゲシュタルト崩壊寸前だ。

「おにい……？」

「カンナ！？ どこだカンナっ！」

と、下らない事を考えていたらカンナちゃんらしき女の子の声があった。山の主が起こして上げたのだろうか。それは本当に小さな声だったにも関わらず、はっと少年は勢いよく顔を上げた。狼狽した声で名を呼び、その後すぐに洞の中にいる妹を見つける。

そして小さな兄妹は再会を果たした。

離れないというように兄の首にしがみつく少女。そんな妹を包み

込むように、縋りつくように少年が抱きしめ返している。彼の頬が、また涙に濡れていた。

その様子は思い描いていた以上に優しく、ただひたすらに温かい。

良かった良かったなんて心の中で呟きながら、私は二人から目を背けた。

これ以上見ていたら、あの中に乱入してしまいそうだ。ちょっと私も仲間に入れてくれーとか言つて。いや誰だよ前って突っ込まれそうでそれで……ああ、変だな。胸がくるしい。緋袴の帯、少し締め過ぎたかな。

苦しさから逃れるように、私は二人に背を向けて歩きだした。

十歩くらい歩いた所で立ち止まって、空を見上げる。すると、それを見計らったかのように雲間が割れて月が顔を出した。ほら、やっぱり今日は満月だ。なんて明るくて大きいんだろう。眩しい。綺麗。

あんなに。

——あんなに月が綺麗だから、私はこんなに哀しい。

誰かが息を飲むような気配がした。

後ろを振り返ろうとして、ふと足元に自分の影が落ちていることに気が付いた。

月影に照らされて作りだされる私の影。

私の影……。

——月は暗闇を照らし、見えぬはずのものを眼前へと。

私は視線を地面からゆっくり上げ、二人がいる方へ向けた。妹を抱えた少年が、満月の白い光の中に立っている。

その長い前髪の奥にある瞳が、私を捕えていた。

……ん？

ちょ、え、待った。

見てる。

ばっちり見てる。

というか目が合っている気がする。

いやいやいや待て待て待て待て焦るな自意識過剰だ。何か別の物を見ているという可能性も無きにしも非ずんば虎兇を得ずとにかく落ち着いて考えよう。おさない、はしらない、しゃべらないってこれは避難訓練だ。

「あ、の」

ははは、話しかけられたああああ！！

「つ、月が……」

え、はい何ですか！？ 月が何だって？

「月が、きれいですね」

突然、私の頬に雨が降って来た。

たまたま月が出ているとは言え、空の大半は未だ厚い夜の雲に覆われている。いつ降って来てもおかしくないだろう。そう思ったらまたばらばらと両頬に落ちてきた。あ、まずい。これは本降りにな

るな、とそう思って手を当てると、それは雨なんかじゃなくて私の涙だった。

雨が降って来ても別におかしくは無い。
けど、これはおかしい。

私の涙腺は壊れてしまったのだろうか。
涙が止まらない。

「うん。うん……ありがとう」

もう全てのものが滲んでしまつて、何が何だか分からない。
自分がどうしてお礼を言っているのかも分からない。

ただ分かるのは、月が綺麗なこと。

「僕の名前はライヒ。……あなたの名前は？」

少年が尋ねる。

私はその答えを持っていなかった。

でも月の呼び名が一夜毎に変わるように、私もまたそうしよう。
それは一つの抜道^{ぬけみち}。

私は笑った。

欠けて、満ちて、そして。

「私の名前は朔月」

ただ分かるのは、月が綺麗なこと。
それだけだった。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 1

「あたしの身長、ですか？　一ローメル六十七スートですよ」

そう言った時、微かな夜風がニーナの頬を撫でた。

油を張った小皿の上にちよこんと乗った灯りが、風に合わせて小さく身じろぎする。

遠くから聞こえてくるのは調子外れの歌声、手を叩く音、笑い声。風向きによって運ばれてくるそのさざめきは、留守にしていた里長の半月ぶりの帰還を喜ぶ祝いの宴のものだ。

先ほどまでニーナもあの中にいたのだが、宵の口になり篝火かがりびが焚かれ始めた辺りでクラトが突然帰ると言いだしたため、ならば一緒にと席を辞したのだ。

灯火が卓上でか細げに揺らめく。

綺麗な火だ。

煤も油煙も出ていない。

それは輝き照らすというよりもむしろ仄々とした陰影を生み、物の輪郭を曖昧にさせるような控えめな光度があった。闇をそっと掻き分ける美妙的な明暗が目優しい。

故郷の明々としたランタンの炎を思い出す。

あれよりも、この儚い灯りの方がずっと落ち着くとニーナは思った。

「……六十七？」

訝しげに聞き返す少年の秀麗な顔もまた、仄かな灯りに包まれている。

彼が頬に落とす睫毛の影にニーナは一瞬見惚れてしまった。

「なあ、一スートってのは一ジンと同じ長さだよな？」

「はい」

「で、一ローメルが一ロン」

「ええ。単位が違うだけで、長さ自体は東西統一されていますからね。それでクラトさんは？」

聞き返すと、途端に視線をさまよわせる年下の少年。

じっと見つめていると、クラトはああくそつと小さく悪態をついてぼそりと呟いた。

「一ロン六十六ジン」

「あ。一スート、あたしの勝ちなんですね」

「うるせえ俺は今から伸びるんだよ」

「む、あたしもですよ。故郷では小さい方ですし、まだまだ伸びると思います」

実際、西大陸に住む者は概ね成長期間が長く、二十代の後半まで身長が伸び続けるという者もざらである。対して東大陸の人間は比較的小柄で、内存魔力の寿命が他の人種に比べて長いと言われている。

とは言え、ヒノワ帝国が大陸外に門戸を開いて二百年ほどが経過した現在。

東西南北の混血が増え、魔力が融合した影響を受けたのか、背の高いヒノワ人も徐々に増えてきているらしかった。

ニーナが帝都にいた時のことを回想していると、クラトが唸った。

「……一応、聞きてえんだけど」

「なんですか」

「お前んとこの国の男って、背えどれくらいなんだ？ 普通」

「平均身長のことですか？ うーん成人男性でしたら、たぶんロー

ザさんより十スートほど低いくらいでしょうか。……そう考えると、ローザさんはこの国では破格なんですねえ」

「馬鹿口ウザより十ジン——つつうことは、一ロン八十ジン!？」

で、でけえと何故か打ちひしがれる華奢な少年を横目で見やりつつ、ニーナは陶製のカップに手を伸ばした。

温かい緑色の茶をこくりと一口飲み干す。

煎じた葉から抽出したというその茶にはまろやかな渋みがあり、甘い物を食べるときに丁度良さそうな味だなと思った。

ふうと満足げに一息ついてから、いまだに何事か唸っているクラトを会話に引き戻す。

「クラトさんクラトさん」

「ああ？」

「お話、まだ全然進んでいませんけど」

「あー。悪い」

「いえ、あたしが無理にお願いしていることなので」

この国について自分は知らないことが多い。

そうニーナが気が付いたのはクラトやキリナと共に生活し、里の人々と言葉を交わすようになったつい最近のことだった。

帝都に腰をすえていた一ヶ月。

だいすしよりよう

来る日も来る日も中央の大図書館に通いつめ、神薬花に関する情報収集に専念していた。働き口で幾人かの知り合いはできたが、気楽に世間話をするような心の余裕がニーナには無かった。

目に映るものは異国の珍しいものばかりだというのに、薬草以外の物は雑然とした風景としてただ素通りしていく。

——例えば、灯火。

それひとつを取ってみても、これほど情緒を感じる物だったなんて気がつかなかった。茶の一杯にじんわりと心が和み、肩の強張りが徐々にほじめてゆく。

一体自分はこの国で何を見てきたのだろうと思った。

ここに来て、初めてニーナは「知りたい」という感情が生まれたのだ。

クラトが生きるこの国について、とても知りたいと思った。

「まあ、俺が教えられるのは少ねえと思うけどな。本でかじったくらい知識しかねえし」

ニーナはぱちぱちと瞳を瞬かせた。

「クラトさん、字が読めるのですか？」

確かにヒノワ帝国は帝都周辺とその他の主要都市以外では、識字率はかなり低いと聞きましたが

……」

「あー。この里じゃ、若い奴らは読み書き算法ができて当たり前なんだよ。六年前に馬鹿口ウザがここにやって来てからな。皆あいつの手ほどきを一通り受けているんだ」

「え！ ローザさんはこの里出身ではないのですか！？ それなのに長！？」

それには答えずに、クラトは草の茎で編んだ敷物——ゴザというらしい——からすつと立ち上がった。ニーナの前を横切つて窓の所へ行くと、ぱさりと窓掛けを下ろす。

——実はさつきから夜風が少し冷たいと思っていたのだが、もしかして気が付いてくれたのだろうか。

寒くないかと問うてくる少年に、ふるふると首を振ってみせる。

あたたかいな、と思う。

「里長つてのは普通は里の年長者がなるもんだが、あいつは六年前、地方のお偉方に任命されたとかでここの里長になったんだ。言わば『余所者』だな」

「よそも……」

「まあ、最初はぶつぶつ文句ばっか垂れていた連中も今ではあの騒ぎだ。見りゃ分かるだろうが、あいつは里の奴らに慕われている。人の心を掴むのが上手いんだろうな」

「ふふ、クラトさんも掴まれてしまったのではないですか？」

「……別に。おい、なんで馬鹿口ウザの説明になってんだよ。もう寝るぞ」

「わわわ、すみません！ ヒノワ帝国についてお願いします！」

「静かにしろ。隣ではあが寝てんだから」

「す、すみません」

思わず首を竦めてこそこそ謝ると、少年は片頬に小さく笑みを浮かべた。

最近、彼の笑顔を見る回数が増えた気がする。冷やかな物言いや表情が多い彼は、けれど時折こんな風に優しくニーナに笑いかけられる。

それだけでもう、顔が熱い。

窓掛け布が夜風にふわりと膨らんだ。

「そついや今夜は満月だったな」

「そうなんですか。良かった、空は曇っているみたいですよ」

「は？ 何言つてんだ？ せっかく鞘夏しやうかの満月だろ」

「えっと、月の光は人の裏側に秘められた狂気と呼び覚ます……と、こちらでは言わないのですか？」

「俺は知らん」

「そ、そうですね。その『ショウカ』というのは？」
「ああ、季節の名前だよ」

そう言つてクラトは卓上にあつた筆を取ると、墨磨りに穂先を浸した。

そして粗い表面の紙を広げ、その上に横一直線を引いた。そこに短い縦線を十二本書き入れ、下にさらさらと文字を連ねていく。

毛筆というものがどうも苦手なニーナは、少年の流麗な文字に感嘆のため息をついた。

春、歌春 かしゅん
夏、鞘夏 しょうか
秋、謝秋 しゃしゅう
冬、礼冬 れいと

「……よし。ニーナ、西大陸の一年は？」

「十二ヶ月で三百六十五日あります。季節は地域にも異なりますが、大体四つに分けられますね」

「この国でも一年は十二ヶ月だ。ただ、日数はお前のところより十日間少ないな。で、四季の終わりにはそれぞれ別に名前が付いている」

「それが、このカシユンとかショウカというものですか？」

てん、と文字の隣に指先を置いてみる。

「ん、そう」

「それで今は、この夏と秋の間にあるショウカの時期なのですね。

……これにはどういう意味が？」

「夏を刀に見立てているんだよ。暑さを鞘に収め、座して秋の訪れを待つ。秋の終わりには豊饒に対して感謝する『謝秋』、冬が通り

過ぎれば厳寒に敬意をもつて一礼する『礼冬』、そして春の盛りを慶び歌う『歌春』。なんかもつとあつた気がするけど大体こんなもんだろ。あとは『雑季』つつつて季節の目安になる日とか期間とか色々こまけえのがあつたな。覚えてねえけど」

「はあ……。すごく細やかな季節感ですねえ」

「そうか？」

てんでん、と十二本の縦線の上を春から冬に向かって指で辿っていく。

帝都と宮城を囲っていたあの十二門は一年を意味していたのだと、ニーナは遠く離れたこの地に来て理解した。

もつと注意深く周りを見ていたら、見えてくるものも違っていたのだろうか。

そこでふと疑問が湧いた。

「あれ？ さつきクラトさん、一年の日数が十一日間少ないっておっしゃいましたよね」

「ああ。一年は三百五十四日だ」

「だったら少しずつ西大陸の暦と誤差が出てきませんか？ 十一日の三倍は三十三日ですから、三年ごとに約一カ月分の誤差が生じるということになりますよ。ヒノワ帝国は貿易も盛んなのに、相手国とスケジュールが合わないというのは困りませんか？」

「助十？」

「日程のことです」

「ああ、そんなときや三年に一回こうすればいいんだよ」

クラトは筆をひよいと左に持ち変えると、十三番目の縦線を引いた。

ニーナは思わず卓の上に身を乗り出した。

「すごい！ クラトさん両利きなんですか！？」

「ってそこかよ。……俺は元々左利きだ」

「はじめて知りました」

「初めて言っただけだな」

「あたしは右利きですよ」

「知ってる」

ふと間近で紺色の目が優しく細まるのを見てしまい、ニーナは慌てて元の場所に座りなおした。誤魔化すようにむむむと紙の文字を真剣に見つめる。

——つまり、十三番目の月を三年に一回加えることで暦のずれを解消しているということだろう。なぜそんな面倒くさそうな事をしているのだろうと西大陸出身のニーナは不思議に思った。

そう質問してみると、東大陸の少年は無言で人差し指を上に向けた。

「……太陽ですか？」

「違う、月だ。月の形によって一ヶ月は定められているんだよ。ほぼ三十日で満ち欠けを繰り返すからな」

「なるほど」

「で、一ヶ月の一日目は新月の日で『月立ち』。最終日も月が無くなるから『月隠り』って呼ばれている。日を知るために月を読むのが『月読み』だ」

言いながら、さらさらと紙に書き加えていく。

「クラトさん、だんだん覚えきれなくなってきました……」

「あ？ まあ要するに、この国の人間は月ばかり見てるってことだよ」

「な、なるほど」

月がこんなにも重要視されているのか、と思い何となく窓の方を

見る。

窓掛けがあるため外の様子は窺えないが、月明かりが無いのでやはり夜空は曇ったままなのだろう。ニーナの故郷では、月や月の光は「狂気」や「不吉」といったものを暗喩する存在だ。だが、この国ではそうではないらしい。

それどころか先ほどのクラトの口ぶりからいうと、風流を感じるものであるらしかった。

満月が見えない。

そのことをニーナは初めて残念に思った。

「ニーナ、お前春生まれだろう？ 時期的には歌春か」

「へー？ そ、そうですね……なんで分かったんですか？」

「勘」

少年は卓に頬杖をついて短くそう言っていると、左手に持った筆で「歌春」の文字をさらりと円で囲んだ。なんだかその季節が特別扱いされたような気がして、ニーナはこっそり頬を染める。

「クク、クラトさんはっ？」

「俺は礼冬」

「あ、なんだか納得です。そんな気がします」

「そうか」

「あの、ちょっと筆をお借りしてもいいですか？」

ん、と差し出された筆を受け取ると、今度はニーナが「礼冬」の文字を歪な円で囲った。

よれよれの丸を書きあげ、やっぱり毛筆は難しいなあと思って、照れ隠しで笑う。

「へへ。おそろいです」

「……っ」

突然少年が勢いよく顔を背けた。

あれ、気に入らなかったのかなとニーナはしょぼんとして筆を墨磨りに戻した。

もつと筆を練習しろという事なのかもしれない。せめて自分の名前くらいは綺麗に書けるようにしたいものだ。

はた、と重要なことを思いつく。

「あの、クラトさんのお名前は文字にするとどうなるんですか？」

顔を背けていた少年は黙って筆を取り上げると、慣れた手つきで墨の量を調節してから紙の空白に三文字だけ書き付けた。

久礼刀

「あの、この紙あたしが頂いてもいいでしょうか」

「やる」

「ありがとうございます。大事にします」

「んな大したもんじゃねえだろ」

「いいえ、勉強になりました！ それに」

それに。

——名前だけでも側にあつたら嬉しい。

いずれ自分は、この国から離れなければならないのだから。

少年が眉をひそめる。

「『それに』なんだよ」

「そ、それにそろそろあたしも眠たくなってきたので！ ありがとうございます。また明日ご教授願います！」

「まあ、ごきょうじゅって程じゃねえけど。なんだ急に……」

「おやすみなさいっ」

怪しまれないうちに紙を手早くたたみ、キリナが寝ている部屋へ

と逃げるように足を向ける。

この敏い少年のことだ。うっかり何か余計な事を言えば、そこかしこに秘めたニーナの恋情に気が付いてしまうかもしれない。

それだけは避けなければ、と部屋の戸にいそいそと手をかけた時。

「なあ」

幾分低めの声がした。

びくりとして後ろを振り返る。

灯火が卓上でか細げに揺らめいた。少年の輪郭が、影に照らされて曖昧になる。

「ついでに、教えてやろうか」

「な、何をですか……？」

「『ちゅー』」

「は、い？」

すたすたと近寄ってくるクラトに言い知れぬ焦燥を覚えて、ニーナはぶんぶんと首を振った。

「け、結構です。知らなくても平気だと思いますっ」

「俺が教えたい」

「ああもうですからっ。ほんとに、大丈夫、です……」

こんなに近づく必要があるのだろうか。

だめだ、心臓の音が聞こえてしまう。脈拍を下げる薬草が必要だ。早く、早くしないと。

この気持ち——知られてしまう。

たまらなくなつて瞳を伏せ唇を噛みしめると、しばらくしてふと溜息に似た吐息が聞こえた。

そろりと少年の顔を窺うと、そこには苦しげな笑みが浮かんでいた。

「嘘だよ」

「な」

「もう寝る寝る。俺も寝る」

それと、明日はライヒとカンナをうちに呼ぶつもりだからなとクラトは付け加えた。

ニーナはその言葉に一瞬顔を強張らせたが、慌てて一つ頷き了解を告げる。

今日見た幼い二人がその身に纏っていた魔力。それをまざまざと思い出し、ぞくりと肌を粟立たせた。

ばくばくと今度は違う意味で心臓が鳴る。

（あの子たちは、恐らく……人ではないわ）

じつと俯くニーナにクラトが静かに手を伸ばす。

「お前の眼にどう映ったか知らねえけど、あいつらはお前に危害を加えるような存在じゃねえから」

ぽんぽんと髪の毛を撫でられる。

「……はい」

「ん。寝ろ」

「おやすみなさい」

「ああ、あとな」

「なんですか？」

—スート。

ニーナよりも身長の高い少年が顔を傾ける。

今は下ろされている薄茶色の髪が、さらりと彼の肩から落ちた。火が揺れる。

頬に、軽い感触。

「おやすみ、ニーナ」

おい大丈夫かとぺしぺし額を叩かれるまで、ニーナはただ呆然と
頷くことしかできなかった。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 1（後書き）

1 m = 1 ロン（東大陸） = 1 ローメル（西大陸）
1 c m = 1 ジン（東大陸） = 1 スート（西大陸）

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 2

しとしとと雨が屋根を叩く音がする。

朝から降り続く雨足は一向に途絶える気配がない。

部屋の中央にある囲炉裏からはちりと火が爆ぜ、クラトは漂わせていた思考を浮上させた。

——ちらりと右を見る。

俯きがちに顔を隠す少年が足を軽く崩して座っている。

その右隣の座布団には、腫れぼったい瞼をなんとか持ち上げようと瞬きを繰り返す幼い少女。時々かくりこくりと、淡い茶色頭が前後に揺れている。

——ちろりと左を見る。

柔らかな緑髪と固い表情の異国の少女は、緊張からか置物のようにじっとしている。しかし膝の上に組まれた細い指はもぞもぞと動き、いかにも所在無げだ。そして彼女の左隣で黙々と縫い物をしている祖母。

四角い形をした囲炉裏を囲んで座る人間は、自分を入れて確かに五人だ。

だが聞こえる音といえば眠気すら誘うような雨音ばかりである。咳払い一つ無い。

ぱち、と薪の上でまた火が爆ぜた。

クラトはぐしゃりと髪を掻きむしった。

「んだよ、この空気は！　まったくいつもこいつも辛気臭えな！」

「何言ってるんだい。あたしゃ繕い物してるだけだよ」

「ごっ、ごめん、クラトにい」

「カンナ……ねむい」

「あの、クラトさん。その『シンキ』とはどんな臭いなのかお聞きしても？」

呆れた目をするキリナ、びっくりと肩を揺らすライヒ、夢の世界に片足をつっ込んでいるようなカンナと、大真面目な顔で聞き返してくるニーナ。

止まっていた時間が急に動き出したかのような四者四様の反応に、クラトは大きく嘆息してみせた。

「……お前らを会わせるところなるだろうとは思ってたけどよ。まあ、ばあはともかくとしてだ。おいカンナ、寝るな。ライヒ、いちいちビクビクすんな。ニーナ、面倒だから後で聞け」
くつくつと愉快そうに祖母が笑いだす。

「クラト、それじゃアンタはとりあえずそのおっかない顔をやめたらどうだい。そんなんじゃ話せるものも話せやしないよ」
「……うるせえな」

眉を寄せてむっつりと考え込む。
分かつている。

このなんとも言えぬ空気漂う場を設けたのは、他ならぬ自分だ。だが一体どう話し始めたものかと一人悩み始めたところ、いつの間にか数ハクは経過していたらしい。その間部屋を支配したのは和気あいあいとした会話などではなく、しとしとと鳴り止まぬ雨音だけであった。

皆クラトが口火を切るのを待っていたのかもしれない。
ふうと息をついて、首をこきりと鳴らし肩をほぐした。

だらだらと考えていても仕方が無い。話すこと話せば、後はなるようになるだろう。それに今日はライヒとカンナにも里で起こった出来事——神薬花や、突然現れた「朔月様」について話してやりた

かった。

……だが、その前に。

「おい、ライヒ」

「な、何」

「お前ら昨日の夜何があつた？」

「え！？　な、何も、ないよ……」

「嘘つけ」

短く切り捨てると、途端に臆病少年はびくりと両肩を跳ねさせた。保護欲を掻き立てられたのか、ニーナが黙って袖を引つ張つてくる。……少年を詰問しているつもりは全く無いのだが、クラトの生来の口調は昔からよくよく彼を怯えさせるのだ。

別に怒ってはいないという意味を込めてニーナの瞳を見返すと、何故かあわあわと目を逸らされた。何なんだ。

そうこうしている間にまた一つ、カンナの頭がかくりと船を漕いだ。

ちつと舌打ちをつき、クラトは胡坐をかいた膝に頬杖をついた。

いつものように「勘」と一言で終わらせてさつさと話を進めたい。だがこのまま問い詰めたとしてもライヒはだんまりを続けるだろう。この少年は存外頑固者なのだ。強行突破で口を割らせるのは難しい。

そこで仕方なく指を三本、頑固少年の前に立てて見せた。

面倒だが、これが一番手っ取り早い。

「疑う理由は三つある。昨日お前らは馬鹿口ウザの宴に始めからいなかったよな？　まあまだガキだし、お前らもああいふ大人数の集まりは苦手だろうからそこは別に問題ねえ。問題なのは俺が宵の口

で帰った時、ロウザの家を見たら明かりが点いてなかったってことだ」

ライヒの白い喉がひくりと動く。

しとしとと、雨音だけがクラトの話に相槌を打った。

「馬鹿ロウザはどうせ朝まで里の連中と飲み明かすからいねえとしてだ、留守番中のライヒとカンナまで家にいねえのはどう考えてもおかしい。外で遊ぶような時間でもなかったしな。旅疲れが出て二人とも早めに寝ちまったのかと思っていたが……」

今日のカンナはさつきからこのさまだ、とクラトは少女のつむじを指で軽くつついた。

幼い少女が寝ぼけた声で抗議するのにちよつと唇の端を上げてから、続ける。

「で、カンナの目がやけに腫れてるってのが二つ目だ。まるで長時間泣き喚いたみたいにな。こいつの泣き声はうるせえくらい里中に響くだろ、俺の耳でそれが聞こえないのはまず有り得ねえ。そして昨夜は、宴のバカ騒ぎ以外里からは何も聞こえて来なかった。んで、最後の三つ目――」

ぐいと腕を伸ばしてライヒの右足首を引つ掴む。

途端に苦しげに唸ってじたばたともかく少年を確認し、やっぱりなと零した。

「……ここに入ってきた時から歩き方が妙だと思ったんだよ。それにお前、座る時に右足を庇ったよな？ 座る時はきっちり正座する癖があるんだよ、お前。それでああこいつ怪我してんだなって確信したよ。あとはそうだな、お前が怪我すること自体珍しいっつーこ

とか」

『臆病者』と呼ばれる者は、何に対しても慎重な人間である。周りばかり窺うという性格は、逆に言えば周囲を注意深く観察できるといふことだ。

そんな慎重な者がうっかり怪我をする……つまりその時、その人間は周りが見えない状況にあったということを意味するのではないだろうか。

そう、例えば――。

「周りが見えないくらい焦っていたか、真暗闇の中にいたか、もしくはその両方か」

違うか？ と問いかけて締め括り、足首を解放してやる。

慎重で頑固な少年はしばらく顔を伏せていたが、やがて大きく息を吐いた。

「……クラトにいいには敵わない」

「あのな、普通に考えりゃあ誰でも分かることだろうが」
そうでしようかと小首を傾げながら二ーナが立ち上がり、ぱたぱたと軽い足取りで隣の部屋へと向かった。その後ろ姿を見送っているとふいに袖を引っ張られる。

見ると、腫らした瞼の下から大きな青色の瞳がじっとこちらを見上げていた。

「どうした」

「あのね、クラト兄ちゃん。カンナがノンノに会いに行ったの。おにはカンナを探しに来てくれただけよ。だからおには悪く無いわ」

「また『ノンノ』か。一体何なんだよ……で、どこまで会いに行ってきたって？」

「お山」

「山！？ 夜中にか！？」

うんと無邪気に頷く七歳の少女に信じらんねえと呟いたところで、ニーナが軟膏入れのような物と白い巻き布を手にして居間に戻ってきた。すつとライヒの側に膝をついて、軟膏入れの蓋を開ける。

「足を出してください」

少し固い声音が気になったがクラトはそのやり取りをじっと静観する。

すると臆病少年はびくりと身を引き、指示を仰ぐようにこちらを振り返ってきた。

「あ？ こいつは俺の恩人だよ。薬師みてえなもんだから安心しろ。……あー薬師じゃなくて『薬取り』って職業だ」

むすりとニーナが頬を膨らませたのでクラトは急いで付け加えた。長い巻き布を解きながら、薬取りの少女が少年に向かい静かに問う。

「処置を施しても？」

「お、願います……」

びくつきながらもライヒが了承したので、ニーナは手際良く彼の足首に軟膏を塗り出す。それから上へ下へと複雑な巻き方で帯状の布を巻いていく。その傍らではカンナがはらはらと兄の足と異国の少女を交互に見比べていた。

「終わりました」

「すごい……全然痛くない」

「痛み、腫れ、内出血に効く薬を塗り、足首を固定しました。無理に患部を動かさず安静にしていれば、数日中に治るでしょう」

「ありがとう……」

「いえ」

いつもの柔らかな雰囲気ではない。

しかしやはりニーナの声は他者を労わる思いやりに溢れていた。ぎこちなく少年に笑いかける少女をクラトは無性に抱き寄せたくなった。

その時、ちくちくと縫い物をしていたキリナが突然顔を上げて顎をしやくった。

「ニーナ、立ったついでだ。ちょいと緑茶を入れておいで。厨くじやに湯呑みと急須があるから」

「へ！？ お、おばあちゃん。あたし、お茶を入れたことが無いのですが……」

「何言つてんだい。茶葉を入れてお湯を入れりゃほつといても出来るんだから。ほれ、その鉄瓶を持っていきな」

「は、はい！」

慌てて囲炉裏にかかっていた鉄瓶を持ち上げると、ニーナはいそいそと厨へと向かって行つた。

束の間、しとしとと雨音が居間に落ちる。

ぱちんと握り鋏はさみでキリナが糸を切った。

孫と同じ紺色の目を細め、尋ねてくる。

「クラト、あの子にこの子らの事を話すのかい？ わざわざ怯えさせるようなものだと思うけどねえ」

「あいつの眼からは、どっちにしろ誤魔化しきれねえよ。勘付いているのにこのまま曖昧にさせようとする方が、よっぽど怯えさせるだろう。それにあいつなら話しても大丈夫だ。……ライヒとカンナもいいな？」

「クラトにいが大丈夫って言うなら、いいよ」

「カンナもよ。お姉ちゃんはきらきらしたお花が咲いている人ね。とってもきれい」

「……花？」

「カンナは狐憑きさ。並みの人間にゃ見えないものも、よく見え

「ているんだろうよ」

酸いも甘いも噛み分けた老婆が意味有りげな笑みを皺に寄せて少女を見やる。

視線を受けたカンナはぴくんと背筋を伸ばし、こそこそと兄の後ろに隠れてしまった。

はて、とクラトは首を傾げる。

以前はよく懐いていたのに、この少女は去年頃からか妙にキリナを避けている気がする。

恐らく自分の知らないところで何か悪戯をやらかして、祖母から拳骨でも食らったのだろう。

キリナの拳は骨ばっていて異様に痛いのだ。

そして容赦が無い。

そこではたとクラトは二人の兄妹に説教をし忘れていたことに気が付いた。

「それはそうと、お前らはまず反省しろ。夜の山はどこに繋がっててもおかしくない、この世じゃねえ界域だ。気軽に行つていい所じやねえ。お前らみたいなガキだと神隠しに合う危険もある。昨日は月明かりも無かつたはずだろうが」

「月なら出たよ」

珍しく、ライヒが強い調子で遮るように答えた。

「見たよ、満月を。すごく綺麗だった。……あの人がはつきりと見えた」

どこか熱に浮かされたような声にクラトは眉をひそめる。

「『あの人』って誰だよ」

「……」

「だんまりか。ったく、つくづくお前らはよく分かんねえもんに会

おうとするんだな」

「あのー、お茶？　が入りました」

盆の上に湯呑みを乗せたニーナが何故か疑問系の言葉と共に居間へ入って来た。

ほこほこと白い湯気を立てる緑茶を甲斐甲斐しく各人に手渡していく。湯呑みは四つしか無いので、自分は飲まないつもりであった。

クラトも話を切り上げて、差し出された湯呑みを受け取る。

ふと手と手が重なり合った。

「あ……すみません」

「別に。悪いな、茶入れてもらって」

「いえ、貴重な体験をさせてもらいました」

「はあ？　なんだそりゃ」

ソチャですが……と、どこで知ったのか茶を出す際の決まり文句を言うニーナを笑って眺め、クラトはずずと一口啜った。

かっと目を見開く。

「につがー!!」

「こりゃ苦いねえ」

「……に、苦い……」

「おいしくない」

グサドサクツと四方向からニーナに何かが刺さった。

最後のカンナの一言が一番効いたらしく、よろりと膝をついて「そ、そんな」と衝撃を受けているようだ。

「薬草を煮詰める時と同じくらい心を込めたはずなのですが……」

「いや、絶対えそれが原因だろ」

しょんぼりと眉を下げる少女がおかしかったのか、カンナがきやらきやらと笑い出した。

ぱちぱちと囲炉裏の火も踊り、和やかな空気が居間の中を満たしていく。

そこには当初の重苦しい雰囲気は微塵も無かった。

この少女はいつだってそつと幸せを運んでくる。そう思い、濃すぎる色をした緑茶を見下ろしたクラトは、次の瞬間込み上げてきた笑みを止めることができなかった。

「ニーナ」

「はい……」

「見ろ」

差し出した湯呑みを覗き込んだ異国の少女はますます項垂れた。

「い、異物混入ですか？」

「違う。これは茶柱。滅多に起こんねえから吉兆の現れって言われてるやつだ」

「ええ！？　すごいじゃないですか！　クラトさん！」

「え、俺？　まあ縁起が良いからお前も飲んどけ」

ニーナがかちんと硬直する。

苦い緑茶を飲むのをためらっているのだろうか。心なしか頬が赤く染まっているのは恐らく囲炉裏の火に当たりすぎたせいだろう。

ざあ、と雨足が急に強くなった。

——さて。

「ライヒ、カンナ。遅くなったがこの茶を入れるのが下手な奴はニーナ・フィカス。西大陸から来た旅人で、さっきも言ったが俺の命の恩人。……そして魔力を直視できる『慧眼者』だ。だからお前達が普通と違うのは、一目で分かる」

兄妹が湯呑みを持ったまま驚いたように互いに顔を見合わせる。ぎゅ、とカンナが兄の腕を掴んだ。

「とりあえず、ライヒ。お前の顔をニーナに見せてくれねえか？
それが一番手っ取り早いだろ」

「……いいよ」

緊張したように答えた少年は湯呑みを静かに床に置くと、すうと顔に手を乗せた。

彼はいつも長い前髪で顔を覆い、常に俯きがちに生活している。
里の子供たちには「臆病者」と虐められ物陰でよく涙をこぼしていた。じゃあなんで顔を隠すんだよ、とクラトが苛々と尋ねたのは初めて会った時の事だ。

ライヒがゆつくりと前髪を掻き分け、その顔を露にする。

「……っ！」

絶句する気配。

クラトは腕を伸ばしカンナの頭をばんばんと叩きながら、ニーナに向き直った。

口元に手をやって、緑の瞳を限界まで見開いている。
無理もないな、と思う。

「こいつらがロウザと一緒に山向こうへ行く理由はな、髪と目の色を変えるためなんだ。ロウザの知り合いの呪術師が年に数回、そうやって『人間らしく』してくれるんだとよ。里の連中はもちろん知らない。知ったら何が起こるかなんて考えたくもねえ」

人間というものは自分達の平和を脅かす存在を許容しない。
異端は速やかに排除される。

平和を謳うその唇で陰惨たる笑みを懲悪の名の元に浮かべるだろう。

クラトには吐き気がするほどそれが分かるのだ。

「こいつらの本来の髪色は白、瞳は緋色……人と魔の異血を合わせてこの世に生まれ落ちた」

——凶血の稀半妖だ。

ざあざあと雨粒が激しく屋根を叩く。

まるで罪人を責め立てるようだ。

「そしてライヒは『人』よりも『魔』の血が濃い。どんなに色を変えたとしてもこの顔を持つ限り誤魔化すことはできねえ」

クラトは少年の白い面を見下ろし、一瞬だけ息を止めた。

背筋に寒気が走る。

頭で理解していても決して見慣れることなど出来ない。

人の枠を越え、見る者に忌避すら覚えさせるその——凄絶たる美貌に。

「……『災殃の罪魁』」

ふと少女が漏らした異国の言葉は、誰の耳に入ることも無く雨音に掻き消えた。

崩れゆく空から絶えることなく雨は滴り落ちる。
転がりだした水は戻せない。

涙がそうであるように。
遠雷の音一つ。
まだ見ぬ暗雲を貫いた。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 3 (前書き)

時系列 7 - 2 続き。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 3

月がとても綺麗だったから。
私は哀しくなった。

一人で見上げるには、あまりにも綺麗な満月だったから。

「私の名前は朔月」

月を背にしてそう名乗ると、妹を抱きかかえた少年——ライヒは身じろぎをした。

前髪のせいで表情は全くと言っていいほど分からない。でも私には、何となく彼が嬉しそうに笑ったような気がした。

「いい、名前ですね」

ありがちな言葉だと思った。と同時に、少年が本心からそう言っていることが分かった。

根拠なんて無い。でも彼は嘘を付いていないと妙に確信できた。

「そう思う?」

「はい」

窺うように聞き返すと、間髪を容れず返事が返ってきた。

逡巡すら無い、揺るぎない肯定。

それは曖昧な私の何かを確実に救うものだった。

「そっか」

安心して笑った途端、ぽろりと一つ水滴が転がる。

ああそういえば涙腺が壊れてたんだっけ。忘れてた。

ごしごしと袂で目元を拭ってから、すーはーと深呼吸する。夜の空気をいくつか吐息に変えた後、私はうんと大きく頷いた。

「私もこの名前、良いと思うよ」

改めて考えれば、今の私にはよく似合う名前だ。

見えない月——それでも「月」と呼ぶのは、虚ろでもそこに在ると知っているから。

見えなくても、私はここにいます。

「……はじまりとおわりの名前ですね」

「始まりと終わり？」

ぼそりと呟かれた言葉がうまく飲み込めなくて問い返すと、ライヒは少し口ごもった後遠慮がちに話し始めた。

「月は、朔の月から少しずつ満ちていきます。どんどん膨らんで満月になって……それから少しずつ欠けていきます。最後の一欠けが空から消えた時、また朔の月が現れる。だから、『はじまりとおわりの名前』です」

なるほど。つまり「朔に始まり、朔に終わる」ということか。

うーん、その発想は無かった。素敵な考え方だ。

へらと笑うと、ライヒはまるで喋り過ぎたことを恥じ入るように深く俯いてしまった。随分と奥ゆかしい男の子だな。

言いたいことを明け透けに言う奴なんて、世の中には山ほどいる。私もどちらかと言えばそっちの部類の人間だ。ぽんぽんと言葉を放り出してしまおう。

でも、放つはずだった言葉をその指に握り締めて、再び胸のうちにしまい込んでしまう人間がいることも知っている。自分と他者との間に目に見えない隔たりを作ってしまう人、誰にも気付かれないような心の背負い方をしている人だ。それをただ「不器用」だとか「臆病」だと言い切るには少しためらいがある。

ああ、この少年はそういう子なのかもしれないなと思った。一体どれだけの物をその心に背負っているんだろう。

あんな静かな泣き方を覚えるほどに。

……でも、まあとりあえず今は。

「カナナちゃん、見つかつて良かったね」

最初の驚きと混乱の波が引くと、私の心は不思議なくらい穏やかになっていた。

もっとテンションが上がってもおかしくないはずなのに、まるで悟りを開いた修行僧のような儼かな気分だ。このまま無我の境地に行けそうな気がする。座禅でも組もうかな。

「でも、ここにいと危ないから早く里に帰った方がいいよ」

冷静になった私は少年にそうアドバイスしてみた。

最近忘れがちになるけれど、ここは結構危険な場所なのだ。だてに山頂で夜な夜な獣の遠吠えを聞いていない。申し訳ないが、かくよく追いついてあげられるほど私は強くはないのだ。一人で走って逃げる分には楽勝だけど。

……あれ、そういえば山の主はどこにいるのだろう。

ふと疑問に思ってきたきょろと周囲を見回す。ライヒの前に現れたくなさそうだったとはいえ、あれだけカナナちゃんを気にかけていたのだ。近くに潜伏していることは確かかなはず。もしかして、「隠形」とやらで姿を隠しているのだろうか。

「あの、僕がここにいたら、お気を悪くされますか……？」

ライヒがおずおずと聞いてくる。

何を馬鹿な、そんなことナッシングだよ。むしろウェルカムである。めんそーれである。

私だってもう少し会話をしてみたい。どうして私が見えるのとか、里のこととか、その他もろもろを根掘り葉掘り小一時間くらいかけて詳しくつぶさに聞いてみたい。ぶっちゃけ、会話というものに飢えている。感情に感情を返してくれる誰かが欲しい。……そりゃもう切実に。

でもそれは全部こっちの都合だ。

ちゃんと帰る場所があつて、そしてそこへ帰れるのならば、私はいつまでも彼らをここに引き留めてちゃいけない。

二人に家族がいなくても心配する人は必ずいるだろう。

だから私は、まだここにいてよと言う代わりに朗らかに笑つてみせた。

「よかつたら明るい時にまた会いに来てよ。麓の近くまでなら降りられるけど、私はこの山から外には出られないんだ」

本当にね、行動制限もいいところだよ。地縛霊も真つ青だよ。

おかげで朔月山に関しては詳しくなった。問題なのは、私の世間知らずが日に日に深刻化しているということだ。そうだ、山の主だつたら何か情報を教えてくれないだろうか。いや、その代わりに一発芸でもしろとか言われたらどうしよう。神様は人間に無茶ぶりするのが好きだもんなあ。

今後の事を真剣に考え込んでいたら、不意にライヒが顔を上げた。

「あの貴女は……貴女は、人なんですか。それとも——」

物の怪なんですか

月明かりに落とされた声は少しだけ震えているようだった。

——人か否か？

私は無言で地面を軽く蹴り、袂を翻しながら少年との距離をぐっ

と縮めた。

突然ふわりと目の前にやってきた私に驚いたのか、ライヒはのけ反るように半歩後ろへ下がった。

……おお、本当に私が「見えてる」反応だ。ちょっと嬉しい。満月はまだ煌々と天に君臨している。

その光に照らされた少年の髪が異様に白く輝いて、幻想的だった。

「——どっちに見える？」

ごめん。

誰かの目を通してじゃないと、私はもう、自分の姿すら知ることができないんだ。

きっぱりと即答したいのに、確固たる自信が無い。変なんだ。体も心もずっとふわふわしている。ごめん、だから教えて。嘘でもいい。答えが欲しい。

「……どちらにも、見えません」

ライヒが呟いた途端、急に強い風が吹き上げてきた。

緋袴の裾がばたばたとしたためく。私は乱れる髪を押さえて目の前の少年に目をやった。

最初に見えたのは、弧を描く赤い唇だった。

ついで鼻梁、頬、瞳が順に露わになる。

こちらを真っ直ぐに見上げてくる少年と視線が絡まる。ざあっと風が通り過ぎた後、再びはらりと前髪が降りてその全ては覆い隠された。

でも私の網膜には今見た顔が鮮烈に灼き付いていた。

無垢と淫靡、円熟と頹廢、戦慄と恍惚。

ありとあらゆる矛盾を凌駕するような、一点の瑕疵すら無い容貌。それは単に美しいと言うには、余りにも桁が外れた美しさ。

目が、奪われた。

「僕には、貴女が——」

そこまで言ったところで、前触れ無くライヒの体が膝から崩れ落ちた。

はっと我に返った私は慌てて手を伸ばし、彼の腕にいる少女ごと支えた。すんでのところであまくキャッチしたは良いものの、二人分の重みに耐え切れず結局はたんと倒れてしまふ。ぐえ。私弱え！子供二人の下敷きになり、わたわたと地面の上でもがいているとふと影が落ちた。

見上げた先にあつたのは、狐のお面だった。

『どっちに見えるう？ だつてさ。笑っちゃうねえその言い方、すつごく卑怯で僕は大好き』

そう言つて、げらげらと癪に障る笑い声を上げるお面を被った少年。

裸足の足。

灰色の髪。

浅葱色の甚平っぽい服。

まさか。

「エ、エコー？」

私は突然現れた狐面の少年を寝転がったまま凝視した。背後に浮かぶのは満月。そろそろ雲に隠れそうだ。

灰色の少年はひよいと軽い身のこなしでしゃがみ込むと、私の首筋に迷い無くその手を伸ばした。……冷たい。

『困ってたんだよねえ、ここんとこ随分と好き放題してくれてたみたいで。姿も魔力も見えないから手え出せないしさあ、御大の留守中はずっと隠形しとかなきゃいけないしさあ。本当、我慢おんたいって僕大嫌い、と吐き捨てるような言葉と共にぐつと小さな手に力が籠った。

容赦なく首が絞まる。

『でも、よく考えたら不可侵の掟はあんたには当てはまらないかなあと思つてさ。ねえ、サクヅキサマ？』

くすくすと酷薄な笑いが耳元を過ぎつたけれど、私は息が詰まつてそれどころじゃない。喉に食い込む手を外そうと無我夢中で抵抗する。でも、腕に抱えたライヒとカンナちゃんが重石になって上手く身動きできない。

駄目だ、手が、外れない。握力が強過ぎる。

視界が霞んできた。

もう、息が限界――。

「ひゅっ、げほっ、ごほっ……！」

唐突に、冷たい手の感触が首から離れていった。

一気に肺になだれ込む空気に一頻り噎せ返り、私は荒く肩を揺らした。げほげほと何度か咳き込みながら地面に手を付き、半身を起こす。

生理的な涙に滲む視界の中で、新たに一人の人物が現れていた。

『おい、何で邪魔立てすんだよ……っておい！？ ちょっと待てっ

て！ うわっ」

相手は無言のまま狐面少年の襟首をぐいと引き上げる。腕を掴まれ前のめりになったところで狐面少年が狼狽の声を上げた。が、時既に遅し。

ふわりと少年の体が宙を舞った。裸足の足が一瞬だけ空に放り出される。

そして。

だああああん……！！

き、決まっただあああ一本おおん！！

流れるような動作、一切の無駄無し文句無し！ これは素晴らしい一本背負いです！！ って私何で実況してんだよ！！

「痛ってええええ！ お前、いきなり何すんだよ！ このすつとこどつこい！ 猿真似野郎！！」

「だ、大丈夫？」

ぎゃあぎゃあとけたたましく喚き散らす灰色少年に毒気を抜かれ、私はつい声をかけてしまった。いや本当は「けっザマーミロこのタコ助が。おとといきやがれふあつきゅー」くらい言ってやりたかったけど。何か無茶苦茶痛そうな音がしたので、保留にしておこう。

鮮やかに少年を撃退してくれた人物は自分の襟の乱れを一度直した後、すつと私に向き直った。

こてんと小首を傾げる。

「大丈夫？」

「……エコー！」

そこには元祖灰色少年が無表情で立っていた。

エコーは裸足の足でてくと私に近寄ってくると、ひよいとしゃがみ込んだ。さつきと似たような展開だけど、今度はよしよしというように私の首筋を撫でてくる小さな手。温かい。

「助けてくれてありがとうエコー。あ、あと今日川に置いていってごめんね！」

お礼と謝罪に頭を下げると、灰色の瞳がぱちぱちと瞬いた。

無表情のまま首を横に振る。

そして昼とは逆に、そつと私の頭を撫でてきた。私の真似をしているのか、無表情なのにせつせと撫でてくる。ちよつと機械的な動作が何だか微笑ましい。

……ん？　ということは、エコーも今私が見えてる？

『おい、音の。どけよ、今からそいつの臓腑を引き摺りだして僕が喰ってやるからさあ』

「何だと！？　断る！」

『はあ！？　あんたには聞いてない！』

『断る』

『お前も一々真似るな！！　いいからどけって言ってるだろ！』

キレたり突っ込んだり忙しい少年だなあと想着視線を上げた私は、次の瞬間ぽかんと口を開けた。狐のお面は一本背負いされた拍子に取れていたらしい。

その顔は、目の前にいる灰色少年と瓜二つだった。

「……双子？　え、あの子と兄弟なのエコー？」

灰色少年は私の問いに再びこてんと首を傾けた後、にゅつと唇を突き出した。

ひゅーひゅーと掠れた音が二回漏れる。

「あ、違うんだ。うん、ていうか口笛練習しようね。よしよし偉い偉い」

何だよもうこの子は可愛いな。

摩擦熱出るくらい撫でまわしてもいいですか。

『音の！……ちっ、名で縛られて絆されたか』

「違う。私がエコーに絆されたんだよ。この子は何も悪くない」

『へええゝ悪くない、ねえ。自分の非を認めるんだ。じゃ、僕があんたを喰っても文句は言うなよ……！』

言うが早いか狐面少年が獰猛な身のこなしで襲い掛かってきた。

エコーが素早く立ち上がり応戦しようと身構える。

動の少年と、静の少年が月の下で相對する。

あわやぶつかり合うと、思ったその時だ。

『叱。双方止めよ』

ぴたりとエコーの動きが止まった。

意外だったのは、狐面少年の方も瞬時に動きを止めたことだった。二人して迷うことなく大木の方を振り仰いだので、私もつられてそちらを見る。

視線を上げ、枝葉の奥まで目を凝らし、そこで初めて私はこれが普通の木ではないことに気が付いた。太い幹が途中で大きく湾曲して二つに分岐し、上の方で再び一つになっている。まるで窓のようになっているのだ。——そしてその窓の中に、悠然と身を収めている大きな生き物がいた。

そ、そんな所にいらっしゃったのですか。

リアル高みの見物だったんですね……。

『険。天の、そう騒ぐな。我の愛子が目を覚ます』

低い低い、唸り声が落ちてくる。

エコーにそっくりの少年が顔を歪めて叫んだ。

『し、しかし御大！ 恐れながら申し上げます。こいつは御大の留

守を狙って山神の名を騙り、不可侵の掟を破り神薬花を人間の手に渡しました。しかも今、何と名乗ったかお聞きになられたでしょう……あろうことか御大の御前で朔月など！』

燃えるような憎しみを宿した灰色の瞳が、私を貫く。

『力も無い癖に虚飾と欺瞞を振りかざす愚か者です！ 反吐が出そうだ！ 御大を煩わせる前に僕が五体を八つ裂きにして……』

『憤。黙れ、それ以上口を開かば我がぬしを喰らうてやる』

『な、何故ですか！？ 御大っ！』

『——劣。愚かな。二度は言わぬぞ、天の』

四本の尻尾がぶわりと膨らむ。

途轍もない圧迫感が弾けるように周囲に広がった。

私は意識の無いライヒとすやすや眠るカンナちゃんをぎゅっと抱き締めてへたり込んだ。空気に飲まれて動けないのか、少年の目と言葉が突き刺さって動けないのか、分からない。

ざわりと、無数の枝葉が山の主に呼応するように妖しく揺れた。

——はっと気が付けば、大木の周りは大小の蠢く影で満たされていた。

木の枝にぶら下がる者、腰掛ける者。

太い根を枕にして寝そべる者、気怠げに幹にもたれかかっている者。

始めからここに居たのかと思うくらい自然に、そして一瞬のうちにその集団は現れた。

慄き息を呑む私を山の主が見下ろす。

ついと瞳が三日月に細まった。

『訊。臆したか朔月、先刻の威勢は何処へ遣った？』

『あ、の……』

『解。案ずるな、こ奴等に手出しはさせぬ故。全くぬしは熟、面白

い。自我無き者に容易く名を与え、契約無く従わせる。忌子の方はこの先如何なるか興味深いな。――さて、ぬしは何れの因果と機縁を以て此処へ現じたのやら』

そう言いながら大狐が尻尾を一振りすると、天狗の様な格好をした人が私の元へやって来てライヒとカンナちゃんを抱き上げた。焦って手を伸ばしたけれど、間に合わなかった。

『慎。鴉の、愛子の眠りを妨げぬ様。闇を渡り、疾く寢床へ帰せ』
――御意』

ばさり、と一對の黒い羽が天狗の背中から生えた。

山の主に向かつて一礼すると、子供二人を腕に抱えたまま空高く飛翔する。私はただ呆然と、夜空へ飛び去って行くその影を見送ることしかできなかった。

というか、ちょっと待って。

今の人、か、顔にカラスの嘴が……。

『笑。何を呆けている。口を閉じよ、朔月』

「……あ、私が、見えているんですか」

『是。満ち月の皓い月影しろが地に有れば、ぬしは形を得る理らしいな』
「満月の時だけ？」

『枢。闇を抱く者は皆、月の憐憫を甘受せねばならぬ。故に今ぬしの姿は艶やかに形を成している。のう、漆黒と白緋を纏う者よ』

大狐が唸った途端、闇の帳が落ちた。

私の意識が完全に溶けきる前。

お休みを言うように小さな手が頭を撫でてくれた気がした。

この夜の私はまだ知らなかった。
始まりが終わりへ向かい、終わりが始まりだしたことを。

哀しくなつたのは月が綺麗だったから。
一人で見上げるには、あまりにも。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 4

うつすらと靄がかかった世界で、私はノイズを拾った。

ざらついた音の高低は、次第に三味線の音色へと変わる。

重いような、軽いような、楽しいような、悲しいような、そんな独特の響きだ。

べけべんべんとざつくばらんに掻き鳴らされる。

その雑な弾き方がかえって、演奏者の感情ではなく絃そのものの哀歡を訴えかけているような気がした。切実な音色と、そっけない演奏のアンバランスさが奇妙なほど馴染んでいる。

ふわりとお酒の匂いがかすかに漂い、話し声や雑音がくぐもって聞こえた。

まるで透明なガラスの壁を一枚隔てているように、全ての気配が遠い。

耳を澄ますと更に遠くで、しとしとと水音がした。

——ああ、雨が降ってきたんだ……。

うつらうつらしていると、ふと旋律に唄が乗った。

息し辛いと苦しいと

憂き世別れ彼 ああ貴方

巢喰う殺しにや 醒まし酔い合う

浅まし嗤うわ 狂狂と

死ぬ気で喘げば 夜も終すがら

生き辛いと狂い問う

気弱枯れ枯れ ああ貴方

救う頃にや 彷徨い逢う朝
廻らう輪 くるくると
今際のきわにや 世に縊^{すが}る

しゃがれ具合が耳に心地良いハスキーボイスだ。ちょっと癖があるってかっこいい。

哀しげなのにどこか艶っぽく感じるのは女の人の声だからだろうか。

ちよつと歌詞が怖いけど、なんとなく恋唄のような気がする。段々頭がはつきりとしてきた。とりあえず起きるか、ようやく私は重い瞼をこじ開けた。

……何だこりゃ。

ぱちりと目を開けて状況確認をしてみると、ふかふかの毛が視界一杯に埋まっていた。

ポリウム感たつぷりの毛並みが体をぐるりと360度、まるで巻き寿司のように私を包んでいる。頭からつま先まで完全包囲、恵方巻き状態。

息苦しくはないし、ふかふかぬくぬくだけど、ぶっちゃけ何も見えない。

抜け出そうともぞもぞ身じろぎしたのが分かったのか、顔の上にある毛がのっそりと動いた。

突然ぱあつと視界が明るくなる。近くで松明が何かを焚いているのかもしれない。

うわつと眉根を寄せて何度かぱちと瞬いていると、眩しさは段々薄れてゆき目が明るさに慣れてきた。

やれやれと目をこすり、周囲を確認しようとした矢先……私はギシリと凝固した。

頭上でゴロゴロと低い雷鳴が轟く。

——いや違う。これは唸り声だ。背中に嫌な予感が這い上がってくる。

ゴクリと唾を飲み込んだ瞬間、ふうつと生温かい風が頬にかかった。

『漸。起きたか、朔月』

そつと視線を上げた私は、キィアアアと絹を引き裂かんばかりの悲鳴を喉から絞り……出さないよう死に物狂いで耐えた。耐えに耐えた。マックス耐えた。

血の川を舐めてきたかのように、ぬらりと濡れ光る真つ赤な舌。獲物の肉を食い千切り、骨を噛み砕くだろう鋭い牙。

黒い鼻先からすらりと伸びる傾斜の上には、青白い双眸が二つ爛々と輝いている。身震いするほどの冷たさが細い瞳孔に宿り、その瞳の中心を真つ直ぐに貫いていた。

あ、終わった。

ぼくはもうだめだ、あばよパトラッシュ。

『はて、まだ寝ているのか。苛。見えぬというのは存外不便なものだ。眼まなこが開かれているか否かさえ窺い知れぬ』

無言で魂を飛ばす私を尻尾にくるんと巻いたまま、大狐様は不満気に呟いた。

余った尻尾がぼすんと乱暴に床を叩く。床がみしぎしつと悲痛な軋みを上げ、私の脳裏には高速エンドロールが流れ出した。もはや人生の最終回である。パトラッシュ、おれのしかばねをこえていけ……。

と、焦れたような動作でぐんつと白く豊かな胸元（毛的な意味で）

に引き寄せられ、私はたまらずひいと白目を剥いた。心頭滅却。もう蟹になろう蟹に。ぶくぶくぶく。

『ちつ。そんな些末事で御大の気を煩わせるなんて……無きに等しいとはいえ、御大に結界まで張らせてのうのうと……しかも僕でも恐れ多くて触れられない尻尾に易々と……』

私の精神が崩壊の一途をたどっていると、ふと誰かの声がした。やっぱり壁の向こう側から聞こえてくるような感じだ。

『御大。このまま起きないのであれば、いつそそいつの目玉を刳り抜いてみてはいかがでしょう？ いえ、ここは心の臓を引き裂いてやりましょう。穩便に』

穩便じゃねええええつ！！

私はがばつと跳ね起き、そのまま体当たりする勢いで山の主に飛びついた。

油断していたのか、尻尾がびっくりしたようにもさりと揺れる。

「おおおはようございます！！ちゃんと起きてます！ ばつちり起きてます。すっごい目見開いてます。もう充血しきってます！」

首にぶら下がり半泣きでそう訴えると、大狐はちよつと動きを止めた後、鼻先にぐうつと皺を寄せた。牙が剥きだしになって、凄みのある獣スマイルの出来上がり。

ちよつと尋常じゃない迫力である。

赤茶色の体の曲線は惚れ惚れするほど優美なのに、至近距離で見るともはや狐の域を超えた猛獣的部分がそれを相殺して余りあった。ドキドキと激しく胸の鼓動が高鳴る。もちろん恐怖的な意味でだ。何より身に纏うこのラスボス級オーラ……「逃げる」コマンドが

あつたら今すぐ連打したい。

あ。

でも耳の中の毛は真つ白でほわほわしてる。

それに胸の毛は、もふわつと柔らかい。ふむ。

……くっそ、ちよつと和んじやつたよ！

なんだかんだ言つて和み要素がちよいちよいあるから油断ならんもふ。

『愉。起きていたか朔月。くくく、我の前で狸寝入りとはな。嗚呼ますます口惜しい。ぬしの狼狽える姿はさぞや愉快であるうに。のう、皆の衆』

山の主はそう言つと、私を首にぶら下げたままゆつたりと背後を振り返つた。

その動きに合わせて、松明だと思つていた火がふよふよと「ついて」くる。

伸び縮みしながら燃え踊る淡紅色の炎。

——これ、狐火だ。

呆然とその火の動きを目で追っていると、不意にパリンとガラスが割れるような澄んだ音がした。ハツと我に返つた瞬間、上品な笑い声がふふふと間近で響いた。

『……ほんまにえらいおもしろい子お拾つたんどすなあ、御大？』

べれんと合いの手を入れるように、少しおどけた三味線の音。

それはさつき聞こえた時よりも強く、そしてはつきりと空気を震わせていた。

三味線の音だけではない。くぐもっていた音という音が、突然息を吹き返したように騒がしく耳に聞こえ出したのだ。背の後ろで、

ざわめく気配がする。

私は恐る恐る振り向き、愕然とした。

折れが目立つ格子戸。腐朽した床板。歪んだ窓枠。

——なんで今まで気が付かなかったんだろう。ここは山頂のオンボロ神社の中だ。

この二週間ほどですっかり見慣れきった堂内。

けれどそこには、想像を絶する光景が広がっていた。

……私はまだ夢を見ているんだろうか。

あちらこちらで狐火がゆうつらりと燃え飛び交っている。

壁に、床に、天井に、^{ひし}犇めき躍る異形の影。

享樂に満ちた異様な賑わいと、噓せかえるような酒の匂い。

辺り一面に^{あふ}氾れ沸き立つどんちゃん騒ぎに、雨音が仄暗く響く。

神聖であるはずの場所で繰り広げられるそれは、「人ならざるものの」饗宴だった。

百鬼夜行、魑魅魍魎。

そんな言葉が頭の中をぐるぐる駆け巡る。

『否。我は朔月を拾って来た訳では無い』

言葉を失くす私の頭上で、山の主が鷹揚に唸った。

『ええ分かってますわあ。なんでもその子、人間さんのために色々
と働いとつたらしおすなあ？ きょうび、人間さん達がきょうさん
参拝しに来はるなんて、一体どないなってるんやろか思ってた
わあ』

のんびりとした口調で答えた人物に、私は呆然と目を向けた。
ちよんに乗った白い鼻と愛嬌のあるつぶらな瞳。

顔の右側はオレンジ色、左側は黒ときっぱり二色に分かれている。
ぱつと咲いた大ぶりの花模様が華やかな薄紅色の着物を着こなし、
膝に三味線を抱え、そして銀杏形のバチを持ったその手には……丸
い肉球があつた。

『興。私の留守中の事、詳らかにせねばな。朔月に直に問い質すも
良いが……百目はまだ参らぬのか』

『百々目鬼はんどすかあ？ 蜘蛛はん呼びに滝に行かれましたわ
あ。蜘蛛はん身支度にえらい時間かけはるお人やさかい、ようちび
つとかかるでっしゃるなあ。かんにんしておくれやす、御大』

やけに人間臭い仕草でぺこりと下げた頭の上に、ぴこぴこと耳。
申し訳無さそうにくねっている尻尾は二本に見える。

そう、二本である。残像ではない。

……猫又だ。

『人間さんのためだってえ？ うわ。面白くって虫唾が走るね、そ
れ』

嘲るような口調で大狐と猫又の会話を遮ったのは、さつきも聞こ
えた声だ。

はつと目をやると、昨夜「天の」と呼ばれていた少年がこちらを
見ている。

狐の面を顔の横にずらし、酷薄そうな笑みを猫又に向けている。
それから山の主を向くと一転、年相応の笑顔をにこりと浮かべた。
それだけ見るとあどけなくて可愛い。

『御大つ、やはり目玉を刳り抜くなんて生ぬるいですね。そのぎゃあぎゃあ五月蠅くて得体の知れない小娘、今すぐ僕が喉を掻き切つてやりますよ』

ちよつとその辺散歩してくる、という軽いノリで恐ろしい台詞を言いだした。

灰色の瞳が昨夜見た時よりも、嗜虐の色に染まっている。首を絞められた時の苦しさを思い出し、私は思わず山の主に回した腕にぎゅつと力を込めた。

そんな私に山の主は何も言わず、ただその大きな尻尾でぼすんぼすんと背を叩いてくる。ぐふ。

うん、怖いけどやっぱり山の主は優しい。怖いけど。

狐面少年の言葉に答えたのは、どんちゃん騒ぎの中で一番目立つ大きな生き物だった。

『つかー、阿呆かテメーは！ 御大の話聞いてたのかよ！？ せつかく生きが良さそうな面白えのが転がり込んで来たつてえのに、簡単に殺しちまったらつまんねえだろうがよ、え？』

盃の酒をぐびりと呷り、舌舐めずりしながら太く濁った声を野次のように飛ばしてくる。

牛——いや、鬼？

丸出しの肩や腕に盛り上がる異常な筋肉の山は、まさしく「鬼」の体躯である。顔は明らかに牛だ。しかもホルスタイン系じゃなくてバッファロー系。戦国武将の兜に付いているような異常に長くて湾曲した角が、側頭部から生えている。あれで刺されたら即死は免れないだろう。

きつとマタドールもマントをかなぐり捨てて逃げるに違いない。つ、強そう。しかも今、「簡単にほにやらら」とか聞こえた気がするが気にはしてはだめだ。

怒らせでもしたら絶対にタダでは済まない。
下手に。

そう、こういう相手には下手に出るのが一番……

『あのさあ僕、御大に話しかけてるんだけど。見てて分かんないかなあ。頭も牛並みにとろいの？ それにいい加減酒臭いから大人しく洞窟おうちにすっ込んでてくれないかなあ？ 無駄に図体でかいし、角は邪魔だし、すっごく目障り』

ちよおおおおああアウトおおお！！

『あゝ あ！？ アんだとこら頭握り潰されてえのかテメー！』

思ったとおり激昂する相手——しかも自分より何倍も巨大な生き物——を見上げた狐面少年は、しかしその剣幕にひるむどころか軽くせせら笑ったのである。完全に小馬鹿にしきっている。絶対わざとやって楽しんでるよこの子。

『やだなあ。自分の顔が潰れたみたいだからって僻まないでよ』

『……ッ！ ブッ殺す！！』

『ぶっころす』

『あははは、ほらあ音のが真似するから変な言葉使わないでくれるかなあ？』

『このクソ天邪鬼がッ！！ 殺してやる！！』

牛頭さん（なんとなくさん付け）が猛り狂った闘牛のように一声吼えたと、鉤爪の付いた指をぶんと一閃させた。それをひらりと躲した狐面少年は突き出された太い腕を足場にして、とんと天井までジャンプする。私と同じくらい身軽な動きだ。あの子もふわふわ（？）体質なのか。

落ちる勢いに乗って、狐面少年が踵落としを繰り出す。速い。

が、スピードにのった鋭い攻撃をあつさりと避けた牛頭さんは、その鬼のような手でむんずと少年の足首を掴み上げると、無造作に引つ張りあげた。押し折りそうなほどギリギリと力を込めているのがよく分かる。しゅうしゅうと荒い鼻息。怒りと興奮で、物凄い形相だ。

ところが宙吊りになった狐面少年は痛がるそぶりすら見せず、それどころかむしろ楽しい動きでびよんと上半身を跳ね上げたかと思うと、体をぐるっと横に捻った。その反動を使い、もう一方の足で鮮やかな回し蹴り。今度は綺麗に決まった。

足首が解放され、間合いをとる狐面少年。近くにいた小妖怪がわらわら逃げる。

よろめいた牛頭さんは足元にあった皿やら盃を蹴散らし、体勢を整えようと角を振り乱している。

——何だこの少年漫画的バトル。

周囲を見渡すと、その辺りだけ阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

なまじ妖怪っぽい生き物が多いから、まさにそんな感じの光景である。

そんな中、胡坐をかいてぼーっと無表情に戦闘を観戦している強者がいた。

両手が後ろで縛られていて、見るからに動き辛そうな体勢なのに、飛んでくる盃や瓢箪や皿を見事によけきっている。しかも必要最小限の動きで。そして無表情。

こやつ、できる！

……じゃなくて、さすがウチの子！でもなくて。落ち着け私。すー、はー。

よし。

ななななんて縛られちゃってんのエコー！？　そそ、そんな野蛮なバトル見ちゃだめです！！

こっち、こっちに気付いてヘイルック！ ルックミー！

あ、今は私見えないんだっけ！？

ならばこちらから近づかねば！ と、私は山の主の下から一歩足を踏み出した。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 5

『訝。何処へゆく朔月』

「うおあっ」

エコー救出ならず。

息巻いた割にはあっさりと阻止されてしまった。

山の主が私の緋袴の帯を素早く啜えてきたのだ。転倒こそ免れたけれど、前につんのめって思いきり緊急停止する。

ぐぬぬ何のこれしき！ 待ってるエコー！ そんな縄私がぶつちぎってやらあ！

毎朝滝壺で鍛えた得意の泳ぎでなんとか振り切ろうと、私は手足をバタつかせてみた。――が、山の主微動だにせず。動かざること山の如し。余裕すら匂わせる。

な……ばかな、結構本気でクロールしたのに。ならば平泳ぎで脱出してやる！

なおも私がじたばたともがこうとすると、獲物の小生意気な抵抗が煩わしくなったのか、大狐様は羽虫か何かを摘み上げるように私をひよいと持ち上げてしまった。宙ぶらりんである。もはや為す術無し。

エアクロール破れたり。

すまねえエコー、だが私は頑張った。

だらーんと手足をぶら下げるといふ情けない格好で私はがっくりと頂垂れた。何だろうこの敗北感。無力過ぎる。クレインゲームのぬいぐるみか私は。

貴重なのか間抜けなのかよく分からない状況にやるせなさを感じていると、苛立ち最高潮といったダミ声がビリビリと空気を震わせ

た。

『おいこらクソ天邪鬼、ちよろちよろ逃げ回ってんじゃねーぞデメ
エ……』

口調がほぼ恫喝に近い。

あれだ、頬に傷がある部類の人の話し方だ。私は宙ぶらりんのままピキンと固まってしまった。

神社内に不穏な空気がうねうねと流れ、雨音がザーっと屋根を打った。

どうやら場の流れ的に、狐面少年と牛頭さんが第二ラウンドを開始するらしい。ただけ鬨いが好きなんだ。魑魅魍魎の宴がだんだん格闘技会場に化しつつあるぞ。ええいゴングはねえかゴング！

『ハッ。己の鈍重さを僕のせいにしないでくれるかなあ。ああでも仕方ないか。愚図で愚鈍でうすのろなその頭じゃあ何一つ理解できないよね、可哀想な牛鬼^{うしおに}。死ぬ？』

『いい加減にしやがれてんだよこの餓鬼がア！ 鬨り殺しにしてやる！ 糞が、避けんじゃねえッ！！』

あからさまに挑発しながら変則的に飛び跳ねる少年。

あらゆる物を薙ぎ倒しながら彼に飛び掛かっていく巨体。

哄笑と怒号の凄まじい応酬が両者の間で飛び交い、時々打撃音が追加される。なんだか段々「捻くれた牛若丸と当社比五倍の弁慶」という組み合わせに見えてきた。まあ、この場合「牛」なのは弁慶の方だけ。座布団一枚。

山の主はまだ離してくれなさそうだ。そもそもなんで引き止めるんだらうか。

というか今の山の主、周りから見たら口をぱかっと半開きにしてるようにしか見えないんじゃない……。山を統べる者として口半開き

とか大丈夫なのか。威厳とかプライドとか気にしないのか。いいのかそれで。

宙ぶらりんにされてる私が言うなと。わーい、ぷらーん。

この際、視点が高くなったのを利用してやる。

私は半ばやさぐれて神社内をぐるりと見渡してみた。

大小二人が戦闘に興じている側でたむろしている妖怪達。

一見動物に似ている奴が多いけれど、千姿万態、種々雑多。生き物なのか疑問に思うような奇怪な容姿をした奴もいる。まさに異形だ。

泡を食って逃げ惑う者もいれば、鬭いを酒の肴にして一杯ひっかけている者もいるし、全く興味がなさそうにしている者がいる一方で、やんややんやと面白がって囃し立てている野次馬もいた。中には一心不乱に握り飯のようなものを頬張っているゴーイングマイウェイな奴や、この乱痴気騒ぎにも関わらずこくりこくりと舟をこいで寝ているマイペースな奴も存在した。飛ぶ、這う、走る、食う、飲む、消える、笑う、嫉れる、叫ぶ、転がる、跳ねる、寝る。

じ、自由過ぎる……。

ここが教室なら学級崩壊ものだ。

いや学級全壊。

むしろ学校消滅か。試験もなんにもなさそう。

とりあえず、この神社が何故ここまでボロくなったのかよく分かった。絶対に老朽化以前の問題だな。

くっそー、せっかくキリナさんが毎日心を込めてきれいに掃除してくれてるのに。

あああ、そんなに勢いよく蹴ったら床がめり込むだろばかばか！ 酒飲んでないで誰か止める！ 向こうでやれ！ というか全員まとめてキリナさんに謝れ！

心の中で言いたいことを喚き散らした私はそこであれ、と気が付いた。

——そういえば、最近キリナさんを見ていない。

二ーナちゃんと山から降りた日から、キリナさんはぱったり朔月山に来なくなっている。

ええつとあれは一週間以上は前だ。……なんだか急に心配になってきた。

もしや、キリナさんの身に何かあったのだろうか。体調を崩してしまったとか。

風邪か？ もしくは腹痛？ インフルエンザ？

そもそもあのご老体だ。「元気澁刺、エブリデイ登山生活」なんて若者でもそりや厳しいだろう。あんな白髪頭のお婆ちゃんならば尚更のことだ。

きっと、ずっときつかっただろうな。

本当に藁にでも縋りたい思いで、懸命に参拝を続けてきたんだな、キリナさんは。

すると、山に登れなくなったのは今まで積み重ねてきた無理が祟ったからだと考えるのが自然かもしれない。

そこまで考えた後、私はふと思考を裏返した。

……それとも。

クラトくんが元気になったから、もう来る必要はなくなったというのか——？

里の人たちもそうだった。

山を登ってきて、参拝して、お礼を持ってきてくれて……けれど、その後も足を運んでくれた人は一人もいなかった。

願いさえ叶えば、もう「山神様」に用はなくなるということか。

それは別に、悲観することではない。

する資格もない。私だってそうなのだ。

「明日晴れにしてください」とか「試験に合格させてください」とか、真剣に神頼みをしたことがあったけれど、いざ事が上手く運んでしまえばあつという間に忘れてしまった。あの時はあんなに必死だったのに。

簡単な話だ。喉元過ぎれば熱さ忘れる。熱かったという記憶は残っても、熱さそのものは時間がたてば消えるのだから。

——信じたい時に信じたいものを信じただけのこと。
それくらいが人間にはちょうどいいんだ。信仰であれ、お金であれ、愛情であれ、ゆきすぎたものは人を狂わせるから。ここの人達の宗教観はいまいちよく分からないけれど、それでいいと思う。

それに私は感謝され続けたくて「恩返し」をやっていたわけではないのだ。

空いた手で何かを掴むために、ここで生きる縁よすがが欲しくて。

したいようにやってきた。

その癖、結果が気に入らないからといって誰かを恨んだり文句を言ったりするのは勝手過ぎるだろう。

まあ里の人たちだって生活があるからそう山には来れないだろうし。

たまたまキリナさんの時にクリーンヒットして、その後何件か「恩返し」がうまくいったものだから一時的に「山神様」に熱狂しているだけだ。実は何の力も無い私なんて、一発屋のお笑い芸人のようにたちまち廃れていくに違いなかった。

というか「本物」が現れてしまったんだし。

……あれ、改めて考えたら私ピンチなのか？
やばい存在意義が揺れてきた。

ああそれでも。

キリナさんが会いに来てくれると嬉しいなあ、と思う。

誰かに私の声を聞いてくれるだけで嬉しかった。

少しでも必要としてくれるなら、それだけで十分だったのに。

神様の真似事なんてそう簡単にはできない。欲深くなつていくばかりだ。

狐面少年の言葉がふと耳に蘇る。

——「力も無い癖に虚飾と欺瞞を振りかざす愚か者」

それは、どうしようもないほど真実だった。

山の主に啜えられたまま思考を飛ばしていると、突然牛頭さんが大きくたたらを踏んだ。

狐面少年の足払いを食らったらしい。ぐらりと巨体が傾き、ずうんと地響きを立てて倒れた拍子に、その足元にいた蛙の妖怪が一匹ぷちりと踏み潰された。

それはもう不運にも、ぷちっと。

うわーあっち行つてなくてよかったああ！ 南無三！

ぺちゃんこになった蛙妖怪を思わず同情の眼差しで見ていると、周りから仲間らしき蛙たちが四匹わらわらと集まってきた。慌てふためいた様子で、潰れた蛙妖怪を神社の隅に引き摺って行こうとする。

が、目の焦点が合っている奴が一匹もいないので上手く連携できていない。皆が皆、てんでばらばらの方向へ引つ張っていくせいで、哀れな蛙妖怪その一が更に哀れなことになっている。悲劇だ。

いや、必死なのは分かるけどちょっと落ち着こうよ君たち。

ようやく安全地帯まで辿り着くと、今度はぺちゃんこの体にぶう

「ぷうー」と息を吹き込んで何とか膨らませようと頑張っている。
蛙妖怪その二、その三がゼイゼイ言いながら代わりばんこに息を吹きこみ、横でその四とその五が小さな扇子を振ってえんやこらと応援している。おゝ、どこの世界も友情は美しいなあ。

だが皆目の焦点が合っていないかった。

……コント？　これ。

「あの、こういうのって日常的な風景なんですか？」

そろそろ我慢でなくなっただので山の主を振り返って聞いてみると、『是』と返事が返ってきた。……その好々爺のような表情は何でしょうかね。放任主義ですか、先生。

「そうですか」

私は色々とやるせない気分になりつつ、エコーがいる方を見やっ
た。

相変わらず無表情だ。

が、さっきと違いこっちの方をじいつと凝視している。

え、気付いた！？　気付いてくれたのか！？　私見えないはずなんだけど。

「エコー？」

つい小声で呼びかけてみる。まあこの喧騒の中で聞こえるはずがないか、と思っただけ予想を裏切つてすつくとエコーは立ち上がった。
立った！　エコーが立った！

『くく、あの虚ろなる幽谷響も主おのの声には応こたじるか』

私の背後で山の主がさも愉快そうに言った。私を啜すすえたまま話せるなんて器用ですね。

「ゆづこくきよう？　誰のことですかそれ」

『瞭。ぬしがエコーと呼ばうあの音の妖だ。まあ、あ奴は妖と云う

には歪濁の気が聊か足りぬが。其れもまた幽谷響たる由縁よ。あれは主我を持てぬ木霊こたまの成れの果て、堕ちてなお染まらぬ虚の形骸』
えーっと。

「……すみません。よく分かりません。じゃあエコーの主って誰のことですか？」

山の主がふすりと鼻を鳴らした。ちよつとくすぐつたい。

『痴。其れだけ名を呼び続けておいて未だ気付かぬか。良いか、朔月。ぬしに自覚無くとも契約の片たる楔は疾うにあ奴に穿たれておる。ぬしが真に誓約を欲するならば血を恤めくんでやれ。察するに、あ奴は盲従するぞ』

ぽかーん。

いや、え？ はい？

血とか契約とか何ですかそれは。

話に全然ついていけない。

あといいい加減下ろして欲しくなってきた。喋るたびに牙が動いて怖い。貴重な一張羅に穴が開いたら私はもう裸族になるしかないんだぞ。大変だ。変態だ。

『はーほんまにけもじな事お。魔力も見えへん、姿もあらへん、拳句の果てには名の契りすら知らんのどすか？ こらけつたいな人どすええ』

のんびりと小首を傾げ、ぴこぴこと三角形の耳を動かす三毛猫。

……ぐ、声はハスキーなのに仕草が可愛い。顎撫でたい。

というか猫又に「けつたい」と言われるなんて。私って一体。若干混乱しつつエコーの方を見ると、立ち上がったただけでそれ以上こつちに近づいてはいない。まるで何かに押し留められているかのように、動きたくてもその場から動けないようだった。その証拠に、物凄く前のめりになってこつちを見ている。

どうしたの、ちよつと怖いよエコー。

瞬きくらいしようよエコー。

「あのつ、エコーはなんで縛られているんですか。何か悪さをしたんなら代わりに謝ります！」

だから両手の縄を解いてやって下さい、と言おうとした時。

少年がわざとらしくげらげらと嗤った。さっきの蛙妖怪たちを牛頭さんに投げつけた後、こちらを振り向く。

『あんたのせいだよ、サクヅキサマ』

エコーにそっくりのその顔は、笑っているのに笑っていなかった。御大の留守中はみだりに姿を現し、隠形を解いてはならない。朔月山の掟を破った奴は罰されるのさ。けど、音のにそうさせたのはあんただろ。その上あいつの魂を名で絡げて……ほんと、あんたを今すぐ殺してやりたいなあ』

狐面少年の冷えた笑顔にぞくりとする。

もしかして彼がやたらと好戦的に闘っていたのは、エコーが縛られているということへの苛立ちも含まれていたんじゃないだろうか。本当はその鬱憤を私に向かって晴らしたいけれど、それが出来ない。なぜなら、それを許されていないから……？

ずっと山の主が静かに私を床へ降ろした。その後すぐに尻尾で引き寄せられる。まるで少年の言葉から私を守るかのように、それは殊更に優しくかった。

『明。天の、掟を破った幽谷響に非が有るは明々白白。故に縛して沙汰しておるが、其れが不満とて徒に朔月を咎めるな。赤子の様に無知なる者に我らの道理を押し付けるか？ 其れは下賤な人間と同じ振る舞いぞ』

毛がふわふわと頬を撫でる。

優しくされる理由が、分らない。

少年の冷たい笑みが瓦解した。

『御大、何故そのように庇い立てされるのですか！？……特別に扱われるのはそいつが、そいつが朔月の名を持つ者だからですか！？ だから……ぐっ』

叫ぶ狐面少年の首を掴んだのは昨夜の天狗の人だった。

一瞬にして少年を黙らせると、猛禽類のような瞳をちらりと山の主に向けた。よく見ると、その片目は大きな傷跡に覆われている。

——隻眼の黒い鴉天狗だ。

伶俐そうな低い美声が、鋭い嘴から漏れる。

『御大』

『良い。離してやれ』

『御意』

短いやりとりの後解放された少年は、黙ったまま後ろへ下がった。嫉妬や憎悪を塗り固めたような表情を狐のお面で隠すと、山の主に一礼してから神社の戸を開けて出て行ってしまふ。

外、大雨なのに……と、ずれた思考で私はその小さな背中を見送った。

『けっ、クソ天邪鬼が。決着を着けてから出て行きやがれってえんだ、腑抜け野郎め。ったくそのまま御大に喰われちまえば清々したのによお、邪魔してんじゃねーよ鴉』

『あきまへん。ほんまにもう、やすけないどすええ牛はん。そないに遊びたかったらあんさんも外へ行きよし』

『あゝあ？ 誰があんな餓鬼。おい酒持って来い酒！ 喉渇いちまったじゃねえか』

ピンと張りつめていた空気が緩んで、再び妖怪達がざわめきだした。

けれど私の現実感急激に色褪せていく。

知らぬ間に色々なことが私の周りで渦巻いているんだ。いや、私がかき回している。

ここはお前の居場所じゃないと誰かに大声で詰られているような気がした。

ぼーっとする頭で視線を彷徨わせっていると、ふと壁の隙間に無数の目玉が蠢いていることに気が付いた。今の一部始終をじっと観察しているように神社内に視線を注いでいる。

……なんだろうあれ。

と、目が一つパチリと閉じる。

すると潮が引いて行くように、次から次へと目玉が隙間から消えていった。

『あら、おこしやす。百々目鬼はん』

最後の目がゆっくりと閉じた時、猫又が二つの尻尾を揺らして戸口を見た。

——どどめき？

見ると、いつの間にか女の人が一人神社の引き戸を開けて立っていた。

しとどに濡らした紫色の髪を掻き上げている仕草が、鼻血が出そうなほどに色っぽい。

『……今、ちびすけが走って行った。愚かだな、御大に刃向かうなんて。臍を曲げた？』

『あの子は元々へそ曲がりどすええ。ちよいと拗ねてしもただけでっしやる。蜘蛛はんはどないん？』

『ああ、もう来る。叩き起こされた骨傘ほなからかさが哀れだった』

手足を剥き出しにした身軽そうな姿は、女盗賊のように飄々としている。

波打つ髪が右目を隠し、鼻と口元を黒い布で隠しているのがミス
テリアスな雰囲気に一層拍車をかけていた。

けれど私は惜しげもなく晒されたその色っぽい太もよりも、二
の腕の方に目が釘付けになった。なぜなら彼女の手の甲から二の腕
にかけて、「目」が並んでいたのである。

さっきまで壁の隙間にあつた目玉がびっしりと。

『あ、来た』

セクシーな百々目鬼さんが外へ流し目を送って、ぽつりと言った。
すると、周りの妖怪たちが妙にそわそわと飛び跳ねだす。そそく
さと居住まいを正す者もいれば、忽然と消えてこの場から退散する
者もいる。な、何が来るんだらう。

息を飲んで待っていると、雨の中で下駄の音がした。

石の階段を一段一段、誰かが上ってきているのだ。

からり、ころり……からり、ころり。

やがて見えたその姿に私は絶句した。

濡れた空気に甘ったるい香がしどけなく漂い、佳人が妖艶に微笑
む。

『——お待たせしんした』

ぱたんと傘を閉じて神社の中に優雅に入ってくる、その一つ一つ
の動作が計算し尽くされたように艶めかしくて、見ているだけでく
らくらしてくる。傘に長い舌とぎよろりとした一つ目があることも
全く気にならない。

山の主が呆れたように一声唸った。

『随分と着飾って来たな、蜘蛛の』

『ええ、わつちに見蕩れて欲しくて頑張りんした。……それで、あ
の子は何処に隠れているのでありんしょうかえ？』

『露。隠れてなどおらぬ。常は姿が見えぬと申しただらう。我の前

に座っておる』

え、ミー？ イッツミー？

「えっと、あの」

ワタクシメに何か御用でございましょうか、花魁^{おいらん}さん。

着物から肩がもろに肌蹴てますけど、鎖骨が、目のやり場が困るんですが。

堂々と山の主の前までやってきた美女が、恍惚とした表情で私の前に屈む。

ふわりと香が広がり一瞬思考が霞んだ。

『なんとまあ、蝶のように愛らしい声でありんしょう。その声わっちが快樂に嘖らしてあげんしょうかえ。それとも涙に濡らしてやりんしょうかえ』

「……は？」

『昨夜の姿がもう一度見たかったでありんすが——見えぬ相手というの中々、興が乗りんせんかえ？』

「わあああ！！ ちよちよちよ、何してるんですか何言ってるんですか！？」

いきなり押し倒されたかと思うと、帯の結び目をしゅるりと解かれた。

花魁さんの豪華な簪がしゃらんと頭上で揺れたところで、私は猛烈に我に返って悲鳴を上げてしまった。何この早業！？ っていうか見えないのになんで服脱がせられるのこの人！？

待て待て待て私、女、女だって！ ちよっと誰か助けて！

「やめ……」

ぶちいっと何かがちぎれる物凄いい音がした。

ひーとか、ぎゃーという妖怪達が吹っ飛ばされるような声。

『ブツ殺す』

エコー！？ 自力で縄ぶつちぎったの！？
ななな、なんつー言葉を覚えちゃったんだ私は悲しい！ そして
助けて！

『呆。何をしておるのだ女郎蜘蛛』

『がはははは！！ つとに見境ねえなあ、こりやいい肴だ酒持つて
こい酒！』

『……巢から引つ張り出さない方がよかったか？』

『百々目鬼はんは悪くあらしまへんわあ。朔月はんみたいなかあい
らしい子おが好きなんどすえ。しょうがおへんなあ、あの人は』
『はあ』

山の主が尻尾を振り、牛頭（もうさんなんか付けん）が笑い、百
々目鬼さんと猫又が顔を見合わせ、鴉天狗が眉間を押さえた。

呆れるな喜ぶな眺めるな溜め息つくなあ！
くっそ！

出て行つてやるこんな山！

里に下りたいよキリナさん！！

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 5（後書き）

w e b拍手を設置致しました。お返事は活動報告にてさせて頂き
ます。

1拍手がヒトエビトの活力となります。

ここだけの話……最大10回まで押せるんですって！（ちらり）

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 6

完全な満月はその美しさゆえに、焦がれた雨雲を惹き寄せる。

この二日間もその例に漏れず、空一面を覆う分厚い雲から土砂降りつきよひあめの雨が降り注いだ。

——月呼雨つきよひあめの激しさは嫉妬に狂う雨雲の仕業だ。

帝国の御伽草子の一節にあるほど、満月の後の豪雨というのはありふれたものである。

だが、今回の雨は里の人々にとって別の意味を持ったらしい。

「山神様が特別に雨を降らせて下さったんだよ」

わざわざキリナの家へ訪ねてきたその男は、外を指差してそう言った。

社で雨乞いをしたのは自分だ、この雨は自分の願いを聞き届けて下さった山神様による慈雨であるのだ。

まるで手柄を自慢するように、男は得意げな顔で言い募る。

いっそ滑稽なほどに彼は浮かれていた。

雨に煙る朔月山を眺めるクラトが冷笑を浮かべていることにも、気が付かぬほどに。

少しばかり潤し過ぎた大地を置いて雨雲が去った後、頭上には二日ぶりの青空が広がった。どこまでも澄み切った空は遥かに高く、彼方に遠い。

それは鞘夏から秋へと季節が移り変わったのだと告げていた。

季節は巡る。嘘と本当を抱いて。

何をして、何をしなくても。

何が変わっても、何一つ変わらなくても。

＊＊

がつ、と刃がつつかえる感触。

（またか）

振るっていた鋤を一度地面に突き刺し、クラトはひょいと腰を屈めた。

土の中に手を潜り込ませ、慣れた動作で刃に当たった石ころを掘り返す。

恐らくこれほど石が多い場所であるために、今まで開墾されずに放って置かれたのだらう。二、三度鋤を入れることに大小の石ころが作業を阻んでくるのだ。

たっぷりと水気を含んだ黒い土は、全くだに焼けていないクラトの手を瞬く間に汚した。借りてきた藍色の野良衣は、畑の泥濘を吸ってじつとりと黒く濡れて腕や足に纏わり付く。

だが、それらはクラトにとって何一つ煩わしいものではない。掘り出した石ころを畑の外へと投げやってから、再び鋤を手にする。

両手で柄をしっかりと持ち、肩の動きを意識しながら大きく振り上げた。体の軸にぶれが生じないように注意しつつ、ぶんと刃を振り下ろす。

ざくりと小気味良い音と共に、湿った土の匂いがほっくりと柔らかく立ち昇った。

大地を相手にした一連の作業。

それは、寝たきりだった少年の胸に素朴な感激を絶えず生む。クラトは一人黙々と土を耕し続けていた。

これまで、クラトとキリナには持ち分の田や畑といったものが無かった。

キリナは農作業に従事するには高齢であり、その孫であるクラトは家の外にすら出られないような病の身だったからだ。

田畑の繁忙期にも手を貸すことが出来ない二人には、里での暮らしは肩身の狭いものであった。幸いにもキリナには産婆としての腕があつたため、今まで細々とはあるが里の端でひっそりと生きていくだけの信頼と銭を手にすることが出来ていたのだ。

里を歩けば、する事はいくらかでもあつた。

例えば穀物と麦藁の収集、多季野菜の収穫、家畜の世話、草の刈り取り。

そして土壤耕作。

まずは耕せ、と里長であるロウザは言う。里に馴染みたいのであればまずは土に馴染めと。

田畑で力をふるってこそ、里を守る男の一人だと認められるのだ。筋骨隆々のがつしりとした体格の男に豪快にそう言われれば、クラトの手は自然と鋤に伸びた。

もちろん、里の人間と打ち解けようと思ったわけではない。クラトを突き動かした思いは、ただ一つだった。

——強くなりたい。誰よりも、何よりも。

燃えて、灰になりたいと願っていた病気の少年は既にいない。生きて、強くなりたい。

今まで寄りかかっていた祖母の全てを今度は自分が背負えるくらいに。

どんな不安も心配も全て引き受けられるほどに。守るための強さが欲しかった。

……この手で守りたいものができたから。

ぽたりと汗の滴が額から滑り落ち、目の中に入ってきた。

（くそ、あつちい……）

うっかり集中を切らして鋤を振り下ろした瞬間、柄に込める力加減を間違えた。

（げ）

鋤の柄がボキリと真っ二つに折れる。

朝から耕し始めて、クラトが鋤を破壊するのはこれでもう三本目であった。

（見た目よりもろく出来てんだな、これ）

そう結論付けた後、クラトはふうーと息を吐き野良衣の上衣をがばりと脱いだ。

前合わせの襟から腕を引き抜き、肩からばさりと落とす。涼しい秋風が汗ばんだ肌の上を心地よく撫でていく。

手の甲で額の汗を拭い一つにまとめていた髪をほどいた瞬間。

クラトの耳に、馬の鋭い嘶きと甲高い悲鳴が響いた。

（——今のは、カンナの声か！？）

瞬時に判断し、悲鳴が聞こえた方角へ足を向けた。

雨上がりの道は、日が高くなつた今でもあちこちに大きな水溜りを広げている。舗装されていない田舎道は水はけが悪く、ひとたび雨が降ると極端にぬかるみを作るのだ。クラトの長靴にちゅうか濁った泥水がぱしゃりと跳ねた。

近くで農作業をしていた里の男たちも異変を嗅ぎつけたらしく、肩に農具を引っ掛けて小走りについてくる。真っ直ぐに里の入口付近まで来ると、クラト達は目の前に広がる光景に愕然とした。

——巨大な荷馬車が、道の真ん中で完全に横転している。

「うああん、お、おささまあ、おささまあ！」

「ひやつひやつひゃ。泣くな泣くな、俺様は最強だ。こんなもんで死にやしねえよ」

「ロウザ！」

限界まで荷物を括りつけた荷馬車は、ロウザを下敷きにして横倒しになっていた。

そのすぐ脇では、ぺたんと尻もちをついたカンナがわあわあと大声で泣きじゃくっている。

腹這いになった大男は陽気に少女へ笑いかけているものの、その顔の上にはじつとりと脂汗を浮かべていた。恐らく、相当の重量が彼の下半身を圧迫しているのだろう。赤い色が混じった水溜りを目にしたとたん、クラトは顔を強張らせた。足を怪我している。

駆け付けた里の連中が、がやがやと騒ぎだす。

「里長あ！　こりゃあ大変だ！」

「おい誰だ、こんなぬかるんだ道に荷馬車なんか突っ込ませた奴あ！？」

「見つけたぞ。こいつだ」

「おめえどっから来たんだ、こんな大層な荷を山積みしてよお」

荷馬車の御者らしき小男が引き摺りだされ、里の者に襟首を掴まれて詰め寄られる。

青褪めた顔をした小男は必死の形相で両手を振った。

「あ、あつしはただの運び屋ですよ！　こ、この山神様に一日でも早く供物を納めて来いってんで、偉い方から仕事を請け負っただけであ！　昨日から走り通してここまで来たんですぜ！」

「人を轢いてまで急ぐたあ、どういいう見だい？」

「ち、違いますよお！　そこ、そのガキが急に飛び出して来たんで、あつしは慌てて手綱を引いたんですぜ！　そしたら、その旦那

がこっちに向かって突っ込んできて……」

「ふてえ野郎だ！ てめえは悪くないってのか！？ 言い逃れしよ
うとすんじゃねえ！」

「ひいつ」

クラトは小さく溜息をついた。

責任の追及など後からいくらでも出来るだろうに。皆、頭に血が
昇って順序を誤っている。

彼らの下らないやり取りを見ると、クラトの思考は反対に冷
えていった。

「おい、ロウザを助けなくていいのか」

自然と口調も冷えたものになる。

今まさに御者に殴りかかろうとしていた里の男は、クラトの言葉
にハッと顔を上げた。冷水を浴びせられたような表情でクラトを振
り返った後、慌てて周囲に声を上げる。

「そ、そうだ！ こりゃいけねえ！ おい、車体を持ち上げるぞ。
皆手え貸せ！」

「いや駄目だ、馬が暴れて近づけねえ……」

「ありゃあ剛馬か！ くそ、良い馬使ってんじゃねえか！」

「へ、へへ。あつしは早馬自慢の運び屋ですから」

「おい！ あれをなんとかして宥めろ！」

「そ、そりゃあ無理ですぜ。あいつぁ特に気性が荒いやツなんです
よ。いったん興奮すりゃしばらくは落ち着かねえ。その分足も速い
んですがね」

「あんな足で蹴られりゃあ、一発で骨が砕けちまうぞ」

「後ろから車体を持ち上げるってのはどうだ！？」

「いや無理だ。あの位置じゃあ馬が自由になつたとたん、里長を蹴
り上げちまう」

「じゃあどうすりゃいいんだよ！」

「里長あ、もう少し辛抱してくださいえ！」

喧々諤々と唾を飛ばす里の人々から少し離れ、クラトはひくひくと嗚咽する少女を引き寄せた。ぽんぽんと背中を叩いてやりながら荷馬車を鋭く観察する。

ロウザは前輪付近に倒れており、その手前にはずんぐりとした馬が横たわっている。

馬は後ろ足を車体に押し潰されているため、起き上がろうと躍起になって暴れていた。激しく嘶きながら何度も蹄を掻き、ぬかるんだ道に溝を作っている。その抉れた溝の深さが、脚力の強靱さを示していた。

（まずは、あの馬を大人しくさせるのが先決だな）

剛馬が興奮を収めるまで待つという手は、御者の男の言うとおり時間がかかるだろう。待っている間もロウザの足からは血が流れ続ける。圧迫された体に長時間の負担を強いるのは危険だ。やはり一刻も早く荷馬車の下から救い出さねばならない。

——問題は馬を鎮める手段をどうすべきかである。

「ロ、ローザさんご無事ですか!？」

「カンナっ!」

「……おにい!」

里の女連中がぞろぞろとやって来たかと思うと、その集団の中にいたニーナが目丸くしてこちらへ駆け寄って来た。今日の彼女は動きやすいように髪を一つにまとめ上げ、後ろに垂らしている。

動くたびにふわふわと軽く揺れる緑髪にクラトが一瞬状況を忘れていると、後ろから姿を現したライヒが慌てたようにカンナを呼んだ。泣きべその少女が兄の下へととてと走っていき、入れ替わり

に顔を真つ赤にした少女がクラトの下へやって来た。

「クラトさん！？ な、ななん得上半身が裸なんですか！？ 服着てください服！」

「あ？ いや、あちいから……」

「駄目です！ そんな格好、か、風邪を引きますっ！」
「うるせえなあもう」

「ごそそと帯で留めていた上衣を着直してから、ニーナに向き直る。」

赤い頬を自分でぺちぺちと叩く少女に首を傾げつつ、クラトは荷馬車をくいと指差した。

「馬鹿口ウザがカンナを庇って、荷馬車の下敷になっちまったんだよ。ニーナ、あの暴れ馬を大人しくさせる薬とか持ってないか？」
「そうですね。鎮静効果でしたら誘眠粉と痺れ花の蜜薬があります
が……」

「使えねえのか」

「いえ、効能はあります。ただあの馬の様子だと即効性は期待できません。もう少し興奮が収まってからでないと、効き目は現れないでしょう」

「それでも無いよりはマシだろ」

「それはそうですが」

「——大人しく、させればいいの？」

不意にライヒが会話に入ってきた。

妹の手を握り、クラトとニーナを静かに見上げている。

長い前髪に隠されたその顔からは、当然何も読み取れない。だが、珍しく自分から何か行動しようとする少年をクラトは怪訝に思った。基本的にライヒは目立つことを好まず、進んで人と関わろうとは

しない。己の出生のためか、もしくは元々そうだった性質なのか、この少年は絶えず何かに気後れしているような気がする。誰にも咎められないようにと、いつも躊躇しながら生きているのだ。

「カンナ、ちょっと離れて……」

「おにい？」

「おいライヒ、危ねえからあんまり馬に近づくな」

カンナの手を離し、クラトの忠告を無視して少年が剛馬に歩み寄る。その動きに普段の臆病さは欠片も見当たらない。ごく自然な動きで二、三步足を進めた後、彼はそこでぴたりと立ち止まった。それ以上は動こうとせずに、ただ暴れ馬を見つめて突っ立っているだけだ。

秋風が一阵、ざあつと通り抜ける。

何もせずに立ち尽くす少年。

偽りの茶に染めた髪がふわりと風に揺れる。

やはり怖気づいたのか、とクラトが思ったその瞬間だった。

突然、剛馬が物凄い声で嘶いた。

口から泡を吹き、血走った目をカツと見開いている。

さっきまでの様子とは比較にならないほどの興奮状態だ。――い

や、これはもはや恐慌状態と言ってよかった。上下左右に鬣たてがみを振り乱しのたうち回っている。その姿は、見る者の胸に得体の知れぬ恐怖を煽った。凄まじいまでの狂態が衆目に晒される。

唐突な剛馬の狂乱に度肝を抜かれた人々は、言葉を無くしてその様子に釘付けになっていた。

ライヒは何もせずただ馬を見つめている。――ただじつと、凝視しているだけなのだ。

その小さな後姿にクラトはぞわりと悪寒を覚えた。

（なんだ……？　もしかしてこいつが、『何か』しているのか？）

ふと剛馬が一際高く嘶いた。

常軌を逸した断末魔に近い鳴き声を上げ、そのまま急に力が抜けたように倒れ伏す。唾液に光る口を緩く開け、そこから長い舌がだらりと垂れた。時折太い前足の筋肉がぴくりぴくりと痙攣しているため、死には至っていないようだ。

しんと静まり返ったその場で真っ先に動いたのは、ニーナであった。

腰に吊るした四角い巾着から小瓶を一つ取り出すと剛馬に向かって走り、鋭く叫ぶ。

「ローザさん、目を瞑っててください！」

言い終わるや否や、ざあっと小瓶の中身をぶちまける。

薄青い粉塵がもうもうと立ち込め、剛馬の動きが完全に止まった。きゅっと小瓶の蓋を閉め、薬取りの少女が緑の髪を揺らして里の人々を振り返る。

「ふう〜これでしばらくの間はぐっすり眠ってくれるでしょう。急に暴れだしてびっくりしましたけど、不幸中の幸いでした。もう大丈夫ですよ、皆さん！」

にっこりと優しく微笑む少女。それを見た里の人々は、ようやっと呼吸の仕方を思い出したかのようにざわざわと動き出した。だが、誰一人としてライヒの方を見てはいない。異国の少女の機転に感心しつつ、クラトは騒ぎに紛れて少年に近寄った。

ぽんと肩を叩くと、ライヒはぴくりと体を跳ねさせた。

「……あ、ク、ラトにい。僕は、ただ……あの、」

「落ち着け、何も言うな。里の連中はお前が何かしたとは思っちゃいねえ。せつかくニーナが気を逸らしてくれているんだ。お前が下手に謝りやかえって怪しまれるだけだ、いいな？」

「僕、は」

「おにいっ。だめ、今のはだめよ。お馬さんが怖がってた。あれは、しちゃだめ」

さつきまで泣いていたとは思えない声で、カンナがライヒにそう言った。そのあどけない声には、今の状況を一番理解しているような奇妙な落ち着きがある。

ライヒは呆然とした様子で妹を見下ろし、倒れ伏した馬を見やつた後、最後にゆるゆると両手で顔を覆った。

「僕は、今……」

「ひゃっひゃっひゃ！　おいおいおいカツコイなあお嬢ちゃん！　惚れちまいそーじゃねえか！！　俺様がちゅーしてやろうか！？」

「いえ、それは結構ですけど無理して大声出さなくていいですからね、ローザさん。足から結構出血していますよね？」

「こんなんでいちいち騒がれるほど、俺様は軟弱野郎じゃねーって！　ひゃっひゃっひゃ」

「こら、せつかくニーナさんが心配してくれているのにその言い方はなんだ、里長！」

「そうだそうだ！」

「里長、あんたはちよつと黙ってなさいよ」

「静かに助けを待てんのかお前は！」

「え、あれ、なんで責められてんの俺様！？」

ライヒの尋常ではない様子は気にかかったが、今はゆっくりとその相手をしてもらえない。

ちつと舌打ちをつき、クラトは騒ぎ立てるロウザ達の元へ向かった。

荷馬車を動かそうとしている人々の間を縫ってニーナに近寄る。

「ニーナ、今の青い粉は？」

「ああ、誘眠粉です。いつも護身用に持ち歩いているんです。馬に使ったことはないので少々不安でしたが、しっかり効いたみたいで安心しました」

「護身用……」

「はい、あたしの『武器』は草花で作った薬なんです。弓や剣はあたしには扱えませんね。あ、誘眠粉以外にもいろいろあるんですよ」

「お前を守ってくれる奴とか、いないのか」

「まもる？ いえ、自衛が旅の基本ですから」

きょんとした顔をする少女に不意に焦燥が湧いた。

違う、それが聞きたいんじゃないんだと言おうとしてクラトは思いとどまった。

人から守られることなどないと言う癖に、その肩は触れれば壊れてしまうのではないかと思うほど細く華奢だ。ここに来るまで重ねてきたであろう苦勞が、その両肩に透けて見える。

掻き抱きたい、と思った。

「おい、クラトくんな所に突っ立ってないで早く俺様を助ける」
「黙れ」

「ひゃっひゃっひゃ！ いいねえ、若いねえ。んな目しちゃってまあ、見ているこっちの胸が苦しくなっちゃまあなあ！ ひゃっひゃ」

「はあ？ 何言ってるんだ。胸打ったのかお前？」

荷馬車の下敷きになっている男が、表情だけはニヤニヤと余裕そうに緩めている。

いつそのまま放置してやった方が害が少なくていいかもしれない。

割と真剣にそう思ってしまった。

「おい、車輪がぬかるみにめり込んでいやがる！ そっちから押せ！」

「いや、引いた方が動くぞ！」

「く……っそ、重い！ どんだけ供物乗せてきやがったんだよ！」

「あ、あのーあつしも手伝った方がいいんですかね？」

「当たり前だろうが！ おめえ後で覚悟しとけよ！」

「ひいっ」

「ひやつひやつひゃ！ まあそう怒んなよお前ら。俺様最強だから平気平気。こんな屁でもねえよ、ひやつひやつひゃ！」

「里長あ！ そっからじゃ全然説得力ねえぞ！」

「ひやつひやつひゃ！」

「ちよつと笑い声がうるせえぞ里長！ ……くそ、だめだ、全然動かねえ！」

男たちが顔を真っ赤にして車体を持ち上げようとしているが、足場が悪い上に相当の重さがあるらしかった。荷馬車がロウザの上から動く気配は一向にない。

「ひやつひやつひゃつ！ おいお前ら、ちよつと一旦どけどけ。――

おい、クラト」

「あ？」

「ちったあお嬢ちゃんに良いところ見せてやれよ。ひやつひやつひゃ！」

「……ちつ」

あれがキリナばあさんの孫だ、ほら例のニーナさんの、へえあの

細いのがそうなのか。

こそそと会話を交わす里の人々をじろりと睥睨して、クラトは一人荷馬車の前に進んだ。周りにいた男達は納得のいかない表情をしたが、里長であるロウザの言葉に従って渋々と荷馬車から離れる。それでも離れようとしないう者たちを先ほど御者の胸倉を掴んでいた男が、無言で引つ張っていった。

ちらりとニーナを見る。

胸の前に手を組んで、不安げな顔でクラトを見ていた。

緑の瞳と視線が交わったことに何となく満足し、車体の下に片手をかける。

——そして、呆気なく荷馬車を持ち上げた。

「おい、足が血塗れじゃねえか。痩せ我慢してんじえねえよ馬鹿口ウザ」

「ひゃっひゃっひゃ、いやゝ俺様最強だから全然痛くねんだよ。あ、ちゅーしてやるうか？」

「……下ろすぞ」

「おわ、やめろやめろ下ろすな！！」

啞然とする人々の前で、巨大な荷馬車を片手で持ち上げた少年が平然と会話している。

余りにも何気ない調子で話す二人。

だが、呆けた時間は一瞬だった。

わあつと轟くような歓声が上がる。女達は手に手を取り合って喜び、子供がそこら中を駆け回り、男達がクラトの頭や背中をばしばしと強く叩いてくる。

いいぞ坊主、信じられねえ一体どうなってんだ、さすが山神様の恩恵を受けただけはあるじゃねえか、本当に今まで病気だったのか、おい誰かキリナばあさんに知らせろ。

クラトはしかめっ面でそれらを振り払おうとしたが、興奮した人々は浮かれ騒ぐばかりで邪険にされているとはついぞ気がつかない。それどころか、子供達まで寄り集まって来る始末だ。

常識が世間とややずれた場所にある少年には、なぜこんなことで英雄扱いされるのが理解できなかった。

さあ里長を助け出せ、と人波が引いていったところで漸くニーナが話しかけてきた。

「凄いですクラトさん。本当に、凄い」

しかし、その表情は称賛の言葉とは裏腹に複雑な色をしている。口を開きかけた時不意にいと服が引つ張られ、クラトはその表情の意味を聞きそびれてしまった。

「クラト兄ちゃん、おにいが……」

「どうしたカンナ。あ？ ライヒ何処に行ったんだ？」

「お山の方に行っちゃった」

「朔月山に？　なんでまた」

「わかんない。けど、急に走って行っちゃったの。おにい、今頃一人で泣いてるのかなあ……」

「まあ、間違いなく泣いてるだろうな。あいつすぐ泣くし。なんか様子がおかしかったしな」

「ふ、え」

「クク、クラトさんっ。そういう時は嘘でも泣いてないって言わないと駄目でしょう！」

「はあ？　なんで俺が嘘つかなきゃいけねんだよ」

「ふええ……ん！！」

よしよし、とニーナが泣き始めたカンナを宥める姿を眺め、クラトはふと『何か』を感じて振り返った。無事に助け出されてうるさ

く笑い声を上げるロウザや、彼にべこぺこと頭を下げる御者の小男、そしてそれを取り囲み口々に話す里の人々。好奇心一杯にそわそわとこちらを見てくる子供の集団。

——居た。

子供の中に一人、無表情でこちらを見てくる者がいる。

灰色の瞳をした妖だ。

子供達は自分達の中に異形が交じっているとは、まるで気が付いていない。

（あいつ、なんで里に降りてきているんだ？）

クラトがじつと見ていることに気付いたのか、灰色の少年はスツと音もなくその場で消えた。

不気味な奴だ。

だが、たちの悪い妖ではないはずだ。

その証拠に、魔に敏いはずのニーナがまた彼の存在を察知していなかった。

いまいち腑に落ちない気がしたが、まあ害が無いならいいかと心配が去るのを黙って見送る。

「ひゃっひゃっひゃ。ちょっと俺様、お嬢ちゃんの薬が必要なんだが家までついて来てくれねえかあ？」

ロウザが里の男に肩を借りつつ、笑いながらニーナの方へやって来た。

クラトはとつさに考えるよりも先に体を動かし、ロウザとニーナの間に割って入った。自分以外の男がニーナに近寄ると、最近訳もなく苛々するのだ。

「断る。里医のジジイの所行けば済むだろう。こいつは忙しいんだ

よ

「あのクラトさん。あたしは別に構いませ」

「うるせえ」

「ひやつひやつひゃ！　そうか、そりゃ残念だなあ。俺様も欲しかったんだがなあ、神薬花の薬が。そう上手くはいかねえか！　ひやつひやつひゃ！」

「……え？」

背後でニーナが小さく呟く。

クラトは、はつと顔を上げた。

御者の小男が最初になんと言っていたか、唐突に思い出す。なぜ、クラトに荷馬車を動かすようにせつついたか。

そして今の言葉さえも――。

全ての思考が稲妻の如く回転し、理解がかちりと粹に収まった。

(こいつ――わざとだ)

クラトは、陽気に笑う男を呆然と見上げた。

男は笑っている。

彼独特の笑い方をして、人々の心を掴んだ声で。

六年前までは余所者だった人間が。

この辺鄙な地へやってきた有能な男が。

舌舐めずりしそうな顔をして、笑っていた。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 6（後書き）

w e b 拍手更新しています。

更新状況は活動報告にてさせて頂いております。

第5話 嘘つき少年の本当の嘘 7

雨上がりのフレッシュな山の空気は、一呼吸一円で売れる気がする。

『ええお天気どすなあ。こないな日は昼寝したなるわあ』

「日向ぼつこのつもりが、いつの間にか寝てる時ってありますよね

」

『気持ちええもんなあ』

妖怪達の宴から二日。

私はなぜか猫又と神社の縁側に座って、まったりしていた。

この二日間神社内に引きこもっていたため、外の空気がやたらと美味しい。日差しはやわらかく、こうして縁側にいると丁度いい涼しさの風がそよそよ吹いてくる。青空が映り込んだ水溜りには、蛙妖怪——^{わいら}畏というらしい——が数匹浸かって満足げに目をぐるぐるさせていた。

うん、気持ちのいい天気だ。

うんうんと頷いていると、二本の尻尾が横でゆらりと揺れた。

『毎度毎度、月呼雨はえらいお湿りどすからなあ。うちは湿っぽいのはかなんどす』

「え、やっぱり猫だからですか？」

さつきから隣でぴこぴこ動く耳が気になって仕方がない私である。肉球にも心惹かれる。触ったらきつと至福の感触が味わえるに違いない。

ああ今すぐ指でぶにぶに押してやりたい。

『あら朔月はん。うちは猫やなくて猫又どすええ。いややわあ、間

違えんといっておくれやす』

「す、すみませんっ」

ネコ科特有の瞳がくりんとこちらを向き、私は伸ばしかけていた手を慌てて引つ込めた。

駄目だ駄目だ。

猫に酷似していても、これは猫ではないのだ。

着物を着て、とことこ歩いて喋って、人間みたいな仕草をするこれではつきとした……ああくそ、やっぱり可愛い。撫でたい。ちょっとでいいから触りたい。何気なさを装ってソフトタッチしたい。なんて心の中でもんもんと葛藤していると、三味線をちよいちよいと調弦していた猫又が不意にべれんと大きく音を鳴らした。ふふと上品に笑う。

『あんなあ、朔月はん。物の怪いうのは気髄きずいな生き物どす。あんまりしおらしゅう相手しとつたらあきまへん。昨日もあんさんいいように弄ばれとつたさかい』

……私しおらしいか？

確かに昨日と一昨日は大変だったけど、いまは痴漢的思考真つ最中でした。

「はあ。気をつけます。ご忠告ありがとうございます」

『なにゆうといやす。せや、一曲弾いてあげまひよか』

待ってましたーと手をパチパチさせると、気のいい猫又は三味線を抱え直し、べけべんべんと奏で始めた。

今日は朝から参拝客が一人も来ない。

雨上がりで道が悪いし、もしかすると、里の人達は作物の収穫準備に追われているのかもしれない。妖怪たちの話だとそろそろ秋らしいので。

うん秋。天高く馬もメタボリックな、あの秋である。

なんとここにはきちんと春夏秋冬が存在していたのだ。少し呼び

名が多いようだけれど、その辺りの細けえこたあ気にしない方向で、ついでに言っと、私が今いる国の名前は「ヒノワ帝国」だということも既に学習済みである。この二日間、私は神社の中でくっちゃねして雨がやむのをダラダラ待っていたわけではなかった。そりゃもうガツツリと情報収集を根掘り葉掘りと……。

私がされた。

不本意ながら私は朔月山の闖入者。山の主がおでかけ(?)から帰ってきたということで正式な取り調べを受ける羽目になったのだ。まあ尋問や拷問の類じゃなかったただけマシだと思う。

カツ丼の出前こそなかったけれど、食べ物に干し肉や妖怪お手製握り飯をもらえた。しかしそれをぱくりと食べると妖怪たちは一々面白がるので、食べ辛いことこの上なかった。一口食べるたびに『おおー』とか『これは面妖な』とか、盛大なりアクションが返ってくる。そりゃまあ、そちらから見れば勝手に握り飯が消えていくようにしか見えないでしょうけれど。

珍獣扱いアンド餌付けされた気がする。

妖怪に。

……妖怪に！？ 待て納得いかねえ！

ちなみに、私の取調べ官は百々目鬼さんだった。

驚いたことに彼女の腕にびっしりと並ぶあの目、実はあれは山にいる鳥たちの目とリンクしているらしい。つまり彼女一人で朔月山の監視カメラ(鳥)を統括しているようなものだ。出で立ちは女盗賊なのに、その正体は警備のエキスパートなのである。私が山中をあちこち徘徊してまわったり、キリナさんと二ーナちゃんを引き合わせたり、エコーに接触していたことも、全て鳥の目を通して察知していたらしい。全然気がつかなかった。

『——だが、いつまでも姿を現さないお前を私は不審に思った』

気怠げに髪を掻きあげながら、百々目鬼さんはそう言った。

『朔月山に住まう物の怪には、大きく二つの掟がある。御大が山におられぬ時は、隠形を解いてはならない。人間共には干渉してはならない。どちらも破るは容易いものだ。特に不可侵の掟は人間を喰いたがっている輩にとっては、御大への忠誠が試される』

すつと目玉だらけの腕が伸ばされ、顎を取られる。

そのまま私の顔の形を確かめるかのように、長い指がするりと肌の上を這った。

見えないものに触れているって一体どんな感じなんだろう、と思っ

た。『……常に隠形をしているというわけではあるまい。では元から姿無き化生の類か？ 違う。お前からは奸邪の気を全く感じない。では人間か？ それも違う。そもそも黙理の通らぬ生者など、いるはずがない』

紫色の長い睫毛を伏せ、淡々と百々目鬼さんは話す。

抑揚を抑えた口調は、ともすればただ独白しているようにも聞こえた。恐らく傍から見れば、一人でぼそぼそ喋っているようにしか見えないだろう。

『お前が何者であれ、お前は人に近づき、人に声をかけ、そして人に神薬花を渡した。人間の世がどうなろうと私の知ったことではないが、御大が定めた掟を破った者は見逃せぬ。それが私の役目。……しかし』

戯れのようにさらりと髪が梳かれる。

『御大はお前をお許しになった。御大は掟そのもの。ならばお前を責めるまい』

私如きがあの皆さんの胸中を推し量ることなどできんな。気怠そうにそう言った百々目鬼さんは、ふと笑みらしき表情を浮かべた。口元を覆っていた黒い布を指で下げ、ふっと私の耳元に顔を寄せてくる。何事かと身構える私の耳に吐息混じりの囁きが吹きこまれた。

『だが朔月の名を持つ者よ。お前を敵と見做せば——決して生かしてはおくまい』

……取調べというか、あれは完全に脅しだったなあ。

三味線の音を聞きながら、私は遠い目をして百々目鬼さんの言葉を思い返した。

あれから淡々と報告していく彼女に山の主が質問を挟んだり、たまに私に内容の確認をとったりして取調べは進んでいった。ひっそりやっていたことが実はバレバレだったというのは、何だか恥ずかしいものがある。変な独り言とか言っただけでなかったらどうか、私。

どこから来たのか、という問いには上手く答えられなかった。

ただ気が付けばこの神社の中にいたのだとだけ伝えようと、山の主は無言で尻尾を揺らした後『そうか』と言い、それ以上は聞いていなかった。

ようやく質問攻めが終わった後、私は恐る恐るこの世界のことについて尋ねてみたのだった。

そうだった経緯で、私は異世界情報をゲットするという偉業を成し遂げた。

が、今のところ必要な情報はまだ少ない。

もう白目剥きたくなるくらい少ない。

質問相手である妖怪達が私の予想を遥かに上回る自由奔放さだったのだ。

論理立った説明というものを奴らは全くしてくれない。はつきり言って壊滅的だ。

質問してもまるっと無視は当たり前、興味がないことは何も知らないし、煙に巻いたりはぐらかすのはお手の物、というか会話の途中で忽然と消える。難解な言い回しをしてきたかと思えば、逆に簡潔過ぎて意味が分からなかったり……とにかく話を続けるだけで一苦労も二苦労もしなければならなかった。

山の主は私に質問をするだけして、ふらりとどこかに行ってしまうし、比較的常識人っぽい猫又や鴉天狗もはつきりと答えてはくれない。狐面の天邪鬼に至っては常時私への殺意がフル稼働らしく、会話するなら決死の覚悟が必要だった。涙がちょちょぎれそうになる。

まあ、何だかんだ言ってひとりぼっちじゃなくなったのは、嬉しい。

けれどこの暗中模索っぷりは精神衛生上よろしくない。やっぱり人間の話し相手が必要だ。

となると、今のところ思い浮かぶのは一人しかいない。実際に私の顔を見て言葉を交わした唯一の人間――。

『誰か山に入ってきている』

私がグツと拳を握った直後、のっそりと神社の中から百々目鬼さんが出てきた。

振り返ると彼女の腕がちょうど真上にあり、思わず身を引いた。うう、近くで見ると結構グロテスクだな。皮膚の上に目玉が浮いたり沈んだりしているのがリアルです。

『あら、誰か参拝しに来はったんどすか？　こちら隠形した方がええ？』

『待て。あれは……忌子だな』

『ああカンナ様のお兄さんでっしゃろ。こっちに來はる？』

『いや、どうやら窓木へ向かっているようだ。……ちっ、鳥が逃げた』

『そら本能どす。近づかん方がええ〜て』

うわなんてタイムリーな登場。

もしかして、会いに来てくれたのだろうか。

いや、また会いに来て欲しいつつたのは私なんだけど。会いに、来てくれたのだろうか。

山神様でもなんでもないただの「私」に。

ああ、だったら。

「あの、ちよつと私行つて來ます！」

だったら嬉しい。

＊＊

雨露に濡れた枝葉をよけながら木の枝を蹴つて疾走する。

——まるで満月の夜の日の再現だ。

でも今はあの時と違い、陽の光が眩い。そして今の私は姿を失くしている。

逸る気持ちを抑えきれず、息急き切つて走る。何かにすがりつくうとしているような、すがりつくものを見つけたような切迫した気持ちがいじりじりと胸を焦がし、足を速める。ほとんど全速力と言ってもいい。

頭の中の冷静な部分が今の自分に失笑した。

みつともないほど必死だな、一人で盛り上がった。一度会ったきりの他人に一体何を期待している。事情を話して憐れみの言葉でもせがむつもりか。

枝を蹴り上げ、跳躍する。

……あの子はたった一言をくれたんだ。

この世界で無様にもがき何者にもなりきれないでいる私に向かって、月が綺麗だと。

同じものを見上げてそう言ってくれたんだ。

それだけでいい。それだけで泣けるほど救われた。

だから私は今、こんなに走っている。

巨大な幹が途中で二つに分岐し上で絡み合っている「山神の窓木」に辿りつく。

朔月山の中でも特に大きな木だ。

張り出している太い枝の上に立つて、上がった息を整える。近くにある葉を見て、初めてそれが紅葉に似ていることに気が付いた。秋が深まればやがてこの全てが赤や黄に染まり、きつと迫力ある眺めになるのだろう。目を閉じて地面一杯に葉が散っていく情景を想像していると、木の下でかさりと小さな物音がした。

「朔月、さま……」

さらに小さな声が私を呼ぶ。

「居るよ」

上ずりそうになる声を抑えて返事をし、枝からふわりと飛び降りた。緋袴に空気を孕ませた後、とんと着地する。

戸惑うように辺りを窺っている少年に近づいて並ぶと、彼は私よりも頭一つ分小さかった。さらさらの髪の毛に、濡れた薄い花びらが一枚貼りついている。

私はそれを指でそうつと摘み上げ、彼の目の前に差し出した。

「石段の横の道を通ってきたでしょう。花びらがくつついてるよ」
「……え、え？」

思った通り驚いてくれたので、悪戯が成功した気分になって笑ってしまった。

花びらからぱつと手を離す。

ひらひらと落ちていくそれを少年がじっと見つめている。

私は手を伸ばし、その長い前髪を静かに掻き分けてみた。抵抗する様子もなく素直に顔を暴かれた少年は、一瞬瞬いてゆっくりとこちらを見上げた。つつつと涙が一筋その白い頬を伝っていく。

相変わらず、壮絶な美貌だ。

神の寵愛を一身に受けたような聖性、人を陶醉させ狂気に引き摺り込むような魔性。そんな相反する二つが当然のように鎮座している。零れる涙の一滴すら奇跡の芸術品に見えた。身震いすらしてくる。

「あの、お姿を見せてくれないのですか……？」

「ごめん」

「……僕のせい、ですか」

「ううん違うよ。普段は見えないんだ。この間が特別だっただけ」
すん、と美貌の少年が鼻をすすった。

なんだか酷く痛めつけられてきたような、深い怯えと濃厚な悲しみの気配がする。

「どうしたの。誰かにいじめられたの。何か嫌なことでもあった？」

「違い、ます。……僕は、……」

「うん」

「僕は、嘘つきなんです」
「嘘つき？」

突然の言葉に思わず聞き返すと、少年がくしゃりと顔を歪めた。それは叱られてベそをかいているような子供の表情ではなく、罪の炎に身を焼かれている罪人のような苦悶の表情だった。つたない言葉に、触れれば裂けんばかりの苦悩が滲み出ている。

なんだか対応に困ったのでとりあえず頭を撫でてみた。大丈夫大丈夫と言って何回か撫でていると、少年はまるで耐えられないというように涙を落とし始めた。

……失敗した。
泣かせるつもりはなかったんだけど。

「ぼくは怖いんです。……い、いつか……」

「うん」

「壊して、しまいそう、で……」

「何を」

「……すべて、を……でも、」

「うん」

「でも、僕は……嘘について、いる。……生かされる、ために、嘘を……っ」

「誰に」

「僕以外の、すべて、に……。さ、朔月さま」

「うん？」

「……僕を、赦してください」

ああ、これは懺悔だ。

こんなに小さな子が、懺悔の言葉を口に出している。

不思議だね。私もきみも、互いの存在にすがりつこうとしている。ごめんね、そんなに苦しんでいるのに私は少し嬉しいよ。

抱えた嘘を吐露する場所に、私を選んでくれて嬉しい。何がその心を苛んでいるのか、よく分からないけれど。

でもきみはくれたね、私が欲しい一言を。じゃあ私もきみにあげるよ、きみが欲しがる言葉を。

「いいよ。嘘ついてても、いいよ」

「……生きていても、いいですか……？」

「うん」

即答する。

あの日私を肯定してくれたから、私も全力できみを肯定しよう。

「また私に会いに来てよ。話し相手になってほしい」

「あ、の」

「いや、そんなしょっちゅう来なくてもいいんだけどね。気が向いたらでいいから。あ、私普段はここじゃなくて山頂の神社にいるんだけど、わざわざ登ってこなくてもいいよ。きついだろうし。……」

うーん、じゃあ夕方になったら石段に座つとくことにするね。誰かが来たらすぐ見えるし」

「……いいんですか？」

「何が？」

「僕は……呪われた半妖です」

「へえそうなんだ」

ほーと軽く相槌を打つ。最近妖怪がうじゃうじゃいる場所にいるから、そういう系の耐性は嫌でもついた。そうか。半分で、半人ではないのか。この美貌はそこら辺が要因なのかな。

「……あ、貴女は人にも、物の怪にも見えませんでした」

「うん？ 私は半妖じゃないよ」

一体何に見えたんだろう。

あの時それを聞こうとしたら、邪魔が入ったんだっただけ。天邪鬼め、あの狐のお面をいつか剥ぎ取って高笑いしながら被ってやる。その前に瞬殺されそうだな。やっぱやめとこう。

「どっちにも見えないなら、何に見えたの」

「か……いえ、せ、精霊に……」

「何!？」

「あ、えつと……」

「精霊つているの!？」

「……え、ええ？」

そうきたかー。精霊か。すごいな私、精霊で。

今度から高校三年の精霊ですとか言ってみようかな。意味不明だな。

「……あ、朔月さま。あの僕」

「あ、ちよつとごめん。さつきから思ってたんだけど」

「は、はい」

「呼ぶなら『様』付け無しでお願い。なんだかむず痒くなります」

「朔月……さま。……む、無理です……」

なぜだ。

「じゃあ軽く崩して、朔とか朔さんでいいよ。そっちの方がしつくりくるから」

「朔さ……ま」

「朔さん」

「朔さ、ま」

「じゃーもうそれでいいや」

眉をハの字にした情けない顔も美しいって、凄いなこの子。

愁いをいっぱいに湛えた目で懇願されたらなんかもうどうでも良くなってきた。

適当にオーケーを出すと、ふわっと笑顔が浮かぶ。卑怯だな、この神々しいスマイル。目が潰れそう。もはや凶器だ。

何か言いたそうな雰囲気ですわ。それで、どうぞと先を促すと真剣な眼差しでこちらを見つめてきた。……ちょっと目線がずれているのはご愛嬌。

「あの、朔さま。ありがとうございます。ずっと、ずっとお礼が言いたくて」

「なんの？」

「あの夜、ここに僕を連れて来てくれて、カンナに会わせてくれてあの声に僕たちは助けられました。本当に、ありがとうございます」

あ、そうか。

あの声だけの怪しい誘導が私の仕業だって分かったのか。うん、そりゃそうか。

……うわ。これはちょっと。

胸に来た。

「ライヒ」

「！？ はいっ」

「こつちこそ、会いに来てくれてありがとうございます。本当にありがとうございます」

そつと屈んで、ライヒを抱き締めた。

息を呑む気配が腕の中からしたけど、今だけちょっと我慢して欲しい。

少しの間だけでいいから、すがりつかせて。

あの夜、兄に会えたカンナちゃんが泣きながらそうしていたように。

「朔さま……」

ふとライヒの手が動いた瞬間、ぴいとい口笛の音が遠くから聞こえてきた。

私はハツと顔を上げ、ライヒから身を離して空に向かって口笛を吹き返した。ほどなくして、ざあっと一陣の風が辺りに吹きよせてくる。

その虚空の中からふわりと一人の少年が姿を現し、地面に膝をついた。

「お帰り、エコー。キリナさんどうだった？ 元気そうだった？」
ぴい、と口笛一回。

あーよかった、病気じゃなかったんだ。一安心。

「ごめんね、エコー。使いつぱしりなんかさせて。私、山から出られないから助かるよ」

ぴいぴいと口笛二回。

気にするなと言いたいんだろう。しかし口笛上手くなったなエコー。特訓した甲斐があった。そのうちビブラートとか会得するんじゃないか。

塗りつぶしたような灰色の瞳がちらりとライヒの方へ動く。

目だけ動かして、顔は微動だにしていないうちが怖い。視線を受けた半妖少年の肩が、びくつと揺れた。

うつむ。見た目はライヒの方が年上に見えるけれど、人見知りでもしているのだろうか。まあ子供って知らない人をやたらと怖がることあるしなあ。

「あの、朔さま……この物の怪は……」

「山彦のエコーだよ。私の、えーっとなんだろ、友達？ うん友達」
ぴいぴいと口笛が二回鳴る。

あれ、ひどいやエコー。私のこと友達とは思ってくれてないのか。ちよつと悲しい。

『朔さま。エコー。物の怪。断る。友達』

しゃ、喋ったあああ！！ エコーが喋った！ 単語繋げるスキル
覚えたのかエコー！？ すごい！！ しかも今「朔さま」って言っ
た！ 棒読みだけど！

「すごいぞエコー！ 偉い偉い！」

わしゃわしゃーっと灰色の髪を撫でると、エコーはやっぱり無表
情で半妖少年の方をちらりと見た。ううんライヒが気になるのかな
あ。まあ子供同士、すぐに打ち解けてくれるだろう。

仲良くなれるといいね、ライヒ、エコー！

生きるために嘘をつくと言っのなら、嘘について生きればいい。
嘘に嘘を塗り重ねたら、本当がますます本当になっていくだけだ
から。

嘘つきが一人と、嘘の月が一つ。

きみの「本当」に嘘があるなら、私の「嘘」にも本当がある。

季節は巡る。嘘と本当を抱いて。

何をして、何をしなくても。

何が変わっても、何一つ変わらなくても。

第6話 横顔少女と指見る人々 1

「山神様、これは西大陸の神興国家スィーメントより取り寄せた最高級の布地でございます。この気品溢れる精緻な刺繍は王室御用達の職人たちによる卓越した技の結晶、一糸一糸に丹精込めて縫い上げた天下に二つとなき逸品でございます。山神様のご威光を讃えんがために我が領主が惜しげもなく財を崩し云々……」

『へええ、あれ目の前で引き裂いてやったらどんな顔するかなあ。絶対見ものだよね』

「此度は山神様の御来臨とその慈悲深き御業みわざの数々を風の噂にお聞きし、風よりも早く馳せ参じた次第にございますれば、額に土を塗るがごとく嬉々としてこの身を地に投げ出し、その御声を是非賜らんとひれ伏し希こいねがうばかりに云々……」

『くすくす、嬉々として？ だったらあの頭に足乗つけて地面に擦り付けてやったら、もつと喜ぶよねえ』

「山神様。品数、鮮度、質その他全ての点においてヒノワ帝国が一の商都レンイの御供物が最も優れております。ここに献納せし品はレンイ領主たつての要望により取り揃えられた各地選りすぐりの山海珍味、そして帝国の甘露と誉れ高き銘酒『鬼酔従きすいじゆう』にございます。僅かなりとも山神様をお慰めし、その得難き御高配を恩賜できればと云々……」

『あははは下心丸っ見え！ もう本当にさあ、どいつもこいつも馬鹿みたいに考えること同じなんだね。滑稽ったらないよ』

延々と垂れ流される美辞麗句のセールストーク。

それをざっくりと一刀両断していく皮肉たつぷりな声。

ちなみに前者が主音声、後者が副音声である。

げっそりというかげんなりというか、ひっきりなしの二ヶ国語放送を無理やり聞かされているような頭痛と疲労感だ。はあと深い溜息をつき、私はよっころしょと立ち上がった。

立ち上がったついでに腰に手を置いてうーんと背伸びをすると、視界一杯にすこーんと底が抜けたような青空が広がった。本日も快晴なり。思わず空に向かって手を伸ばしたくなる。頑張れば雲を掴めそうだ。ああいつそのまま千の風になってこの山からおさらばしたい。今私の願い事が叶うならば翼が欲しい。この大空に羽ばたける自由という名の一对のウイングが。

身に沁みる秋風一つ空の近さよ 朔月

——つまり早い話、私はオンボロの神社の屋根の上に立っていた。

屋根の上には現在、山の主によって「音無しの結界」というものが張られている。

いきなり「結界です」とか言われても、さすがにもう動じたりはしない。

魔力がどうのこうの妖怪が四の五の言っている世界なのだから、いつその辺から魔法やら魔術やら魔界やらそのほか奇奇怪怪な何かが飛び出してきたとしても、冷静な対応をしなければならぬと思う。

不思議現象まとめてかかってこいやおらあ！

というか私が不思議現象の最たるもんじゃこらあ！！

そう冷静にシャウトしたくなる。

なんとこの「音無しの結界」の中では、どんなに叫ぼうが喚こう

が熱唱しようが外にいる者に物音一つ漏れることは無いのだという。驚きの防音効果100パーセント。楽器を嗜む人が聞いたら物凄い勢いで食いつきそうだ。カラオケの練習にもぴったりだな。音痴な君もこれでもう恥ずかしくない！ この結界で皆と差をつけちゃう！ 詳しいお問い合わせは山の主まで！

……などといったも通り思考を脱線させながら、私は同じ結界内の一角に目を向けた。

寝転がって食い入るように下を眺めている少年と、その横で我関せずというように座っている少年。こうして改めて見比べてみると、その髪の跳ね具合から足の大きさ、先の尖った耳や爪の先に至るまで、一卵性双生児じゃないというのが信じられないくらい似ている。後姿だと本当に見分けがつかないなあ。心の目で見なくちゃね。

「そろそろ降りようか」

ガラガラと崩れ落ちそうな薄い瓦の上をおっかなびつくり歩きつつ、私は少し離れた所にいる二人におーいと呼びかけた。

何から何までそっくりな物の怪二人。

『……』

『はああ？』

しかし、その反応はこれでもかというほど正反対である。

エコーがこくりと素直に頷いて立ち上がり、天邪鬼が「こいつ頭おかしいんじゃない？」と言いたげな顔でやれやれと頼杖をついた。ちなみに「はああ？」の音程は一度下がってから緩やかに上がる。

なるほど全然いらんわ心の目。
くそ、和むべきか苛立つべきか……。

『下に行って何するつもり。まさかとは思っけどさあ、あの人間達

の相手するの？ 御大から色々見逃されてるからって調子に乗ってる？ 死にたいならはつきりそう言いなよ』

言わねえよ。

もう何、なんでいつも殺気立ってるのこの子、私のチキンハートが小鳥のように震えてるんだだけ。

「え、あの……普通に神社の中に戻ろうかと思ったただけなん」

『ああ、もしかしてあいつら相手にさあ、またサクツキサマごっこでもしたいわけ？』

聞けよ。

そしてそれはちよつと無理です。

当方はささやかな恩返しのみを承っております。
間違つても奇跡とかミラクルとか起こせません。最初に一回起こしちゃったけど、あれが最初で最後の奇跡なの……と言ったらちよつとドラマチックに聞こえてしまうかしら。

屋根の端まで慎重に歩き、腕組みしながら下をひよいと覗き込む。
紅葉した木々に囲まれた山頂の小さな広場。

閑散としがちなそこは今や人々の熱気に包まれており、まるで祭りのような賑わいを見せていた。焼き鳥とか綿菓子の屋台があつても、普通に違和感が無いだろう。ああリングォ飴食べたい。

上等そうな衣服を着た人達が物見遊山で来たような一般人を押しわけ、競うように神社の前に御供物を積み上げさせている。彼らがつらつらと述べる口上はしばらく止む気配がなさそうだ。

うつむ。

天邪鬼が嗤うのも仕方ないかもしれない。

あの偉そうな人達、下心が全然隠れてない。信仰心の皮を被っているつもりっぽいけどむしろシースルー全開。欲望煮えたぎった期待がゆらゆらとここまで立ち昇ってきそうだ。

とてもじゃないがあんな過剰な期待、私は背負えない。

背負った瞬間に潰れてしまいそう。
背負えるのはきつと神だけだ。

既にこの山には四本の尻尾を持った正統なる山神様がいらっしやるのだ。

例えば今ここで私が「はいはいどうもどうも私が噂の山神です」などと言ってしゃしゃり出ていくのは、どう考えてもおかしい、おこがましい、あつかましいのトリプルアウトだろう。

引っ込め偽者といわれる前に、私は一も二もなく表舞台から退場するつもりである。

そもそも表にすら出ていないが、身の程を弁えるという意味でだ。「恩返し」と称した自己満足活動を細々と続けていたのがいけなかったんだ。

直ぐに収束すると思っていた内輪ネタが、海外でウケちゃった気分である。

今となつては全部言い訳にしかないが、私のちょっとした行動がよもやこれほどの大騒ぎにまで発展するとは思わなかった。世が世なら今頃カメラを抱えた取材陣がここを目掛けてなだれ込んでいるだろう。

どうやら里のみに留まらず、予想以上に広範囲へと「山神様」の噂が拡散しているようなのだ。

ああこの既視感。

最初に里の人たちに騒がれたのが半月くらい前だったか。一体どこまで広がっているのだろうか。

噂を運んだのは旅人かもしれない。ここら近辺に規模の大きな街でもあるとか……それにしても情報は情報があちこちに飛び火しているよっただけれど、まさかメールや電話があるわけがないだろう。伝書鳩でも飛ばしたのか？　そもそも信憑性があるとなぜ判断できるんだ

？　　というか喋りかける神様ってやっぱり珍しかったの？

……わからない。

山から出られぬこの身が恨めしい。

こついう騒ぎを見越していたからこそ、山の主は人間との関わりを禁じていたのだろうか。

——しかし思考をポジティブに切り替えてみよう。

人が増えればその分だけ経済活動も促進される。

これはもしかすると、村興しならぬ里興しに繋がるのではなからうか。

既にこれだけ話題になっているのだ。観光事業を率先して取り仕切るリーダーがいれば、成功間違いないだろう。「そうだ、朔月山行こう」的な集客率で各地から集う参拝客、そのまま里に足を向ければ経済波及効果もばっちり。かくして朔月山は引きも切らない聖地スポットとなり里は大活況、大いに潤うのであった。あれ、結果オーライじゃね？

……なんてね、世俗に塗れた思考の「山神様」もいたもんだ。

けれどこれで里の人々が喜んでくれるというのなら、それは私の本望である。

『——遠い所からわざわざご苦労様だよね、あいつら。馬鹿面並べてご機嫌伺いしちゃってご丁寧にさあ。分かりやすい馬鹿っていうのかな、ああいう突っ走りやすい人間の愚直さっていいよね。まさかヤマガミサマの正体がこんな役立たずで得体がしれなくて薄気味悪い小娘とも知らずにさあ……って何すんだよ音の！　危ないだろ！』

ぺらぺらと喋っていた天邪鬼が突然跳ね起き、目にも止まらぬ速さで飛び退いた。

おお。今の動き漫画みたいでちょっとカッコよかった。あれをお手本にしたら私ももっと俊敏になれるかな。なってどうする。

無言の蹴りが空振りに終わったエコーは、かと言って悔しがる様子もなくただ静かな湖面のような表情を湛えてじっと天邪鬼を見つめていた。獲物を狩る者の目に見えるのは気のせいかな。

……なんだから。

最近のエコーはとみに暴力的だ。いかん。

上手く話せないのは分かるけど、相手の同意無しでいきなり拳で語ろうとするのはいかんぞエコー。喧嘩は先に手を出した方が負けだと教えねば。

よし。

じりじりと天邪鬼との間合いを詰めているエコーに近寄って、つんとその灰色頭を指でつついた。

「エコー、いきなり人を蹴ったり殴ったりしたらだめだよ」

だがいきなり撫でるのはセーフ！

私、前科一犯！ ごめんよライヒ。

「いい？ 喧嘩は自分から仕掛けちゃだめ。右の頬を殴られても我慢、左の頬を殴られても我慢。それでもまだ殴ろうとしてくる相手だったら、その時全力で殴り返すの。むしろ叩きのめす。……オーケー分かった？」

無表情でこくんと頷くエコー。

『叩きのめす』

「うんうん、よろしい」

『音に変なこと吹き込んでんじゃねえよ！ 舌切り刻んで耳ん中に突っ込んでやろうかてめえ！』

なんだか天邪鬼は、私に対して日に日に口が悪くなっていくなあ。

それにしてもどこに向かって悪態ついているのだから。

「おい、私こっちだよこっち」

「……う、つるせえ！！ ふざっけんな気持ち悪いんだよ！ お前なんか大嫌いだ！」

う、うん。存じております。

そんな力一杯叫ばなくても……。

どうでもいいけど音無しの結界あってよかったね。

『来。人間見物は如何であった、朔月』

とつぷりと日が暮れ、場所はオンボロ神社の中である。

本日の妖怪達の宴はいつもより更に混沌としていた。昼の広場の熱気がそのまま神社の中に来たみたいだ。あれだけ凄惨な御供物が山積みされれば、まあ、テンション上がるよね。

山の主は寛大だ。ぎゃあぎゃああつるさい妖怪達に、自分の物である御供物を恵んでくれる。ついでに私もしっかりとそのおこぼれにあずかっていた。饅頭美味い美味い。

「はい。お祭りみたいで楽しそうでした」

饅頭の最後の一口を飲み込み、ごちそうさまでしたと手を合わせる。

大狐様の側に戻り、居住まいを正してそう答えると、私を誘惑するかのように四本の尻尾が揺らめいた。最近めつきり肌寒くなってきた、冷え性の私にはそろそろ温もりが恋しい季節である。ふおお抱きつきたい！ ふかふかのあれに身を埋めたい！ と静かに身悶えしていると、山の主がぬうつと顔を寄せてきた。ひい、嘘ですごめんなさい！ 喰われる！

『笑。ならば祭主はぬしぞ、朔月。斯様に人間が群がり来る誘因が、よもや分からぬ訳では有るまい』

「で、でも、私はあの人たちに何もしてあげられません」

『ほう？ 里の人間共の相手をしていたではないか』

「う……それはちよつと軽率だったかなあと 생각합니다。すみません」

『遮。良い、我は責めてはおらぬ。初めにぬしは誠意を以て我に詫びたであろう？ 無知故の他意無き所業を論う気など、元より有りはせぬよ』

低い唸り声と共に、のつしと頭の上に顎を置かれる。

お、重いです。

けれどその優しい言葉につられて、私はこっそりと巨体にもたれかかってみた。

山の主は特に何も言わない。ただゆつたりと尻尾を揺らすだけだ。背中がほかほかと温かくなってくる。

一人じゃないんだなあと、うつとりと目を閉じた。

『だがな朔月、ぬしの都合など人間は聞かぬだろう』

低い声が背中を伝って響いてくる。

山の主は私に恐れと安らぎを与える存在だ。近づき過ぎてはいけないような気もするし、全てを委ねてしまいたくもなる。神様ってそういうものかもしれない。

妖怪達の喧騒が潮騒のように、ざわめいている。

唯一はつきりと聞こえるのは密着している山の主が話す言葉だけだ。

低く囁くような、小さな子供に御伽噺を聞かせるような声が聞きやすい。

『愚。そう、人間なぞ勝手なものだ。在りし日を忘却に押し遣りながら、差し出される幻に盲目となる浅ましさよ。……神々は未だ夢の底を揺蕩い、地においては憂き身を糞す惨き世だ。だが約束された終焉は産声を上げた。この世に滅びと災殃を喚ぶ日もさして遠くは無いだろう』

どこの預言者ですか、山の主。

終焉とか滅びとか何やら物騒な話だなあ……。

この世界にも終末論みたいなものがあるのかな。最後の審判、末法思想。

恐怖の大魔王とかいたりして。

うーん……それにしても、あつたかくてふわふわして気持ち良いや……。

『疑。朔月、眠いのか』

「ねむくないです」

『呆。全くぬしは。……何故お前が此処に現れたのであろうな。定められた運命に齟齬を齎すためか、それとも運命の糸口となるためか。ぬしが剣を掲げれば一体何処へ向ける。神か、人か、終焉か』

その前に、銃刀法違反で捕まります。

……随分と壮大なストーリーですね。勇者みたい。
私がここに意味がある……。

存在理由って探せば見つかるものなのかな。

皆それを欲しがって生きているんじゃないのかなあ。

私は今、それがとても欲しい。

そういえばライヒは今日来なかったな。

……馬鹿兄は、元気してるかな。

メロンパンにわさび付けるなんて、お兄ちゃんはおバカだ。
早く家に帰ってばかにしてやらなきゃ……。

……思考がぐにゃぐにゃしてきた。

眠い……。

『御大』

『解。分かっておる。動き出したのだろう。……小賢しい』

……うん？

誰かが来たようだ。

『カンナ様を匿われますか』

『否。愛子に手出しは出来ぬ。契約があるからな。緑眼の民はどうした』

『嗅ぎつけられたようです。神薬花を持って直に去るか』

……二ーナちゃんのことかな。

『数奇なものよ。序幕の顔合わせは終わったと云う所か。笑。この分だとあやつも間諜共々、帝都から此処へ来るのでは無かるうな』
『御冗談を。——朔月の娘はここに？』

『是。話を最後まで聞かずに眠りおった。無邪気なものよ』

『……不気味では。魔に惹かれぬにも関わらず忌子と親しむなど。思惑が読めません。恐れながら、天邪鬼の言が正しいように思えて参りますが』

酷い言いようだ……美声だけど。この声は鴉天狗かな。

『珍。今宵は饒舌だな。朔月が気に掛かるか』

『警戒が必要かと』

『無。ぬしもこれと関わってみるが良い。珍妙で誠愉快ぞ』

ち、珍妙。

もういいや、寝る……。

『御大』

『睨むな。害せば幽谷響が黙ってはおらぬぞ。——さて』

ふわり、と体が浮いた気がした。

誰かの手が私の膝裏と背中を支えている。

……あれ、これだだろう。

『御大』

『考。朔月に寢床が必要だな。我の尾にくるんでやっても良いが、用事が出来た。出掛けて参る』

『そのお姿で行かれるので』

『是。人間を徒に脅嚇せぬには、此の方が良からう』

『——十二分に驚かせるかと』

『左様か？』

はあと嘆息する気配がした。

気苦労が多そうな溜息の仕方だ。

『早。其れは良いとして。朔月の寢床を直ぐに用意せよ、鴉の御意』

『女郎蜘蛛が襲わぬよう気を付けよ』

『御意』

『牛のに踏み潰されそうな場所は避けておけ』

『御意』

『天のが寝首を掻くやもしれぬ。いつも通り見張っておれ』

『御意』

『ああ、其れから……』

……眠い。

が、寝る前に突っ込んでもいいですか。
もう早く行けよと。

第6話 横顔少女と指見る人々 2

リインと一声が闇を裂く。

余韻を帯びて闇に溶け入ると、間を置かずしてまたどこからか一声が上がる。

涼やかに入り乱れ、絶え間なく重なる音。ひっそりと静寂を分け合うようなそれは、いつしか大気を震わせる旋律へと変わり、枯れ草さざめく秋夜の底を凜と綾なした。

けれどその数は、初秋の頃と比べてぼつぼつと減ったように感じる。

一つまた一つと。

夜毎にほっそり絶えゆく命の灯火があるのだろう。移ろう季節に抗いもせず、羽が破けるまでひたすら鳴き続ける。それはとても強く、儚く、惜しいことだと思った。

そこまで考えてからふと気がつく。ああ「減った」と分かるほど、「惜しい」と思うほど、每晚熱心に耳を傾けていたのかと。

虫が出す雑音^{ノイズ}を味わうなんて妙な習慣だ——そう思っていたのは、他ならぬ自分であったのに。

「眠れないのかい、ニーナ」

なぜ虫が騒ぐ声をわざわざ聴こうとするのか。

そう尋ねた時、キリナはこちらの顔をまじまじと見つめ、そして静かに微笑んで言った。

——あんたには聞こえないのかい。

「あ……起こしてしまいましたか、おばあちゃん」

「年寄りってのはね、ちよいと物音がただけで目が覚めちゃうもんなんだよ。どうしたんだい、廁かい？」

「いえ。少し寝付けなくて……夜風にでも当たろうかなと」

——あれは秋の使者が奏でる音さ、目を閉じてよく聴いてもら
ん。

異国の老婆は、皺だらけの指を草叢に向ける。まるでそこに答えがあると言つように。

——そら、聞こえてくるだろう？

恋しい者を探して闇路に惑う、哀れで愛しいあの声が。

「ああ、灯りは着けなくていいよ。どうせまた直ぐに寝るからね」

「起こしてしまつてすみません」

「何言つてんだい」

すぐに寝る、と言いつつもすっかり目が覚めてしまったのだろう。布団に肘をつき半身を起こそうとキリナが身動きした。ニーナは取り出そうとした油皿を慌てて棚へ戻し老婆の体を支えるために手を伸ばしたが、次の瞬間ピクリと指先を戸惑いに揺らした。

着物越しに触れた背骨の鋭さ。……この老婆は、こんなにも痩せていただろうか。

まるで冬の枯れ木のような。

「骨に皮を貼つ付けて動いてるのさ、わたしや。まあ直に骨だけになるだろうね」

とつさによぎったニーナの思考を読み取ったかのように、キリナがからからと笑い声を上げる。内心ぎくりとして、思わず彼女の内流魔力をまじまじと確認したが特に異常は見られなかった。しつかりとした生命力がキリナを取り巻いている。

「そんなこと、お願いですから冗談でも言わないでください。……寒くはないですか？」

「平気だよ。おや、クラトはまだ帰って来てないのかい。今日は随分と遅いねえ」

「ローザさんと折り入ってお話があるそうです」

「里長とかい？ あの子は里長だけにや懐いているからねえ」

「な、懐いているのですか。喧嘩ばかりしていますけど」

苦笑しながら答えて、ふとニーナは睫毛を伏せた。

——ローザは神薬花を狙っている。

数日前、その紺色の双眸に刃を宿した少年が淡々とそう告げた。

奇跡の治癒花の存在は、無論里の人々の間では周知の事実である。妙なる花は山神からの贈り物。信仰を貰った者に施された慈悲の証。

祈りは届き、山神は応える。

それがキリナの一件ではっきりと実証されたからこそ、我も我もと皆山を目指したのだ。

最初に起こったその一連の花騒動が里の長たるローザの耳に伝わらぬはずがない。増して、ローザは人嫌いのクラトとも親しくしていた男だ。床から起き上がれぬほど病に苦しむ少年の姿を、里の誰よりも近くで目にしてきただろう。つまり彼が神薬花の力を信じるには、日の下で歩いているクラトを一目見るだけで十分だったのだ。

目の前で奇跡を見せつけられた、という事実は良くも悪くも人の心を動かす。

故に、ローザが神薬花を欲する気を起こしたのだとしても仕方がないことだ。

そうニーナは結論付けていた。

まさか面と向かって「欲しい」と言われるとは思っていなかった

が、こちらが身構える前にあれほど開けっ広げにねだられてしまえば警戒する気も失せてしまうというもの。

さすがに直接ねだられたからと言って、おいそれと神薬花の蜜薬を渡すつもりはなかったが、どこまでも明朗闊達に笑う男に対してニーナはいくらかの申し訳なさを感じていた。相手の警戒心をするりと解いてしまう力が、確かに口ウザにはあると思う。

しかしクラトは男の裏にある「何か」を感じ取ったらしい。

あの少年は時折、恐ろしいほどの洞察力を見せる。

冴えた思考で紡がれる言葉は切れ味を持ち、時に容赦なく人を切り捨てる。長い間その目で死の影を見据えてきたためか、嘘や誤魔化しをよしとしない節があった。

だから必要だと判断すれば、信頼する人間を疑う言葉であつても淀みなく口にできるのだ。——例え自分自身がその言葉に傷付くとも。

伏せた顔をゆるりと動かし、ニーナは部屋の隅に目を向けた。

そこにはぴったりと壁に寄り添うように置かれている薬籠があつた。異国の家具の中に紛れ込んだそれは、もうすっかり部屋の一部として風景に溶け込んでいる。いや、そんな風に見えるほどニーナの目に馴染んでしまっているのだ。分かつていた。最初から溶け込めるはずなどなかった。あれはニーナの旅の相棒なのだから。

ぎゅっと膝の上で拳を握る。

分かつていた。

発つべき時は、随分前に来ていたのだと。

荷馬車を軽々と持ち上げたクラトを目の当たりにしたあの日、神薬花の力はもはや疑いようのないものだ。ニーナは確信した。今まで積み重ねてきた苦勞や苦惱が、何もかも報われる。とうとう悲願は叶ったのだ。

ただその喜びに隠れて一つだけ。
一つだけ、叶わないものを作ってしまった。

隣で、ふうと長い息が吐かれた。

見ると、薄闇に包まれた中でキリナがじつとニーナを見つめている。何もかも見透かすようなその瞳は、クラトとの血の繋がりを強く感じさせる。とても真っ直ぐで、逸らしがたい。

「ニーナ」

枯葉がかさりと落ちるように、名を呼ばれた。

静かに紡がれたそれが真実の名ではないことを、少しだけ哀しく思う。

「はい」

「行くのかい」

「……はい」

どこへ、とも、なぜとも聞かれなかった。

口調はあくまで何気なく、けれど重い響きを持ち、やはり枯葉の散る音に似ていた。

「知ってるかい。謝秋の満月はね、一年で一番明るくて綺麗なんだよ」

「クラトさんが前に教えてくださいました」

「そうかい。ああ、あんたはそれでも行くんだね？」

「はい」

沈黙の上を虫の音が凜と駆け抜ける。

——今宵の月はどんな形だっただろうか。

以前は気にも留めなかったことに、ふと思いを馳せた。

このまま四季折々の月をただ美しいと言って眺めてゆけたなら、どんなに良かっただろう。見上げる月の輪郭は日々移り変わり、決断を迫るかのように時の経過を知らせてくる。

こうしている間にも、一日また一日とニーナを置いて通り過ぎていく。

「まったく、なんて顔してんだい。わたしやあんたに心底感謝しているんだよ」

空気を切り替えるように、ふっと息をついて微笑む気配。

「ありがとうねニーナや。あの子を救ってくれて」

「……ごめんなさい」

「馬鹿だねえ、そんなに流暢に東言葉が話せる癖に。こういう時はね、どういたしましてって言うもんだよ」

「あたし……」

「神薬花で助けたい人がいるんだろう？　こんな場所まで娘っこ一人でやって来るんだからねえ。ああ、初めて会った時のあんた、私があげた肉饅頭を犬っこみたいに食らいついて。あれはおかしかったねえ」

あの時のことを思い出したのか、ほっほっほとキリナが体を曲げて笑う。

かあと耳を赤くしてニーナは俯いた。辛くて、空腹で死にそうだったのだ。無我夢中で食べたあの肉饅頭は本当に美味しかった。今までの人生で一番、美味しかったのだ。

目尻に出来た涙を拭ったニーナの命の恩人は、その釣り目気味の双眸を柔らかく細めた。

「あんたはよくがんばってるよ。……安心おし、引き止めたりしやしないから。この冬は厳しいからね、謝秋が終わる前に出立するのが一番いいだろうよ。必要な物があるんだったら里の連中に甘えりゃいいさ。色々薬を作ってやってたんだって？　皆喜んであんたの旅支度を手伝うだろうよ。もちろん私もね」

ぽんぽんと告げられる言葉は温かく優しく、ニーナをたまらない気持ちにさせた。

胸が詰まる。喉の奥にも、何かが詰まっているようだ。うまく声

が出せない。

「おばあちゃんに拾ってもらえて、神薬花を分けてもらえて、全部あたしの方です。あたしの方が感謝してもし足りないくらいです……！」

慣れない旅に疲労しきっていた。

伝説の花など本当はどこにも無いのではないかと、何度も不安が頭を掠め、焦燥と疲労ばかりが募っていた。神薬花を見つけた時の驚きと歓喜は計り知れなかったが、それ以上にニーナを癒したのは、ここでのささやかな生活だったのだ。

キリナがいて、そしてクラトがいるこの暮らしが好きだった。

別れが来ることを知っていたけれど、知っていたからこそ……。

「感謝するなら山神様にしとくれ。出立する時にや、参拝をきちんとしていくんだよ」

それからね、と老婆は言いおいてニーナの肩にそつと手を置いた。「それから、忘れないでいておくれ。あの子を……クラトのことを約束してくれるね」

骨の浮いたその手を取って握り締める。脳裏に少年の顔を思い浮かべ、荒れ狂う万の言葉を胸の中へ押し込めることに成功したニーナは、一言だけ返事をした。

「はい」

神に誓いを立てる時のようにはつきりと、曇りなく。

けれど神に誓うのではなく、ただこの心に誓った。ただ一つだけ叶わないこの恋心に。

「なら、いいんだよ」

満足そうに頷き、さらりとニーナの頭を撫でるとキリナは布団をかぶって横になった。

「夜風に当たってくるんなら、上に一枚羽織ってからいきな。わたしやもう寝るよ」

もう話すことはないと言うように、あっという間に寝息が聞こえ始める。

彼女の上に掛け布団を丁寧にかけ直し、しばらくしてからニーナはゆっくりと立ち上がった。言われた通り着物を一枚ふわりと肩に羽織ってから、足音を忍ばせて部屋を出て行く。

だから知らなかった。

誰もいない部屋で、老婆が一言呟いたことを。

「……クラトを頼んだよ、ニーナ」

少女は知らない。

知る術は二度となかった。

＊＊

外に出ると、深い暗闇と虫達の涼々たる声がニーナを出迎えた。夜空を見上げて月を見つけることはできなかった。その代わりに、涙は零れずにすんだ。

——この国の人間は月ばかり見ている。

いつだったかクラトがそう言っていたことを思い出す。

だから暗い道の上にも顔を上げて生きようとするのだろうか、

と頭の片隅で呟く。

手の甲で目をこすりながら何となくクラトがいる里の方を見やると、ちらちらと灯りが揺らめいていた。

夜更けの里に頻繁に人が出入りしている。それは、ここ最近ではもはや珍しいことではなかった。山神様の噂をどこからか聞きつけた者たちが、連日山の頂きを目指してやってくるのだ。ニーナがここへ来た時と比べると、里は格段に賑やかさを増していた。

奇跡を求める人間の姿は、無数の神々溢れるこの異教の地においても、自国のそれと同質であるらしい。

さくさくと草の上を無意味に歩きながら、もし、とニーナは思考してみる。

——思考することで少しでも気分を紛らわせたかった。

もしキリナに神薬花を贈ったことも、里の人々の声に耳を傾けていたことも、全てが「山神様」のほんの気紛れだったとしたら——？

だとすれば、かの存在は今頃、山のどこかで連日の大騒ぎを迷惑がっているのではないだろうか。面倒なことになったと人間達を見下ろしている山神様……いや朔月様を想像すると、不敬かもしれないがニーナは「彼女」を励ましたいような気分になった。

里の者いわく山神様は少女の声をしているらしい。

立ち止まり、目を閉じて涼風をすうと胸に吸い込む。

ざわざわと闇の奥で木々が囁き、足元で虫がリインと存在を主張した。

一度クラトと山に行った時、川辺に居た正体不明の存在。

やはりあれこそが朔月様だったのかもしれない。

あの時のニーナは、かの存在に言い知れない恐怖を覚えた。

けれどもそれは、よく考えてみると己の眼に対する過信から来る

高慢な恐怖であつた。

常人には見えない魔力が鮮明に映り、形を隠す技を持つ妖魔ですら感知するこの慧眼。この眼で見通せない存在などあるはずがないと、無意識に思い上がっていた。そんな傲慢な自分の隣で、クラトだけが朔月様の存在を見抜いたのだ。

ああ、と嘆息が唇から漏れる。

（ああ。クラトさんは、将来きつと凄い人になるわ）

神薬花が少年に齎した力は、予想を遥かに超えるものだった。

——絶大な力の萌芽。

この両眼にはよく見える。日々彼の中で膨らみゆく驚異的な魔力の胎動が。

それはいずれ、溢れんばかりに狂い咲くだろう。

上級妖魔に匹敵し、なおかつ屈服させるほど強大に。

だが、クラトならば何も心配することはない。

それは確信に近かった。

彼は迷いなくその目に「神」を捉えた。自然体でそんなことができる少年だ。彼ならば、いずれその身を包むであろう膨大な魔力に精神を喰われることも、またその強大過ぎる力に振り回されるようなこともないだろう。

それどころか、むしろあつさりと使いこなしてしまう気がする。

それこそ、いつものように素つ気なく「勘」と言いながら……。

想像するとそれはあまりにも彼らしい気がして、思わずくすりと笑みが零れた。

ざあ、と風が吹く。

もうそろそろ部屋に戻ろう。

クラトの帰りが遅いことが気にかかるが、明日は旅支度をしなければならぬ。出立の準備は早いに越したことはないのだ。散漫な思考を締めくくりながらくると踵を返した直後、ニーナはハッと目を見開いた。

ぞ、と肌が異変に舐めとられて総毛立つ。

——妖魔の気配だ。

人里近くに現れるはずがないとすっかり油断していた。

不味い、と唇を噛んだが悔やんでももう遅かった。今のニーナは「武器」を何一つ持っていない。

気が付くと、あれほど辺り一帯に満ちていた虫の音が消えていた。沈黙に支配され、森閑とする周囲の空気。耳が痛いほどの静けさに、ゴクリと唾を飲む音がやけに響いた。

静寂は、大物が「出る」直前の兆候だ。

(……いる)

数歩先にある林の中に、何かが潜んでいる。

ニーナは、身の内にある内流魔力をずっと両眼に集中させ一時的に感度を上げた。すると木々や草が光の粒を帯び、夜の世界がぼうつと淡い燐光を放ち始める。

暗闇を制し、敵の動きを知る「夜目」の技である。

だが局所的な魔力の操作には相当の集中力が必要で、そう長い時間は保たない。一瞬の気の緩みも許されなかった。急に襲ってくる場合を想定すれば、迂闊に動くこともできない。

魔と対峙する久々の緊張感が、ニーナの心音をどくどくと速めた。がさりと大きく草が揺れる。

(来るっ！)

ひょー。

「……っ！……？」

現れたのは確かに妖魔であつた。

赤茶色の小さな体躯と、柔らかそうな毛をたくわえた尻尾。
その尻尾がふりふりと軽く揺れた。

『来。来』

目の前にいたのは、低級も低級の小妖魔——赤鬼狐せきこだつた。

壮絶な肩透かしを食らつて呆然と固まっていると、赤鬼狐はトコトコと何の躊躇もなくこちらへ寄つてきた。そして信じられないことに、その小さな前足で二ーナの爪先をてんと叩いてきたのだ。警戒心の強い小妖魔には有り得ないほどの人懐っこさだ。

混乱の境地に叩き込まれた二ーナは、妖魔相手について間拔けな返事をしてしまった。

「え……あ、な、なんでしょうか」

きゅうと鳴く赤鬼狐。

気のせいかな、やや得意げな声に聞こえる。

『行。待。来』

「行く、待つ、来る？」

思わず首を捻る二ーナ。

『違！ 待。行。来！』

小さな妖魔は焦れたらしく、毛を逆立てて何度か飛び跳ねた。
丸くて愛らしい目をきりと上げ、ふんふんと鼻先を林から二ーナ、二ーナから林へと交互に動かす。二本の尻尾も忙しなく動き、さかんに何かを訴えかけているようだ。

「えと。もしかして、待っている・行こう・ついて来い……ですか？」

『是！ 是！』

大正解と言いたいのかぴょんと跳躍した赤鬼狐はくると宙で一回転し、着地するやいなやタタタと林の中へ駆けだした。畏かもしれないと思ったが、二ーナの足は咄嗟にその後を追いかけていた。追い続けるような虫の音を背後で聞きながら。

不思議なことに、林の中は奥へ行けば行くほど幻想的な燐光を増していった。魔力を集中させて「夜目」を作る必要もない。まるで一足ごとに夢の中へと迷い込んでいくような危うい心地がする。

数歩先にある尻尾は、歩くたびに調子よく右へ左へと揺れ、時々ちらりと背後の二ーナを確認しては先へ先へと進んで行く。

一体どこへ向かうとしているのだろうか。

しばらくの間林の中を歩いた後、小妖魔は突然ぴたりとその足を止めた。

耳をぱたりと伏せ、うやうやしく頭を垂らして短く鳴く。

『伴』

そこは蔽かな光が満ちた空間だった。

木の表面に黒い陰影がくつきりと刻まれるほど周囲は明るいが、光源ははつきりとしていない。薄い紗が一枚掛かったような空気がひやりと二ーナの肌を撫でた。数ローメル先には朽ちて苔むした古木がどつしりと地面に横たわっている。よく見ると、その上に誰かが腰かけていた。

と、赤鬼狐が嬉しそうに尻尾を振りながらその人物の下へと近寄っていく。

『労。大義であつたな』

『否。易。任！』

『笑。左様か、其れは頼もしいな』
『是！』

足元に来た小妖魔を長い指が撫ぜる。

屈んだ背から、艶のある髪がさらりと流れた。

やがてゆつくりと身を起こし、優雅な動作でその人物はこちらを振り返った。

細い瞳孔を宿した双眸がひたりとニーナに向けられる。

『参。良く来たな、緑眼の民よ』

背筋が粟立つような低音が、形の良い薄い唇から紡がれた。

魔力の奔流に目が眩む。人知を超えた清浄さ、そして人にあらざる歪みが渦巻いている。先ほど感じた強大な魔の気配は、間違いなくこれだ。

これほど並外れて相反した魔力を纏う存在は一つしかない。

恐ろしく美麗な姿をしたその男は——上級妖魔だった。

「わ、わたくしを、ご存知なの？」

驚きのあまり、西大陸の言葉が口について出てしまう。

だがこれほどの魔力を身から滴らせる大妖ともなれば、もはや言語の差異など意味を為さないだろう。現に男はその酷薄そうな唇を吊り上げると、ニーナに薄らと微笑を見せた。

魂を吸い尽さんばかりに嫣然と甘く、身を凍らせるほど冷酷な微笑だった。

「……貴方はどなた、なぜわたくしをここへ招き寄せたの？」

震える声でニーナが尋ねると、男はその切れ長の目を愉快そうに
ついと細める。

『心当たりが無いとは言わせぬぞ遠国の旅人。問。望んだ物を見つけた気分は如何だ』

まさか。

「貴方が神薬花を——？」

——では、朔月様とはこの男なのか。

ならば里の者が聞いた「少女」の声とは一体なんだったのか。

神は、「山神様」はどこにいる……？

思考が上手く回らず呆然としてみると、何が可笑しいのか美しい妖魔はくつくつと肩を震わせ始めた。上質な戯言を聞いた貴人のように気品のある笑い方だ。

やがて笑いを収めた男は、緩やかな速度で二ーナの元に歩み寄ってきた。一步進むたびに重ね着た衣の裾が惜しげもなく地に引き摺られる。逃げなければと本能が警告を発したが、底冷えするような視線に囚われて体が動かない。焦らすようにゆっくりと目の前までやって来た男は、その長身をそつと折って二ーナの頬に顔を寄せた。

『明。一つ、教えてやろう』

低く優しく、慈愛にも似た声音で妖魔が囁く。

まるで冥府へ行く者に格別の慈悲を見せるかのように。

『この山の何処にも、神など居ない』

リイインと遠くで虫の音が響いた。

——あんたには聞こえないのかい
恋しい者を探して闇路に惑う

哀れで愛しい、あの声が

第6話 横顔少女と指見る人々 3

夜の淵に底はない。

あるのは寢床の安らぎではなく、何もかも飲み下す貪欲な闇の腹だ。暗い胃の腑には獣や妖が隠れ、悲運な者の喉を裂き、絶命の叫びを嚙っている。

闇夜から安寧の帳が削ぎ落とされた瞬間、人は転げ落ちるようにその深淵へと姿を消す。夜の顎あごをくぐるということは、異界の門を自ら押し開くことに相違なかった。

灯りを持たずに夜道を歩いてはならない。

人気のない暗がりには足を向けてはならない。

この国の者ならば年端のいかぬ子供でも理解していることだった。

——この国の者であれば。

「ニーナっ！」

異国の少女の名を叫ぶ。

普段の冷静さをかなぐり捨て闇路の上に声を張り上げると、手に持った手燭の灯りがぼんやりと少年の顔を照らし出した。

足元に蟠わだかまる虫の音が散り散りに乱れ、垂れ下がった薄の白い穂首がゆらゆらと蠢く。

（くそ……どこだ、どこに行ったんだ）

耳を澄ませても呼びかけに答える声はない。

予感が確信へと塗り変わり、じりじりと濃さを増してゆく。まるで無数の針に全身を刺し貫かれているようだった。痛いほどの焦燥に苛まれながら、少女が通ったであろう道を駆けようとして、ふと少年は夜空を見上げた。

闇腹に囚われたのか、木々の間に月はなかった。

「朔月山に、神が、いない……？」

震える声で呟くと、大妖は静かに笑みを深めた。
たったそれだけの仕草で喉の奥が急激に干上がったゆく。優艶な
人の姿など、所詮仮初めの形に過ぎないのだろう。男の眼差しは、
狙った獲物の喉にやんわりと牙を突きたて、その感触を愉しむ獣の
それであつた。

『薄。嗚呼、人間とは斯くも愚かしい。花が開く道理も知らず花に
群がり、我欲に濁る目が映すは指ばかり。僥幸を求め餓えを競うも、
真の餓えに喘ぐ者には終ぞ気付かぬ』
まこと

まるで雅な詩歌を吟ずるかのように、麗朗と言葉が紡がれる。
ニーナはゆつくりと唾を嚥下し、二、三步後ずさつた。それでも
妖魔との距離は不自然なまでに近く、放たれる圧迫感から逃れるこ
とはできなかった。

眉根に力を込め、浅く息を吐く。

自分が慧眼者であることをこれほど恨んだことがあつただろうか。
間近で浴びる鮮烈な魔力に、両眼が悲鳴を上げている。

「花。花、とは……エニ・レニ・フロ・神薬花のことを、仰つて、いるのね」

この男は確かに高位の魔だ。切れ切れの問いを口にしながらニー
ナはそう実感していた。婉曲な言い廻しを好んで用い、舌に乗せた
言葉でもって人心を惑わせる。高位魔の典型だ。

ニーナは緑の双眸を閉じ、必死で記憶にある言葉を手繰り寄せた。帝都に滞在していた際に知り合った退魔師は、なんと言っていたか。

——物の怪の言葉に真剣に耳を傾けてはいけないよ、ニーナ。

それでは意のままに翻弄されるだけだからね。けれども貝のように口を閉じていてもだめだ。奇怪で謎めいていて捉えどころのない話に引き回されなければ、こちらから対話の鍵をうまく見つけ出し、打って出なければならぬのさ。ああ全く、魔とは面倒なものだよ。

思考を巡らせた後、ニーナは恐る恐る瞳を開けた。

肩に羽織った衣の袖をぎゅうと握る。

「わたくしは確かに、貴方の仰る通り神薬花を望み、この地へ参りました」

肌寒いと感じるのに、頬の上を汗が滑り落ちていった。

「『花が開く道理』、それはいかなる意味を持っているのでしょうか。わたくしが調べた限りでは、神薬花が咲く理由など、どの文献にも記されていないかった」

帝国随一の大図書館に赴き、御伽草子から禁書に至るまで膨大な量の書物に目を通してきたのだ。だから断言できる。神薬花の誕生に関する謎を解き明かした文献は、ただの一冊も無いと。

「……けれど、その、今の貴方の言いようを聞くとまるで」

それは、何者かによって故意に隠蔽されているのではないかと勘繰りたくなるほど徹底的だった。ひどく、違和感を覚えた記憶がある。

「まるで、神薬花と、神の不在に、何か繋がりがあるような——」

『喰らったのだ』

突如、大妖がニーナの言葉を遮った。

喰らった？

一体何をと尋ねようとした次の瞬間、顎を捕らえられていた。

『過。故に神葬の花が開く』

低い声音からは一切の感情が読み取れない。

見上げると、片手でニーナの顎を持ち上げたまま男はぞつとす
ほど美しい笑みを湛えていた。細い瞳孔に仄暗く苛烈な色が躍る。
獲物の喉を食い破ろうとしている目だ。

『苛。さて、不帰の客となるを欲するか。我が今此処で屠つてやつ
てもよいな。観。よく見れば中々に清廉な魂魄を宿している上、見
目も悪くは無い。緑眼の民よ、お前の温かな骸を月の下に晒すも一
興だな』

「……っ、く……あ」

みしりと骨が軋み、首が締まる。

あまりの苦痛にニーナが呻くと、さらりと赤茶色の髪が影を落と
した。

『愉。無垢なる純潔の血肉、さぞ蕩ける様に美味かろう？』

総毛立つようなおぞましい声が耳を刻む。ぐぐと力がさらに込め
られたのが分かった。

殺されてしまうのだろうか。

霞む意識の中、ニーナはふと思う。

これほど簡単に命運が尽きるのか。

必ず戻ると決めたのに、この異国の地で呆気なく死を迎えるのだ
ろうか。

何も為せないまま。何も救えないまま。

ああ、それだけは。

それだけはできないのに。

もがいた拍子に緑の瞳から大粒の涙が一つ零れ落ちた。頬に濡ら

す感触がひどく冷たい。

虫の音が物悲しい余韻を残しながら、遠くの方で鳴いている。
あの虫たちは今も闇路に惑っているのだろうか。

不意に、一人の顔が瞼に浮かんだ。

——たすけて。

（助けて……クラトさん……！）

「ニーナ！」

はっと顔を上げる。

必死で目を動かすと、少年の姿が視界の端に映った。
雑木林が途切れた場所に立ち、こちらに向かって弓を引き絞っている。

その釣り目気味の瞳と視線が合った途端、ぼろぼろと一気に涙が溢れかえった。湧き上がるように安堵感が胸を満たしてゆく。

「ク……ラト、さ……」

「そいつから手を離せ」

冷え冷えとした低い声と同時に、ひゅっと鋭く風を切る音がした。
微塵の迷いもなく矢が放たれる。

しかしそれが妖魔の体を射抜くことはなかった。耳障りな甲高い音が辺りに響いたかと思うと、次の瞬間にはクラトの足元に矢が深々と突き刺さったのだ。

魔力の防壁。

いつの間にか、ニーナと大妖を囲むように結界が張り巡らされている。

「だめ、です……クラトさん、結界が……」

息も絶え絶えになりつつそう言つと、さつとクラトの表情に苦みが走った。

「聞こえねえ。くそ、そつから何言ってるのか聞こえねえんだ、二ーナ！」

『当。音無しの結界ゆえな』

からかうように妖魔が応じる。

突然の乱入者にも全く動じていないらしく、明らかにこの展開を楽しんでいる様子だった。

二ーナは弛緩した体に鞭打って足を動かし、蹴りを入れるために体を捻った。

とにかく死に物狂いで抵抗しよう、足掻くことすらせずに安易に絶望するなど生への怠慢だった。クラトを目にした途端、燃えるような「生きたい」という気持ちが一ーナの体を支配する。

自分の命運を決めるのは、自分以外であつてはならない。すると、あれほど首に絡み付いていた男の手が呆気なく外れた。ついでのように地面の上へと体を放りだされる。

これ幸いとばかりに二ーナは受身を取り、クラトの方へ鞠のように転がって素早く大妖から距離をとった。結界のぎりぎりまで離れたところでようやく膝をつく。

空気を求めて大きく息を吸った直後、肺が震えた。たまらずその場で激しく咳き込むと、不快な血の味が口の中に広がり、猛烈な吐き気がこみ上げてきて涙が滲んだ。ばくばくと打ち鳴らされる鼓動を聞きながら、ああ自分はまだ生きているのだなと二ーナは妙に感動してしまった。

大妖の動きに警戒しつつ周囲にざつと目を走らせる。

薄明るい空間全体がちょうど半円状の膜に覆われているようだ。なんと強固で精度の高い結界だろうか。爪の先ほどの綻びすら見当たらない。大妖自身が手を貸してくれでもない限り、この完璧な魔力の檻から抜け出すことは不可能だろう。

どう動くべきかと唇を噛んだとき、不意にびいんと空気が鳴動した。

周囲の景色に波紋が生じる。

慌てて背後を振り返ると、結界に向かって拳を繰り出している少年の姿が目に入り、ニーナは再びげほつとむせてしまった。

「な、何を……クラトさん！これは物理攻撃で破れるものではありません！やめてください、骨が砕けてしまいます……！」

「いや、だから何言ってるのかさっぱり聞こえねえんだって。まあいいか、ちよつと待ってるニーナ。こいつをぶつ壊して直ぐにそっち行くから」

「無理ですってば！もう、触った感じで分からないんですか！？やめ、ああ、手から血が出て……！」

「分かってるから、落ち着け」

「本当ですか！？早くやめてください！」

「早く壊せって言ってるんだろ」

「全、然、違いますっ……！」

ニーナは頭を抱えてしまいたくなった。
なぜ。

なぜ、この少年はこんな無茶苦茶なことをするのだ。

結界を素手で殴るなど聞いたこともない。ここへ来てくれただけでもう十分だった。あとは一人でなんとかするから、一人でもやってこれたから、もうやめてほしい。あんな……あんなに手を血まみれにしてまで、なぜ。

「守るから」

びいいん、と結界が激しく震えた。

壁の向こうにいる少年をニーナは凍りついたように見つめる。

「俺が、守るから」

皮膚が破け肉が削れ、少年の手から鮮血が噴き出す。

「だから、お前を傷つけるやつは絶対に」

一歩足を引き、真っ赤に染まった拳が乱暴に振り上げられる。けれども紺色の双眸は淡々と凪いでいた。そう、この少年はいつも静かな目をしているのだ。その真っ直ぐな眼差しにどうしようもなく惹き付けられ、目がそらせなくなる。

「……絶対に、許さねえ」

ご、と鈍い音がした。

結界の表面が四方八方へ波打ち、膨張した魔力が歪みを帯びる。

ふと風を感じた次の瞬間、爆風が巻き起こった。

硝子が粉々に砕け散るような音が鳴り響いた一拍後、凄まじい強風が二ーナを襲う。荒れ狂う風の咆哮を真正面から食らい空へと吹き飛ばされそうになったが、ぐいと何かに肩を掴まれて危うく難を逃れた。そのまま強引な仕草で頭を引き寄せられ、髪に指が差し込まれる。

固く閉じていた目を開くと、二ーナを抱き込むようにしたクラトが妖魔を激しく睨み付けて立っていた。激烈な色を纏った彼の内流魔力が尋常ではないほど膨れ上がり、暴走が外界にまで達している。雑木林の木々が太い枝を大きくしならせた。

赤や黄の枯れ葉が宙を舞い、雨のように地に降り注ぐ。

もはやそれは、人が為し得る光景ではなかった。

「こいつに触んじゃねえよ、物の怪が」

莫大な魔力をその身から氾濫させながら、研ぎ澄まされた刀身のごとき静謐さで少年が呟く。彼の視線の先には、四本の尻尾を持つ巨大な天狐が泰然と立っていた。

舞い散る無数の枯れ葉の中で、炯々と輝く二つの眼が満足そうにすつと細まる。

夜の淵に息づく者が、安寧の帳を削ぎ落とす牙を大きく剥き出した。

——笑ったのだ。

不意に、闇腹から白い月が出た。
欠けた部分は闇が埋めていた。

＊
＊

欠けて、満ちて、月が出る。
あれが月だと指し示す、その指ばかり人は見る。
月があるのに指を見る。
月がなくとも指を見る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6749n/>

山神少女

2011年11月12日03時19分発行